

# 中寺廢寺跡



靈峰大川山から見た中寺廢寺跡

2007年7月

まんのう町教育委員会

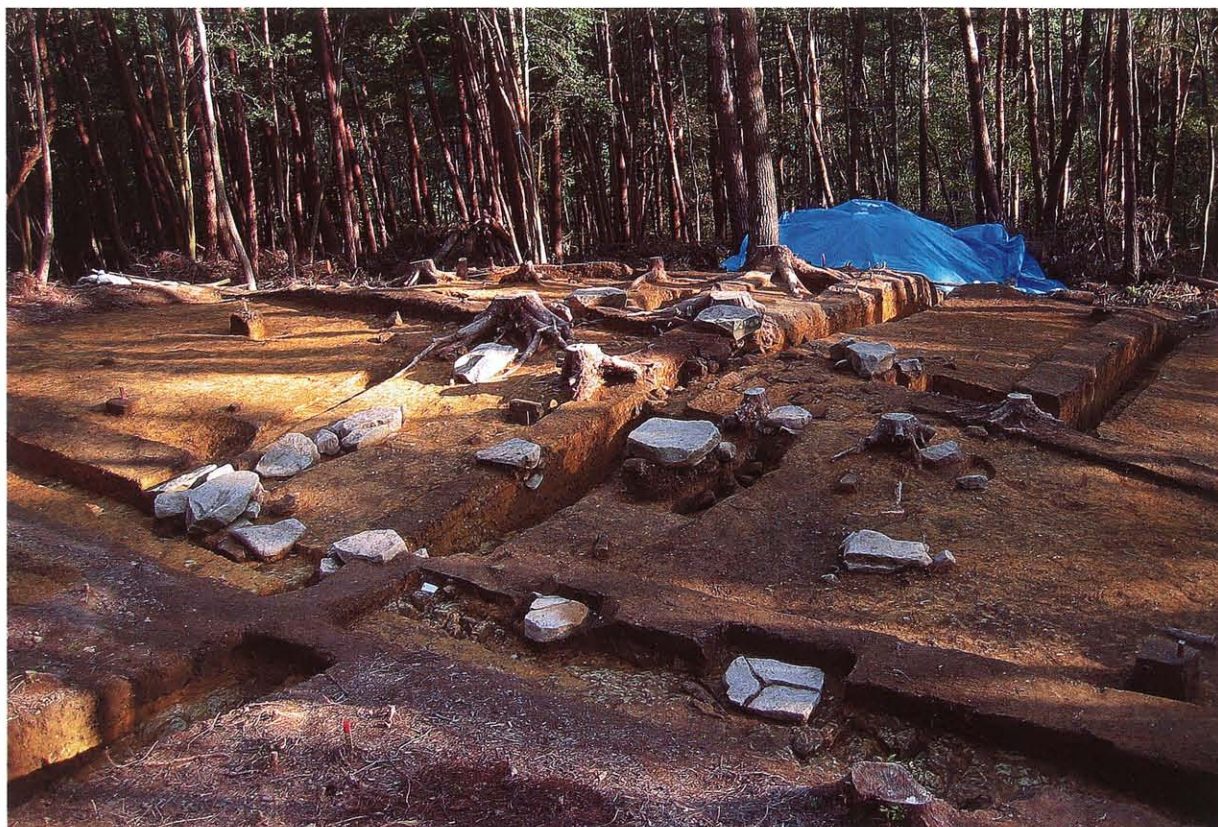


A) 中寺廃寺跡遠景 (北東より)

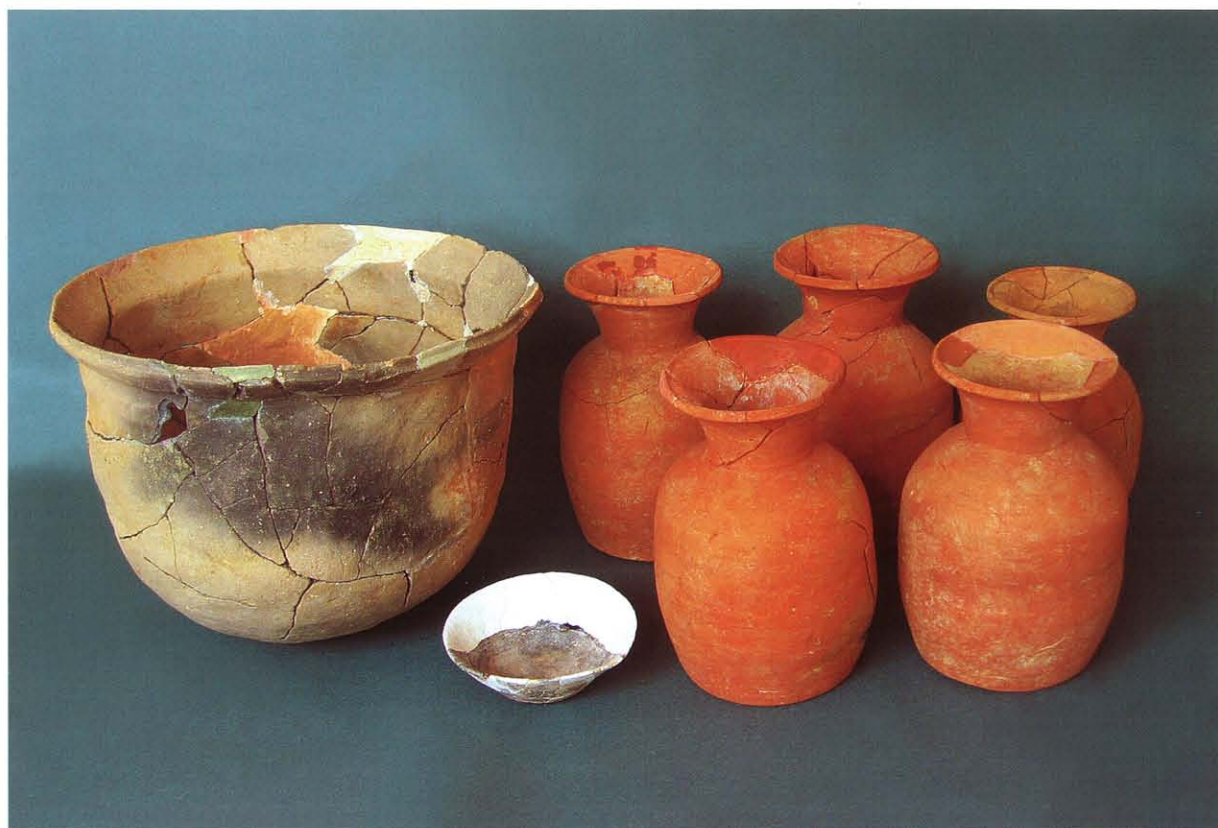


B) 中寺廃寺跡遠景 (南東より)

図版2



A) A地区第3テラス完掘状況（北西より）



B) A地区第3テラス心礎下部遺構出土遺物



A) B地区第1テラスより大川山を望む(北西より)



B) B地区第2テラス出土西播磨産多口瓶



C) B地区第2テラス多口瓶出土状況



D) B地区第2テラス出土越州窯系青磁碗

図版4



A) C地区石組遺構2 落石除去後状況 (南より)



B) C地区石組遺構9 落石除去後状況 (右下が北)

**A): 諸都合により非公開**

A) 「西村家文書」 「殿様御鷹野被仰出候二付峯筋御往来道法方角絵図指出之控絵図」

**B): 諸都合により非公開**

B) 「西村家文書」 文化2年丑2月 「絵図 (まんのう町造田柞野谷付近)」

# 序 文

まんのう町は、香川県の南西部に位置し、讃岐山脈の山並みを背景にした水と自然に囲まれた町です。町名の由来となっている日本一のため池「満濃池」は、讃岐の水瓶と言われており、古来より多くの恵みをもたらしてきました。

まんのう町の南方、阿讃国境である讃岐山脈から北西に延びる尾根に、今から約千年前の山岳寺院遺跡「中寺廃寺跡」は所在します。寺院の創建・沿革に関わる古文書記録は残されていないものの、代々まんのう町に暮らしてきた人々によりその存在が語り継がれてきました。まんのう町教育委員会では、地域の貴重な文化財である「中寺廃寺跡」の発掘調査を平成16年度から継続して行なっております。

平成16年度は塔跡と仏堂跡が共に真南を向き計画的に配置された、寺院の中核伽藍と考えられるA地区の調査を行いました。

平成17年度は当時の日常食器類が多量に出土した僧坊跡と大規模な仏堂跡が所在した、僧侶の生活空間と考えられるB地区の調査を行いました。

平成18年度は小規模な塔と考えられる石組遺構が数基造営された、造塔供養等を行う空間と考えられるC地区の調査を行いました。

これまでの発掘調査により確認した大規模な建物跡や貴重な遺物は、山中で栄華を極めた中寺廃寺の姿を今に伝えています。このたび、平成16年度から平成18年度の調査成果をまとめた調査報告書を発行する運びとなりました。

最後になりましたが、発掘調査、報告書の作成に際して、各方面より多大なるご協力とご指導を頂きました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後、発掘調査並びに遺跡整備を実施するにあたり、尚一層のご指導・ご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成19年7月

まんのう町教育委員会

教育長 尾 鼻 勝 吉

## 例 言

1. 本書は、まんのう町教育委員会が文化庁と香川県の文化財補助金を受けて平成16～18年度国庫補助事業として実施した、香川県仲多度郡まんのう町造田3469-2他に所在する中寺廃寺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は平成16～17年度については琴南町教育委員会が行い、平成18年度についてはまんのう町教育委員会が行った。
3. 本文3章は平成16年度に琴南町教育委員会が発行した『琴南町内遺跡発掘調査報告書第1集』から抜粋した。本文4章は平成17年度に琴南町教育委員会が発行した『琴南町内遺跡発掘調査報告書第2集』から抜粋した。本文5章は平成18年度にまんのう町教育委員会が発行した『まんのう町内遺跡発掘調査報告書第2集』から抜粋した。但し、挿図・表・図版等の番号については、本書全体で一貫するように変更した。本文9章には京都大学大学院上原真人教授の玉稿を賜った。
4. 本書の実測図の縮尺はすべてスケールで表示した。また図中の方位・座標は世界測地系の国土座標第IV系による。標高はT.P.（東京湾平均海面）からのプラス値である。座標・標高の記載はすべてm単位である。
5. 出土遺物・写真・図面等の調査成果物はまんのう町教育委員会にて保管している。
6. 挿図の一部に国土地理院発行5千分の1国土基本図を複製した琴南町全図（承認番号四複第238号）及び、国土地理院発行2万5千分の1地形図「内田」を一部改変して使用した。
7. 遺構は下記の略号によって表示している。

SP 柱穴    SB 掘立柱建物跡    SD 溝状遺構

8. 調査の実施から本書の執筆に至るまでは、以下の方々や諸機関のご指導・ご協力を頂きました。記してお礼申し上げます。

網田龍生・伊賀正法・上原真人・大久保徹也・大山真充・岡田康博・小野秀幸・尾野善裕・片桐孝浩・北野信彦・木原溥幸・後藤健一・坂井秀弥・嶋田典人・菅原良弘・鈴木信男・高木敬子・巽淳一郎・谷山 譲・中島恒次郎・中山正樹（故人）・丹羽佑一・信里芳紀・藤好史郎・松田英治・松本和彦・松本豊胤・森内秀造・森 格也・山下平重・山元敏裕・山本秀夫・渡部明夫

香川県埋蔵文化財センター・香川県立文書館・香川県歴史博物館・徳島文理大学・まんのう町文化財保護協会（敬称略・五十音順）



# 目 次

第1章 遺跡の環境	(1)
第1節 遺跡の立地	
第2節 歴史的環境	
第2章 調査の経過	(5)
第1節 調査の経緯	
第2節 平成15年度調査成果	
第3節 中寺廃寺跡調査・整備組織	
第4節 調査の経過	
第5節 周知と活用	
第3章 平成16年度中寺廃寺跡確認調査概要	(10)
第1節 遺構	
(1)概要	
(2)第3テラス	
①平坦地の造成 ②塔跡礎石 ③溝状遺構	
(3)第2テラス	
①平坦地の造成 ②掘立柱建物跡 ③礎石建物跡 ④溝状遺構	
(4)第1テラス	
①平坦地の造成 ②検出遺構	
第2節 遺物	
(1)概要 (2)第3テラス (3)第2テラス (4)第1テラス	
第4章 平成17年度中寺廃寺跡確認調査概要	(36)
第1節 遺構	
(1)概要	
(2)第1テラス	
①土壇の造成 ②礎石建物跡 ③広場状遺構	
(3)第2テラス	
①平坦地の造成 ②掘立柱建物跡SB01 ③掘立柱建物跡SB02 ④掘立柱建物跡SB03	
(4)第3テラス	
①平坦地の造成 ②掘立柱建物跡SB04	
第2節 遺物	
(1)概要 (2)第1テラス (3)第2～3テラス間斜面 (4)第2テラス (5)第3テラス	
(6)金属遺物	
第5章 平成18年度中寺廃寺跡確認調査概要	(56)
第1節 遺構	
(1)概要 (2)石組遺構の分布	
(3)石組遺構2 ①概要 ②立地と現況 ③石組遺構の構造 ④下部の構造	
(4)石組遺構4 ①概要 ②立地と現況 ③石組遺構の構造 ④下部の構造	
(5)石組遺構9 ①概要 ②立地と現況 ③石組遺構の構造 ④下部の構造	
(6)未調査の石組遺構	
第2節 遺物	
(1)概要 (2)C地区出土遺物 (3)中寺廃寺跡出土多口瓶生産地調査	
第6章 文献調査	(80)
第1節 調査の概要	
第2節 文献調査の内容	
(1)『西村家文書』文化2年丑2月「絵図(まんのう町造田柞野谷付近)」	
(2)『西村家文書』「殿様御鷹野被仰出候ニ付峯筋御往来道法方角絵図指出之控絵図」	

- (3)『西村家文書』天保6年「日帳」
- (4)『稻毛家文書』天保6年書状
- (5)『稻毛家文書』天保6年「御用日帳」
- (6)『稻毛家文書』天保6年「殿様御鷹野被為小休止処円勝寺一件留」
- (7)『稻毛家文書』嘉永4年「殿様御泊御鷹野一件御用留」
- (8)『十河家文書』嘉永3・4年「殿様御泊御鷹野一件記」

第3節 文献調査の成果	
第7章 聞き取り調査	105
第1節 調査の概要	
第2節 地名調査	
第3節 聞き取り調査	
第8章 まとめ	113
第1節 A地区所在建物について	
第2節 B地区所在建物について	
第3節 C地区石組遺構について	
(1)石組遺構に関する検討 その1	
(2)石組遺構に関する検討 その2	
(3)石組遺構の時代・性格について	
第4節 中寺廃寺跡出土多口瓶について	
第9章 考察 中寺廃寺跡の史的意義	131
第1節 はじめに	
第2節 中寺廃寺跡発掘成果の概要	
第3節 山林寺院としての中寺廃寺の構造	
第4節 讃岐国と中寺廃寺－むすびにかえて－	

## 挿 図 目 次

第1図 中寺廃寺跡位置図	第25図 B地区 出土遺物実測図(1)
第2図 中寺廃寺跡平坦地分布図	第26図 B地区 出土遺物実測図(2)
第3図 A地区 第1～3テラス平面図	第27図 C地区 平面図
第4図 A地区 第1～3テラス土層柱状図	第28図 C地区 断面図(1)
第5図 A地区 第3テラス塔跡礎石平面図	第29図 C地区 断面図(2)
第6図 A地区 第3テラス断面図(1)	第30図 C地区 石組遺構2 現況平・立面図
第7図 A地区 第3テラス断面図(2)	第31図 C地区 石組遺構2 平・立面図
第8図 A地区 第2テラス掘立柱建物跡・礎石建物跡 平面図	第32図 C地区 石組遺構2 断面図
第9図 A地区 第2テラス断面図(1)	第33図 C地区 石組遺構2 基底面平面図
第10図 A地区 第2テラス断面図(2)	第34図 C地区 石組遺構4 平・立面図
第11図 A地区 第1テラス断面図	第35図 C地区 石組遺構9 平・立面図
第12図 A地区 第1テラス遺構平・断面図	第36図 C地区 石組遺構9 断面図
第13図 A地区 第3テラス遺物出土状況平面図	第37図 C地区 出土遺物実測図
第14図 A地区 第3テラス出土遺物実測図	第38図 中寺廃寺跡出土多口瓶実測図
第15図 A地区 第3テラス心礎下部遺構平面図及び 出土遺物実測図	第39図 中寺廃寺跡周辺の地名分布図
第16図 A地区 第2テラス遺物出土状況平面図	第40図 古代・中世の石組遺構
第17図 A地区 第2テラス出土遺物実測図	第41図 中寺廃寺跡周辺の炭焼窯分布図
第18図 B地区 第1～3テラス平・断面図	第42図 中寺廃寺跡全体図
第19図 B地区 第1テラス平・断面図	第43図 中寺廃寺跡の位置
第20図 B地区 第1テラス断面図	第44図 古代讃岐国寺院分布図
第21図 B地区 第2テラス平面図	第45図 中寺廃寺跡地形実測図と平場の分布
第22図 多口瓶出土状況平・断面図	第46図 中寺廃寺跡A地区の遺構配置図
第23図 B地区 第2テラス断面図	第47図 中寺廃寺跡A地区第2テラスの遺物出土状況
第24図 B地区 第3テラス平・断面図	第48図 中寺廃寺跡A地区心礎直下の土坑から出土した 土器群
	第49図 中寺廃寺跡B地区の遺構配置図

- 第50図 中寺廃寺跡B地区SB01出土西播磨産多口瓶  
 第51図 中寺廃寺跡C地区の石組遺構分布  
 第52図 静岡県湖西市大知波峠廃寺の遺構変遷  
 第53図 愛知県豊橋市普門寺の平場群と元々堂の礎石建物  
 第54図 兵庫県三田市旧金剛寺跡の平場分布図  
 第55図 安祥寺上寺付近の地形  
 第56図 安祥寺上寺跡地形測量図  
 第57図 福島県磐梯町観音寺跡地形図  
 第58図 滋賀県大津市崇福寺跡地形図

- 第59図 奈良市飛鳥堂跡地形図  
 第60図 現存する3間×2間仏堂  
 第61図 崇福寺南尾根の小金堂跡と塔跡  
 第62図 大官大寺式伽藍配置の寺  
 第63図 伽藍の周囲に分布する各種寺領  
 第64図 中寺廃寺跡C地区〈石組遺構2〉実測図  
 第65図 熊本県地辺寺跡〈百塔〉と根本中堂  
 第66図 タクティ・バイ寺院 (パキスタン)

## 表 目 次

- 第1表 香川県内古代山岳寺院関係遺跡  
 第2表 中寺廃寺跡C地区石組遺構  
 第3表 相生産須恵器双耳壺と中寺廃寺跡出土多口瓶の新・古要素  
 第4表 中寺廃寺を起源とする寺院  
 第5表 中寺廃寺跡石組遺構と古代・中世の石組遺構  
 第6表 大官大寺式伽藍配置寺院の比較  
 第7表 中寺廃寺跡出土遺物観察表

## 写真図版目次

- 図版1. A) 中寺廃寺跡遠景 (北東より) B) 中寺廃寺跡遠景 (南東より)  
 図版2. A) A地区第3テラス完掘状況 (北西より) B) A地区第3テラス心礎下部遺構出土遺物  
 図版3. A) B地区第1テラスより大川山を望む (北西より) C) B地区第2テラス多口瓶出土状況  
 B) B地区第2テラス出土西播磨産多口瓶 D) B地区第2テラス出土越州窯系青磁碗  
 図版4. A) C地区石組遺構2 落石除去後状況 (南より)  
 B) C地区石組遺構9 落石除去後状況 (右下が北)  
 図版5. A) 『西村家文書』「殿様御鷹野被仰出候二付峯筋御往来道法方角絵図指出之控絵図」  
 B) 『西村家文書』文化2年丑2月「絵図 (まんのう町造田柞野谷付近)」  
 図版6. A) 中寺廃寺跡A地区位置 (南東より) B) A地区第3テラス調査着手前状況 (西より)  
 図版7. A) A地区第3テラス3-b~3-b' 断面 礎石以西 (南より)  
 B) A地区第3テラス3-b~3-b' 断面 礎石以东 (南より)  
 図版8. A) A地区第3テラス3-c~3-c' 断面 礎石以南 (西より)  
 B) A地区第3テラス土壇南側法面検出状況 (南東より)  
 図版9. A) A地区第3テラス3-c~3-c' 断面 平坦地北端 (西より)  
 B) A地区第3テラス溝状遺構完掘状況 礎石以西 (南西より)  
 図版10. A) A地区第2テラス調査着手前状況 (南東より)  
 B) A地区第2テラス掘立柱建物跡・礎石建物跡検出状況 (北西より)  
 図版11. A) A地区第2テラス掘立柱建物跡柱穴と礎石建物跡礎石の前後関係 (上が北)  
 B) A地区第2テラス2-a~2-a' 断面 東から2番目の柱穴 (南より)  
 図版12. A) A地区第2テラス2-c~2-c' 断面 平坦地北端 (西より)  
 B) A地区第2テラス南側の緩斜面 (南東より)  
 図版13. A) A地区第1テラス調査着手前状況 (南より) B) A地区第1テラス完掘状況 (東より)  
 図版14. A) A地区第3テラス出土遺物 (内面) B) A地区第3テラス出土遺物 (外面)  
 図版15. A) A地区第3テラス心礎下部遺構出土遺物 (1) B) A地区第3テラス心礎下部遺構出土遺物 (2)  
 図版16. A) A地区第2テラス出土遺物 (内面) B) A地区第2テラス出土遺物 (外面)  
 図版17. A) A地区出土鉄製品X線透過写真 (1) B) A地区出土鉄製品X線透過写真 (2)  
 図版18. A) 中寺廃寺跡B地区位置 (南東より) D) 第3テラス調査着手前状況 (北東より)  
 B) 平成17年度調査区遠景 (南より) E) 第2テラス調査着手前状況 (東より)  
 C) 第1テラス調査着手前状況 (北東より)  
 図版19. B地区第1テラス  
 A) 礎石建物跡完掘状況 (北東より) D) 建物跡中央の礎石 (北西より)  
 B) 土壇北西隅石列 (北西より) E) 北東隅礎石掘り方断面 (西より)  
 C) 建物東辺中央部石材散布状況 (東より)  
 図版20. B地区第1テラス  
 A) 広場状遺構より大川山を望む (北西より) D) A~A' 断面 (東より)  
 B) E~E' 断面 (北東より) E) C~C' 断面 (西より)  
 C) B~B' 断面 (北西より)

- 図版21. B地区第2テラス  
 A) エリアA 完掘状況(南より) D) エリアA SP06(SB01を構成)断面(南東より)  
 B) エリアB 遺構検出状況(南より) E) エリアA SP08(SB02を構成)断面(南東より)  
 C) エリアA f~f'左:SD02 右:SD01(北東より)
- 図版22. B地区第2テラス  
 A) SP03断面(SB03を構成)(南より) C) SP16・SK02断面(北より)  
 B) SP12遺物出土状況(東より) D) SP16・SK02多口瓶出土状況(東より)  
 B地区第3テラス  
 E) 遺構検出状況(南より)
- 図版23. A) B地区第2テラス出土多口瓶 C) 第2テラスSP12出土須恵器壺  
 B) 第2テラスSD02出土越州窯系青磁碗 D) 第2テラス盛土直上出土須恵器坏
- 図版24. A) B地区第1テラス出土遺物(内面) B) B地区第1テラス出土遺物(外面)
- 図版25. A) B地区第2・3テラス出土遺物(内面) B) B地区第2・3テラス出土遺物(外面)
- 図版26. A) B地区第3テラス・第2~3テラス間斜面出土遺物(内面)  
 B) B地区第3テラス・第2~3テラス間斜面出土遺物(外面)
- 図版27. A) B地区出土金属遺物 B) B地区出土金属遺物X線透過写真
- 図版28. A) 中寺廃寺跡C地区位置(南東より) B) C地区遠景(南より)
- 図版29. A) C地区石組遺構2調査着手前状況遠景(北東より)  
 B) 調査着手前状況(北より) D) 調査着手前状況(南より)  
 C) 調査着手前状況(東より) E) 調査着手前状況(西より)
- 図版30. A) C地区石組遺構2下草除去後状況(南より)  
 B) 下草除去後状況(北より) D) 下草除去後状況(南より)  
 C) 下草除去後状況(東より) E) 下草除去後状況(西より)
- 図版31. A) C地区石組遺構2落石除去後状況(南より)  
 B) 落石除去後状況(北より) D) 落石除去後状況(南より)  
 C) 落石除去後状況(東より) E) 落石除去後状況(西より)
- 図版32. A) C地区石組遺構2断ち割り状況(北東より)  
 B) 落石断面(北東より) D) 石組遺構中央部断面(東より)  
 C) 基底面検出状況(東より) E) 石組遺構中央部下部断面(北東より)
- 図版33. A) C地区石組遺構4調査着手前状況(右下が北)  
 B) 調査着手前状況(北東より) D) 調査着手前状況(南西より)  
 C) 調査着手前状況(東より) E) 調査着手前状況(北より)
- 図版34. A) C地区石組遺構4落石除去後状況(右上が北)  
 B) 落石除去後状況(北東より) D) 落石除去後状況(南西より)  
 C) 落石除去後状況(南東より) E) 落石除去後状況(北西より)
- 図版35. A) C地区石組遺構9調査着手前状況(右が北)  
 B) 調査着手前状況(北より) D) 調査着手前状況(南より)  
 C) 調査着手前状況(東より) E) 調査着手前状況(西より)
- 図版36. A) C地区石組遺構9落石除去後状況(右下が北)  
 B) 落石除去後状況(北より) D) 落石除去後状況(南より)  
 C) 落石除去後状況(東より) E) 落石除去後状況(西より)
- 図版37. A) C地区石組遺構9中央部断面(北より)  
 B) C地区石組遺構9断ち割り状況(北東より)
- 図版38. A) 石組遺構1(東より) C) 石組遺構3(東より) E) 石組遺構5(北東より) G) 石組遺構6(北東より)  
 B) 石組遺構1(北より) D) 石組遺構3(北より) F) 石組遺構5(北西より) H) 石組遺構6(南東より)
- 図版39. A) 石組遺構7(南西より) C) 石組遺構8(東より) E) 石組遺構10(北東より) G) 石組遺構11(北東より)  
 B) 石組遺構7(北西より) D) 石組遺構8(北より) F) 石組遺構10(北西より) H) 石組遺構11(北西より)
- 図版40. A) 石組遺構12(北より) C) 石組遺構13(北より) E) 石組遺構14(北より) G) 石組遺構15(北東より)  
 B) 石組遺構12(西より) D) 石組遺構13(東より) F) 石組遺構14(東より) H) 石組遺構15(北西より)
- 図版41. A) 石組遺構16(南東より) D) トレンチ2遠景(南西より) G) トレンチ4遠景(南東より)  
 B) 石組遺構16(南西より) E) トレンチ3西半分遠景(南西より) H) トレンチ5遠景(北東より)  
 C) トレンチ1遠景(北より) F) トレンチ3東半分遠景(南東より)
- 図版42. A) C地区出土遺物(内面) B) C地区出土遺物(外面)
- 図版43. A) 『西村家文書』天保6年「日帳」 D) 『稲毛家文書』嘉永4年「殿様御泊御鷹野一件御用留」  
 B) 『稲毛家文書』天保6年「御用日帳」 E) 『十河家文書』嘉永3年「殿様御泊御鷹野一件記」  
 C) 『稲毛家文書』天保6年「殿様御鷹野被為遊小休止処円勝寺一件留」

## 第1章 遺跡の環境

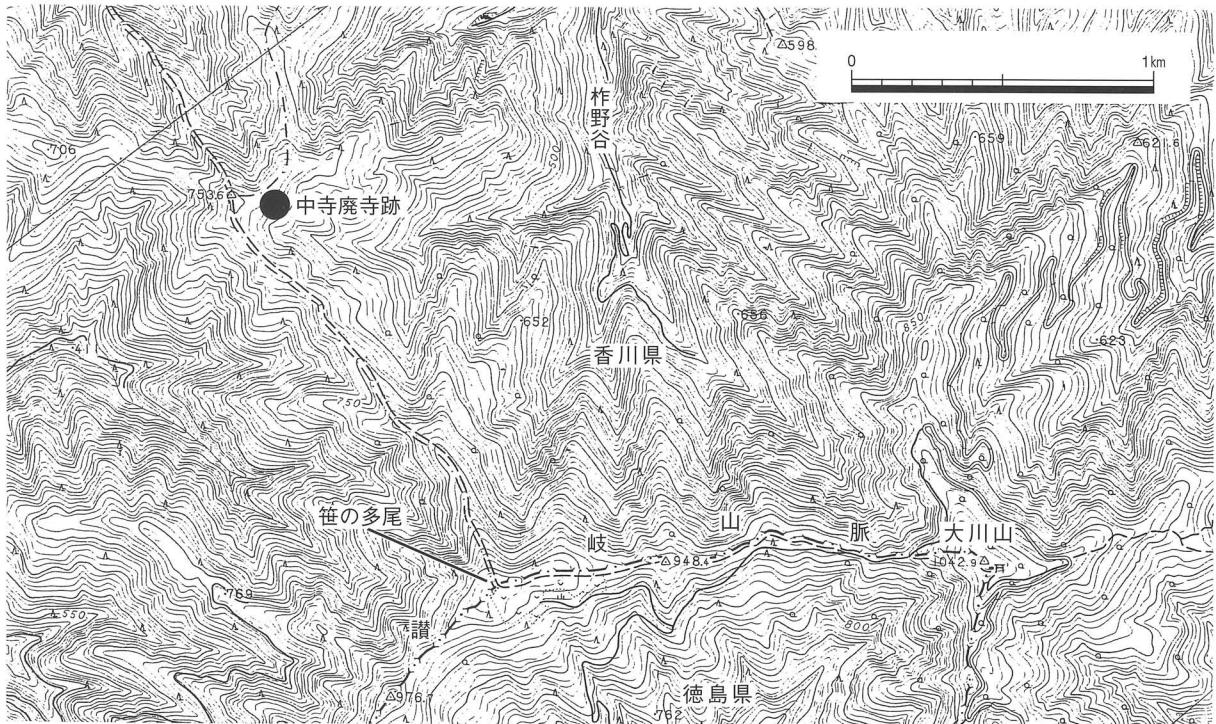
### 第1節 遺跡の立地

まんのう町は、香川県仲多度郡の3町（満濃町、仲南町、琴南町）が、平成18年3月20日に合併して誕生した新町である。香川県南西部に位置し、面積は約194.17km<sup>2</sup>である。町内には約1000ヶ所のため池が点在しており、町の西部中央には町名の由来となっている日本一の灌漑用ため池「満濃池」がある。町の南端には標高1,000mを超える竜王山、大川山を主峰とする讃岐山脈が連なり、そのふもとを県下で唯一の一級河川である土器川が流れている。まんのう町南部の仲南・琴南地区は山深い地域でありながら、金毘羅街道の一つである阿波街道の阿讃国境の村として、古くから開かれた地域であり、借耕牛、通婚圏、商業圏等において香川の中でも徳島との関係が深い地域である。

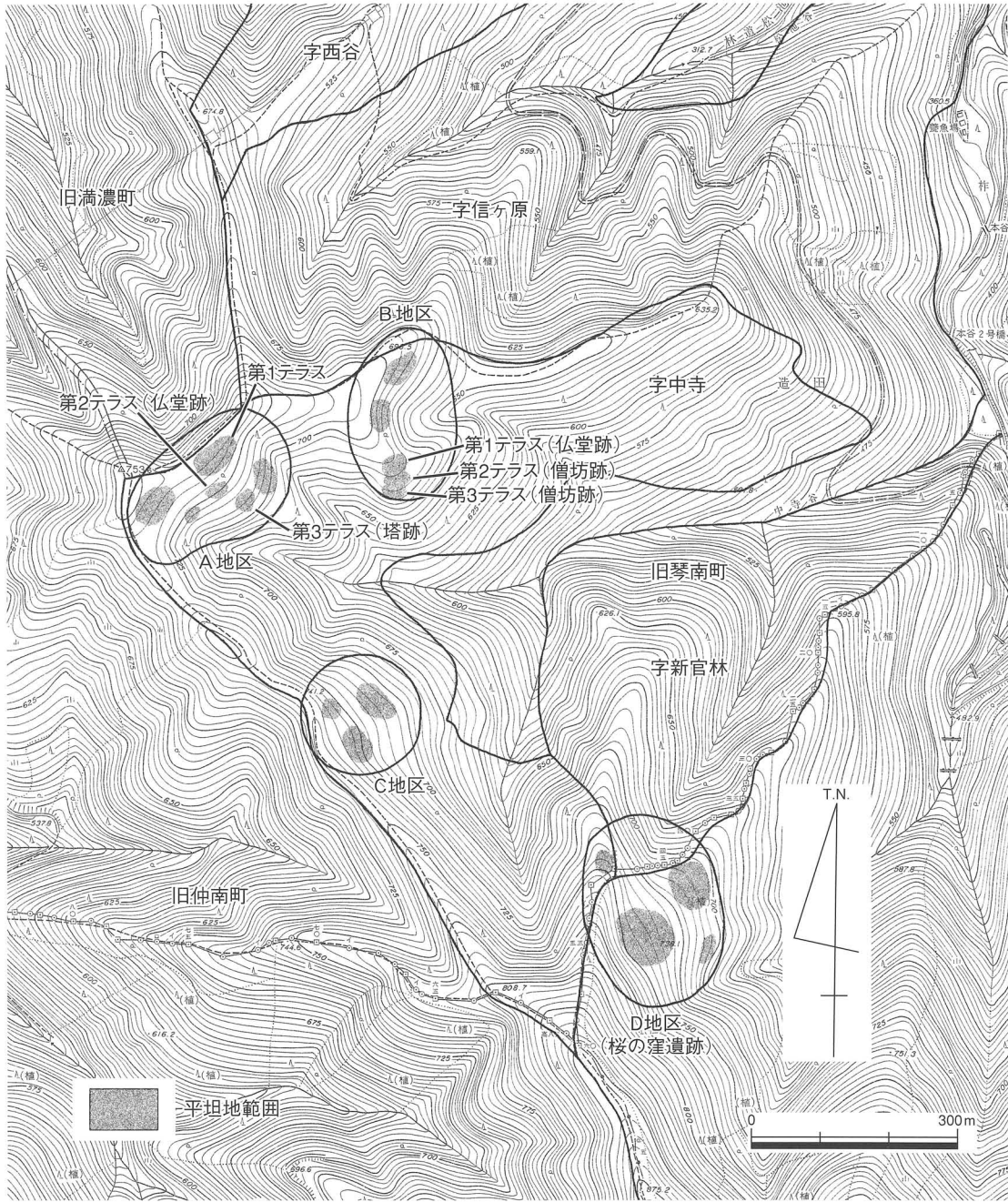
中寺廃寺跡は、香川・徳島県境の讃岐山脈から尾根伝いに北西へ約1.5km離れた、標高650～700mに所在する。付近の尾根上には旧の行政区画である満濃町・仲南町・琴南町が接する三角点があり、そこからは満濃池を初めとし、香川県内の平野を一望できる。また、遺跡付近には徳島県と満濃地区江畑・仲南地区塩入・琴南地区杵野をつなぐ尾根沿いの道の結節点があり、近代以前人や物の往来が頻繁に行われていたことを聞き取り調査で確認している。

中寺廃寺跡を構成する平坦地は南東に開けた谷を囲み、西のA地区、北のB地区、南のC地区、南西のD地区に分布する。平坦地はすべて谷の懐側に所在しており尾根が防風の役割を果たすと考えられる。谷の開けた南東側には古くから信仰されてきた大川神社の御神体である、大川山を望むことができる。

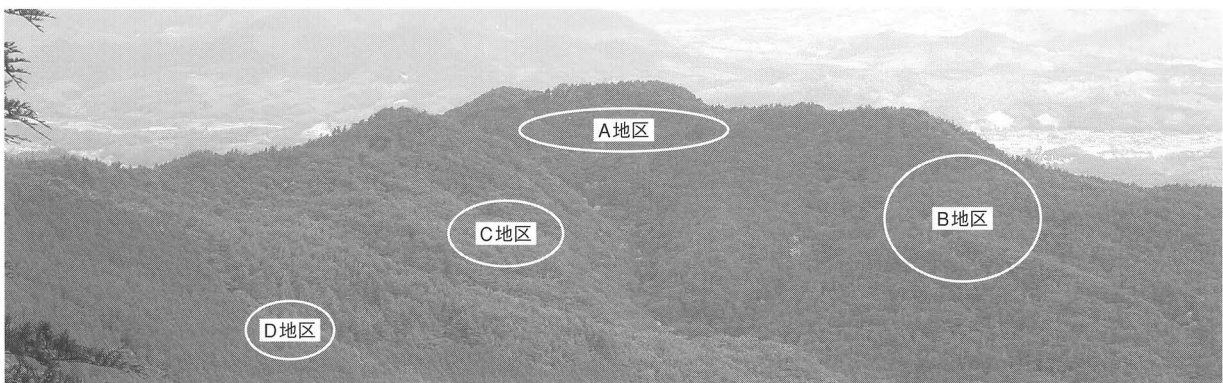
以上のように中寺廃寺跡は、香川・徳島の交流路上の要所に、信仰の対象である大川山を望み、防風に適する谷の懐に立地する。このように俗世と一定の距離を置きながら、交通の要所に位置し修行に適した場所であることが、当地に中寺廃寺が立地した要因と考えられる。



第1図 中寺廃寺跡位置図



第2図 中寺廃寺跡平坦地分布図



中寺廃寺跡平坦地分布状況 (南東より)

## 第2節 歴史的環境

香川県内に所在する古代山岳寺院関係の遺跡について述べる。発掘調査が行われた古代山岳寺院としては高松市千間堂跡がある。また、現在の根来寺付近の高松市中山廃寺や、讃岐国分寺付近の坂出市横山廃寺において平安時代の瓦が採集されており、山岳寺院の存在が示唆されている。また中世に属する山岳寺院であるが尾ノ背廃寺跡は中寺廃寺跡の近隣に所在することから、中寺廃寺跡との関係が深いと考えられる。

番号	遺跡名	主要遺構	主要遺物	時期	所在地	標高
1	中寺廃寺跡	掘立柱建物跡・塔跡・礎石建物跡・基壇・石組遺構	西播産須恵器多口瓶・越州窯系青磁碗・須恵器・土師器・黒色土器椀・鉄釘	8C後半～12C	仲多度郡まんのう町造田字中寺	670～730m
2	尾ノ背廃寺跡 ※中世寺院	礎石建物跡・列石・石垣・集石遺構	白磁四耳壺・八葉複弁蓮華文軒丸瓦・巴文軒丸瓦・均整唐草文軒平瓦・平瓦・丸瓦・須恵器・土師器・青磁碗・鉄釘	12～16C	仲多度郡まんのう町七箇字江尾	470～520m
3	千間堂跡	礎石建物跡・掘立柱建物跡・集石遺構・基壇	須恵器多口瓶・灰釉陶器・緑釉陶器・平瓦	9C後半～12C末	高松市屋島西町北嶺山上	285m
4	中山廃寺	礎石建物跡	七葉単弁蓮華文軒丸瓦・丸瓦・平瓦・鉄釘	9～10C	高松市中山町東嶽	355m
5	横山廃寺	石室・基壇・井戸跡	巴文軒丸瓦・巴文軒平瓦・均整唐草文軒丸瓦・連珠文軒平瓦・丸瓦・平瓦・緑釉陶器・須恵器・土師器	平安末～室町時代	坂出市府中町横山丸亀市富熊大原北	242m

第1表 香川県内古代山岳寺院関係遺跡



## 第2章 調査の経過

### 第1節 調査の経緯（第1・2図参照）

調査地付近は「中寺」「信が原」「鐘が窪」「松地（＝末寺）谷」という寺院関係の地名が所在し、寛政11（1799）年に記された『讃岐廻遊記』中に「中寺」の表記があること、大川七坊といわれる寺院が山中に所在したと近隣集落において伝承されることより、寺院が存在したとされていた。しかし寺院の詳細が記された文献は未確認であり、中寺廃寺跡は長らく幻の寺院であった。

昭和56年に中寺廃寺跡付近の分布調査を実施し、現在のA地区付近において数箇所の平坦地を発見した。続いて昭和59年にはボーリング棒による調査を実施し、第2テラスで礎石を確認した。また第3テラスにおいては試掘調査により塔跡を確認した。塔心礎石の下部からは地鎮・鎮壇具と想定される10世紀前半の遺物が出土し、10世紀前半に塔が建立されたことを確認した。

### 第2節 平成15年度調査成果

これらの調査成果を受け、琴南町は県内でも例の少ない山岳寺院である中寺廃寺跡を調査・整備・活用していく方針を決定し、平成15年度に琴南町教育委員会が香川県教育委員会文化行政課の協力のもと現地踏査を行った。その結果、約1km四方の範囲に多数の平坦地が分布することを確認した。また、遺跡は大きく4つの地区に分けることが可能であり、A～D地区とした。それぞれの地区の詳細は以下の通りである。

**A地区**…字中寺の中央に位置する地区で、6ヶ所の平坦地からなる。

**B地区**…A地区から東へ約300m離れた丘陵先端部において確認された地区で、5ヶ所の平坦地からなる。

**C地区**…A地区から南へ約400m離れた丘陵斜面部において確認された地区で、3ヶ所の平坦地からなる。人頭大の角礫を直径約1～2m、高さ約70cm程度積み上げた集石を数基確認した。

**D地区（桜の窪遺跡）**…A地区から南へ約900m離れた丘陵斜面部において確認された地区で、4ヶ所の平坦地からなり、他の地区に比べ最も広い平坦地を有する。また、昭和59年度調査において中世・近世の遺物を表採しており、中寺廃寺跡が中世以降に継続した地点と推測される。

A・C・D地区で確認した平坦地は標高約700～730mの間に立地している。B地区は若干低く675～700mに平坦地が立地する。すべての平坦地は尾根を背後にし、一段下った緩斜面上に立地する。これは冬季間、強く吹き上る谷からの風を尾根によって防ぐための立地と考えられる。

### 第3節 中寺廃寺跡調査・整備組織

平成16年度以降は中寺廃寺跡調査・整備委員会を組織し、長期的な展望に基づき調査を行った。中寺廃寺跡調査・整備組織は以下の通りである。

#### 調査指導 中寺廃寺跡調査・整備委員会

- 委員 上原 真人（考古学 京都大学大学院 教授：平成16～19年度）  
丹羽 佑一（考古学 香川大学 教授：平成16～19年度）  
木原 溥幸（文献史学 徳島文理大学 教授：平成16～19年度）  
伊賀 正法（琴南町文化財保護審議会 会長：平成16・17年度）  
菅原 良弘（琴南町文化財保護協会 会長：平成16・17年度）  
（まんのう町文化財保護協会 副会長：平成18・19年度）  
鈴木 信男（まんのう町文化財保護審議会 会長：平成18・19年度）  
（まんのう町文化財保護協会 会長：平成18・19年度）  
松本 豊胤（まんのう町文化財保護協会 副会長：平成18・19年度）  
稲毛 義典（琴南町 町長：平成16年度）  
佐野 利昭（琴南町 町長：平成16・17年度）  
栗田 隆義（まんのう町 町長：平成18・19年度）  
三好 和榮（琴南町教育委員会 教育長：平成16・17年度）  
尾鼻 勝吉（まんのう町教育委員会 教育長：平成18・19年度）  
オブザーバー 山下 平重（香川県教育委員会文化行政課 主任：平成16～18年度）  
森 格也（香川県教育委員会生涯学習・文化財課 主任：平成19年度）

調査担当 琴南町教育委員会 中寺廃寺跡発掘調査室（平成16・17年度）

まんのう町教育委員会 中寺廃寺跡発掘調査室（平成18・19年度）

- 総括 雨霧 弘（琴南町教育委員会：平成16・17年度）  
（まんのう町教育委員会：平成18・19年度）  
調査担当者 加納 裕之（琴南町教育委員会：平成16・17年度）  
（まんのう町教育委員会：平成18・19年度）  
調査補助員 中山 尚子（琴南町教育委員会：平成16年度）  
中村 文枝（琴南町教育委員会：平成17年度）  
（まんのう町教育委員会：平成18・19年度）  
平井 佑典（まんのう町教育委員会：平成18・19年度）

#### 第4節 調査の経過

##### 【平成16年度】

中寺廃寺跡A地区において測量・発掘調査を実施した。夏から秋にかけて現地作業と並行して文献調査を実施し、冬季は報告書作成期間とした。

- 6月上旬 測量調査・発掘調査の準備
- 6月下旬 A地区全体の地形測量と各平坦地の平板測量を実施
- 8月3日 第1回調査・整備委員会を開催し今年度の調査方針を決定
- 8月上旬 A地区第3テラスの発掘調査に着手
- 9月上旬 A地区第2テラスの発掘調査に着手
- 10月下旬 A地区第1テラスの発掘調査に着手
- 11月30日 現地調査終了。報告書掲載図面の整理・浄書・レイアウト開始
- 1月29日 第2回調査・整備委員会を開催し調査成果の報告と今後の方針について協議
- 2～3月 報告書印刷を実施

##### 【平成17年度】

中寺廃寺跡B地区において測量・発掘調査を実施した。夏から秋にかけて現地作業と並行して文献調査を実施し、冬季は報告書作成期間とした。

- 5月中旬 測量調査・発掘調査の準備
- 5月下旬 B地区第1テラスの平板測量を実施
- 6月上旬 B地区第1テラスの発掘調査に着手
- 6月下旬 B地区全体の地形測量とB地区第2・3テラスの平板測量を実施
- 9月中旬 B地区第2・3テラスの発掘調査に着手
- 12月3日 現地調査終了。報告書掲載図面の整理・浄書・レイアウト開始
- 12月21日 第3回調査・整備委員会を開催し調査成果の報告と今後の方針について協議
- 2～3月 報告書印刷を実施

##### 【平成18年度】

中寺廃寺跡C地区において測量・発掘調査を実施し、またB地区の追加調査を行った。夏から秋にかけて現地作業と並行して文献調査・聞き取り調査を実施し、冬季は報告書作成期間とした。

- 4月下旬 B地区第2テラスの発掘調査に着手（6月以降は国庫補助対象事業として実施）
- 6月中旬 C地区全体の地形測量を実施
- 7月中旬 C地区石組遺構分布範囲について平板測量を実施
- 8月上旬 C地区の発掘調査に着手
- 12月5日 現地調査終了。報告書掲載図面の整理・浄書・レイアウト開始
- 1月19日 第4回調査・整備委員会を開催し調査成果の報告と今後の方針について協議
- 2～3月 報告書印刷を実施

##### 【平成19年度】

A・B・C地区の追加測量・発掘調査を実施し、本報告書（当報告書）を作成した。

## 第5節 周知と活用

中寺廃寺跡の事業は調査と併行して周知と活用を図る目的で、現地説明会や町民文化祭での速報展等を実施した。以下、見学会・視察・研修等主だった事項を掲載する。

### 【平成16年度】

6月2日 琴南ふるさと資料館開館にて中寺廃寺跡調査成果を中心に町内文化財紹介

10月31日 平成16年度現地説明会 100名

11月20・21日 琴南町町民文化祭において「平成16年度調査速報展」開催 200名

### 【平成17年度】

4月22日～6月2日 琴南町役場ロビーにて「平成16年度調査速報展」開催

5月20日 文化庁記念物課岡田康博文化財調査官・香川県文化行政課山下平重主任現地視察

7月8日 琴南町、仲南町、満濃町の教育長、職員視察 15名

7月19日 琴南町文化財保護協会総会において講演会開催 45名

8月12日 琴平町子ども夏休み講座現地見学 4名

8月17日 調査・整備委員会上原真人委員、丹羽佑一委員現地視察

10月10日 平成17年度現地説明会 120名

10月18日 仲南町成人講座現地見学 20名

11月5・6日 琴南町町民文化祭において「平成17年度調査速報展」開催 200名

### 【平成18年度】

5月23日 まんのう町文化財保護協会仲南支部総会において講演会開催 40名

5月27日 まんのう町文化財保護協会琴南支部総会において講演会開催 40名

6月15日 まんのう町長、教育長、町議会議長、副議長、教育民生常任委員会委員現地視察 15名

7月12日 香川県教育委員会文化行政課藤好史郎課長補佐、山下平重主任現地視察

7月29日 香川歴史学会総会において講演 80名

9月7日 文化庁記念物課坂井秀弥主任文化財調査官、まんのう町長、教育長現地視察

9月11日 調査・整備委員会上原真人委員、丹羽佑一委員、木原溥幸委員現地視察

9月29日 香川大学学生現地見学 11名

10月22日 平成18年度現地説明会 40名

10月31日 琴南ふるさと資料館にて特別展「山を越え、海を渡った人やもの」開催 423名

～11月12日 (11月4・5日まんのう町琴南地区文化祭に併せ展示解説会を実施)

11月18・19日 まんのう町満濃地区文化祭において中寺廃寺跡出土遺物展示 300名

12月13日 琴南ふるさと資料館にて琴南小学校6年生対象に中寺展示説明会開催 30名

1月10～26日 まんのう町役場ロビーにて「中寺廃寺跡の発掘調査速報展」開催

3月20日 ふるさと社会人講師事業において講演 20名

### 【平成19年度】

4月19日 まんのう町立琴南中学校遠足「大川山～中寺廃寺跡ハイキング」 27名



平成16年8月3日第1回調査・整備委員会



平成16年10月31日現地説明会



平成17年8月12日小学生発掘体験



平成17年10月10日現地説明会



平成18年10・11月資料館特別展



平成18年10月22日現地説明会



平成19年1月19日第4回調査・整備委員会



平成19年4月19日中学校遠足

## 第3章 平成16年度中寺廃寺跡確認調査概要

### 第1節 遺構

#### (1) 概要 (第3・4図参照)

平成16年度発掘調査はA地区の第1～3テラスを対象とした。第1テラスと第2テラスの比高差は約5～6m、第2テラスと第3テラスの比高差は約4mである。

発掘調査の結果、第3テラスにおいては3間×3間の塔跡と考えられる礎石建物跡1棟を確認した。第2テラスにおいては同位置で掘立柱建物から礎石建物に建て替えた建物跡を確認した。第1テラスにおいては掘立柱建物跡の可能性のある柱穴列を確認した。第1～3テラスの建物跡は建物の面が東西南北に沿うため、これらのテラスに所在した建物は関係が高いと考えられる。

#### (2) 第3テラス

第3テラスは標高723m前後に位置し、南面する約70m<sup>2</sup>の平坦地である。昭和59年度調査により3間×3間で並ぶ12個の礎石と心礎石を確認しており、心礎石下部からは10世紀前半の土器を埋納した土坑を検出した。

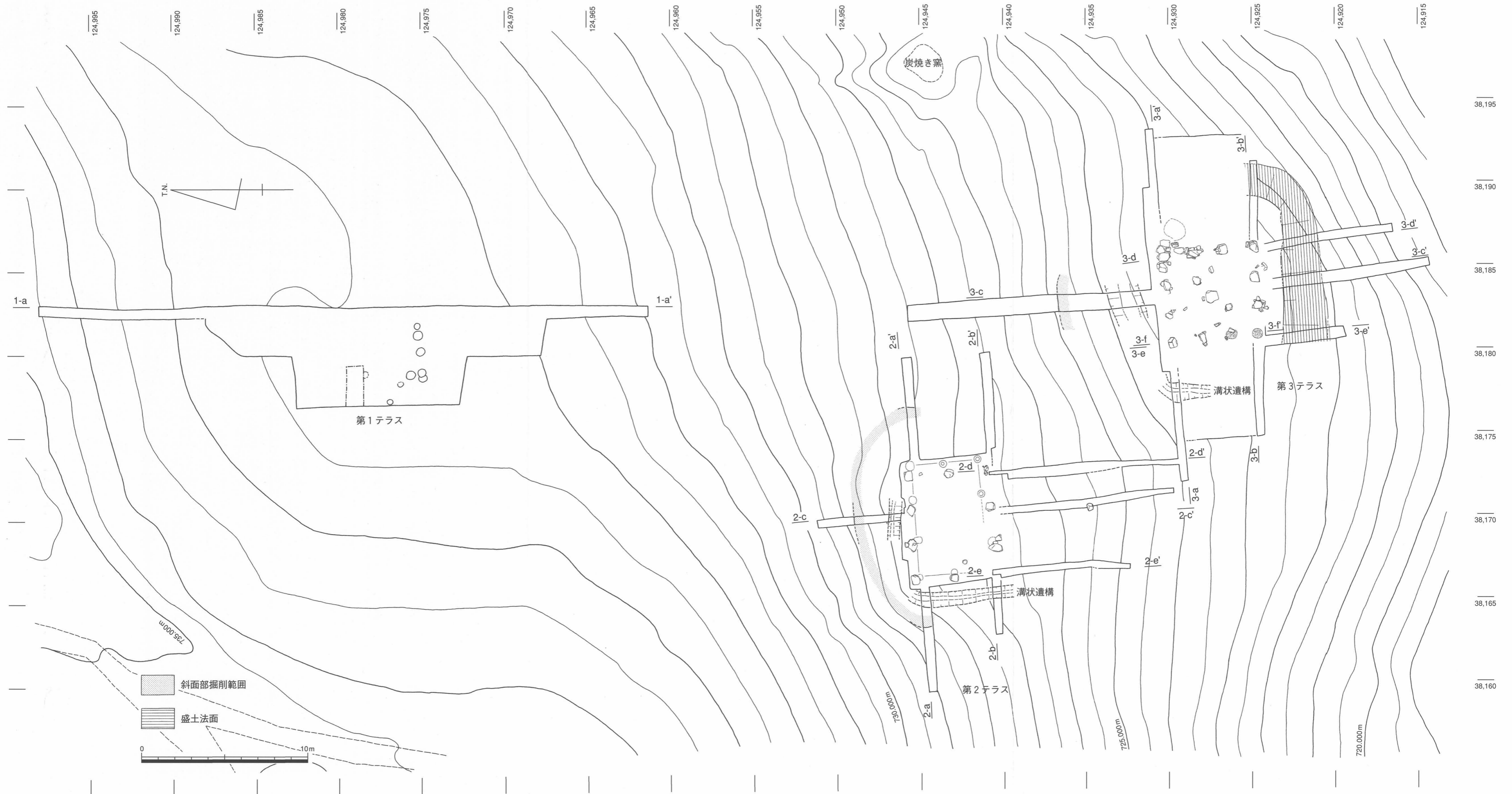
平成16年度は礎石とその周辺に所在した遺構との関係及び、平坦地が造成された過程の解明に主眼を置き調査を行った。まず腐植土を除去し昭和59年度調査時のトレンチを再掘削した。その後それぞれのトレンチを平坦地外方に延長し土層堆積状況を確認した。その結果を基に調査面積を拡張し平面的に遺構検出を試みた。

##### ① 平坦地の造成 (第3・6・7図参照)

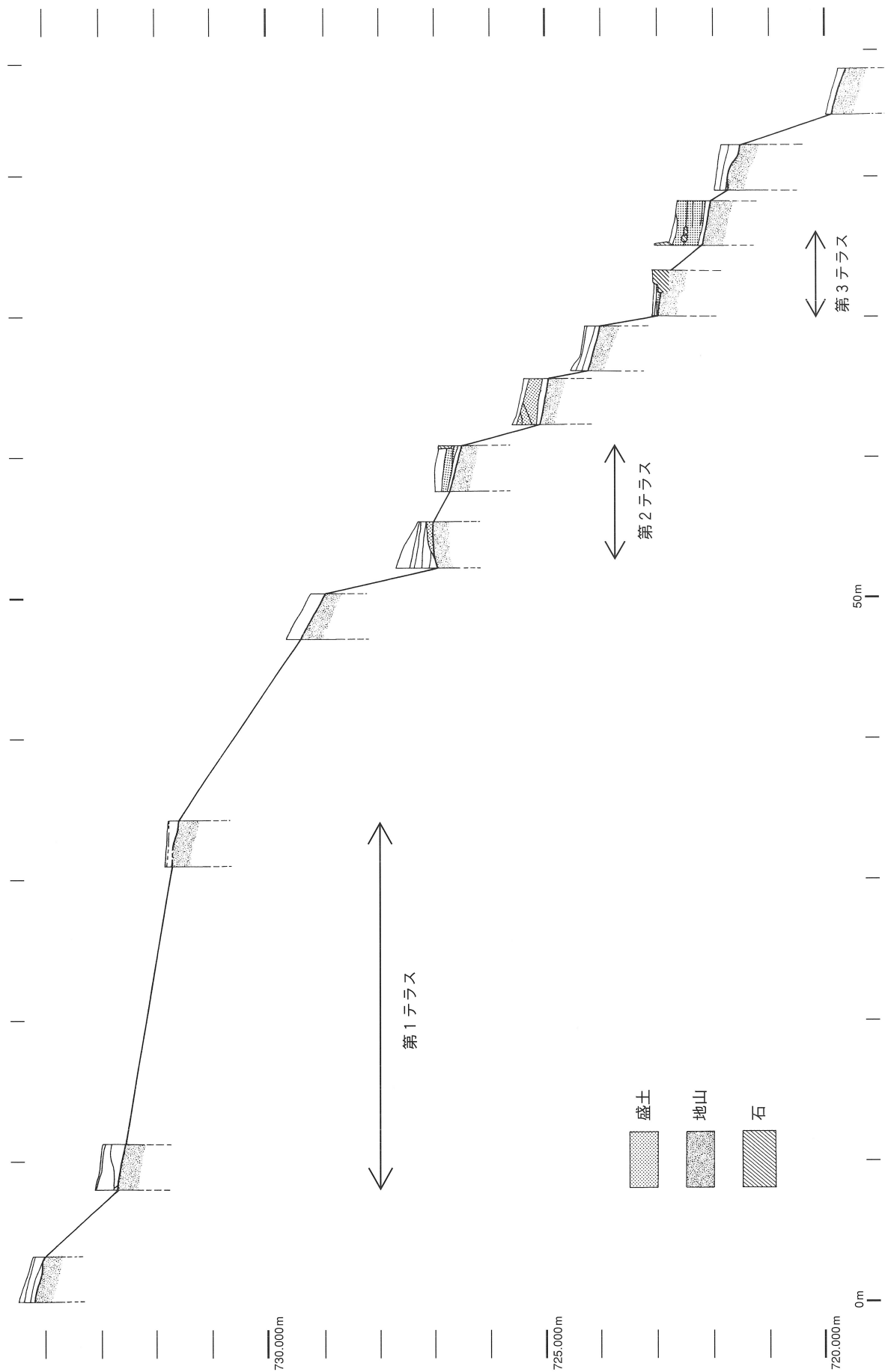
第3テラスは、南側から東側にかけて盛土によって整地され、北西側は地山を削ることによって整地されている(3-c～3-c'断面参照)。平坦地周囲における斜面の勾配は山側自然地形が14°、山側法面が19°、谷側法面が24°、谷側自然地形が15°である。

平坦地は岩盤上の軟弱地盤の除去と谷側への盛土により造成される。平坦地の造成過程は次の4段階に区分できる。まず地山を削りくぼ地を作る(1段階)。次にくぼ地を1番目の盛土・2番目の盛土で埋め戻す(2段階)。1番目の盛土は小礫を含んでおり、地山の岩盤を削った際の廃土を充填したと考えられる。2番目の盛土は礫を含まず、地山の表層を削った際の廃土を充填したと考えられる。続いてシルトと粘質土を薄く交互に重ねた3番目の盛土により、地盤の強度を高めつつ平坦地を整形している(3段階)。最後に岩盤を削った際の土を混ぜた4番目の盛土により、平坦地の上面を整地している(4段階)。

このように第3テラスにおいては計画的な地盤改良を行い、重量ある塔を支えるため地盤の強度を高めたと考えられる。

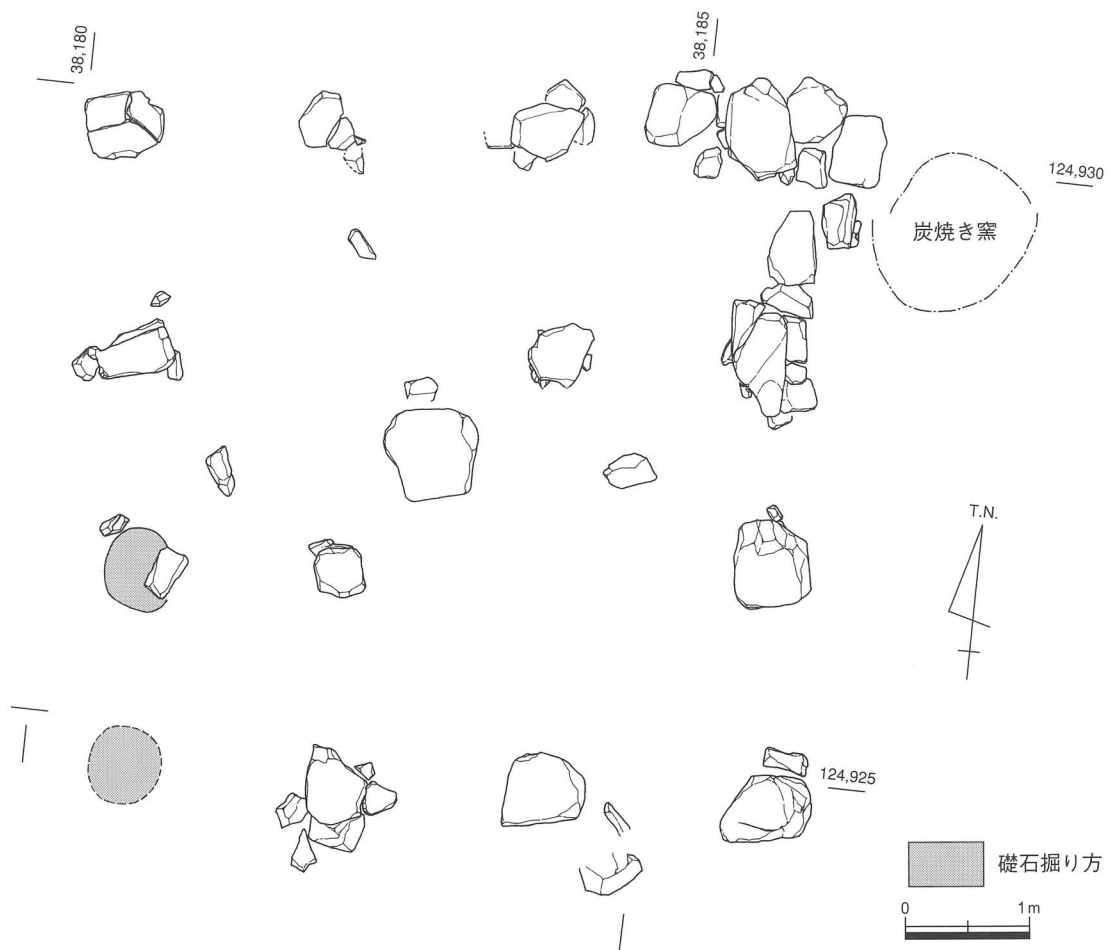


第3図 A地区 第1～3テラス平面図



第4図 A地区 第1～3テラス土層柱状図





第5図 A地区 第3テラス塔跡礎石平面図

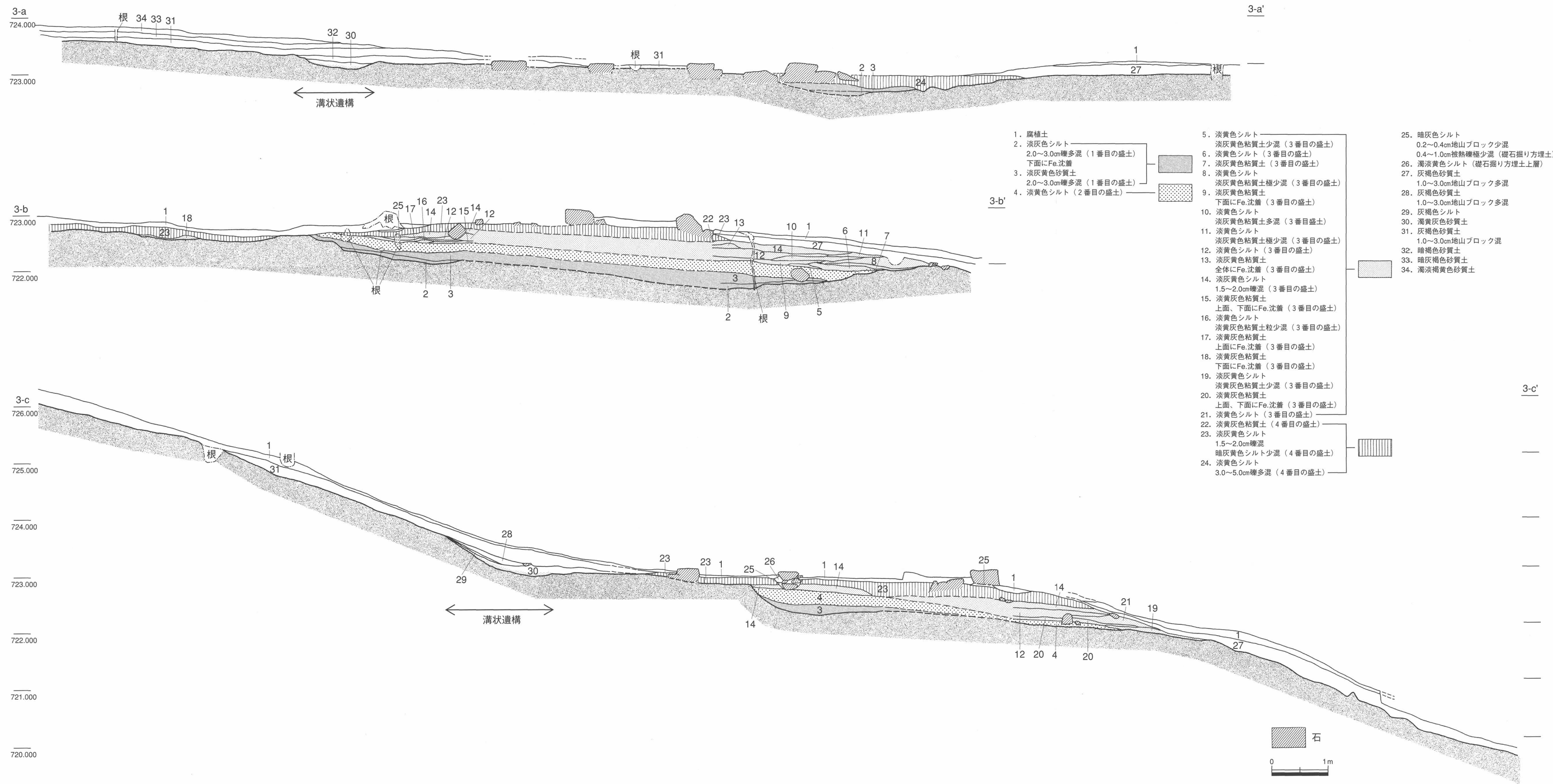
## ② 塔跡礎石（第5図参照）

礎石は3間×3間の外側のものと1間×1間の内側のものに分かれ、それらの礎石の中央に一回り大きな心礎石がある。礎石の方位は南北方向の並びで $N-6^{\circ}-E$ である。礎石は和泉砂岩製でいずれも不定形な形状である。心礎石を含むいくつかの礎石は上面を平坦に加工した痕跡が認められるが、大半は平坦面を持つ自然石である。同様の石が付近の谷に露出しているため山中の自然石を礎石として調達したと考えられる。

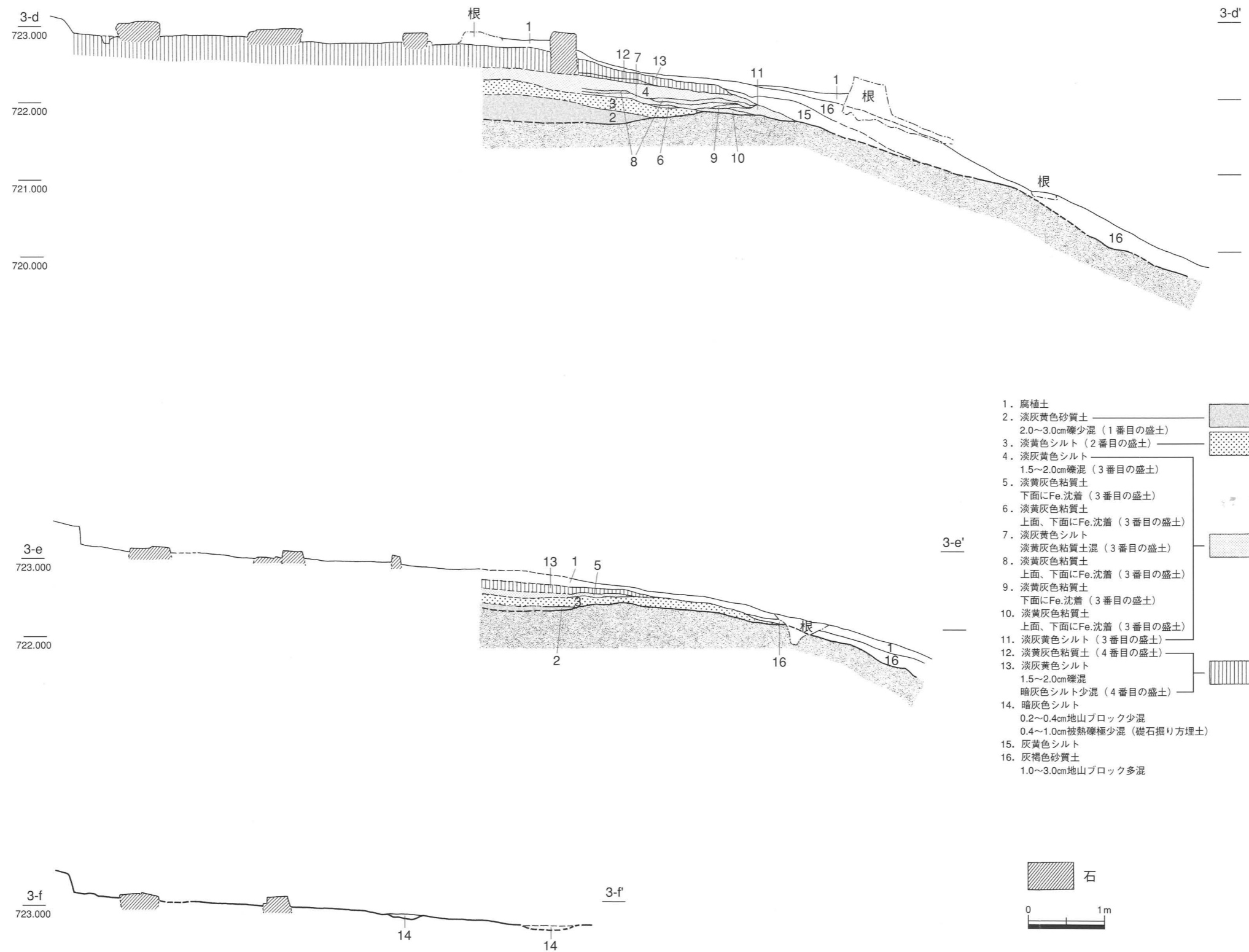
外側の礎石の内西側列の南2石は欠落しているが、礎石を据えるための掘り方と思われる遺構を検出した。

内側の礎石は南東と北西の礎石が欠落しているが、掘り方が削平されたためか元々掘り方がなかったためか外側同様の掘り方を検出できなかった。しかし、内側の礎石上には塔の重量を支える四天柱が存在したと想定されるため、本来は礎石が据えられていたものと考えられる。また、北東の礎石付近には礎石同様の石材を確認しており、うち数石は平坦面をそろえている。

建物の幅は南北約5.4m、東西約5.2mで、床面積は約 $28m^2$ である。南北列における礎石

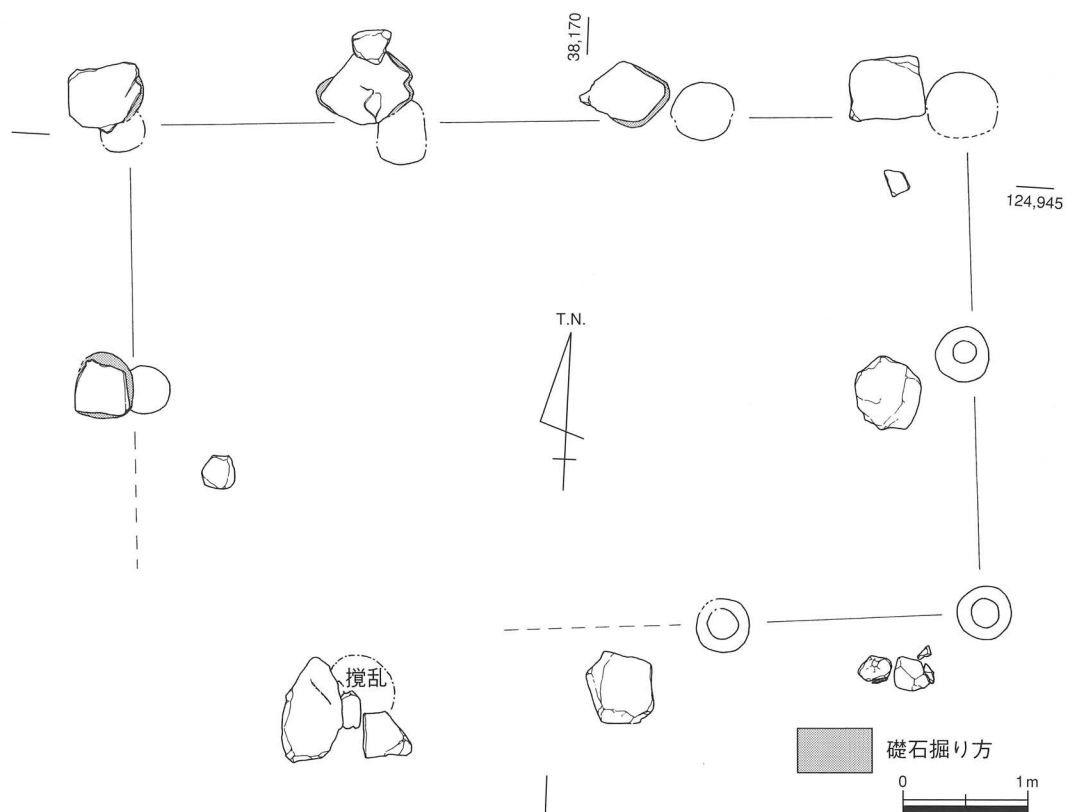


第6図 A地区 第3テラス断面図(1)



- 1. 腐植土
- 2. 淡灰黄色砂質土  
2.0~3.0cm礫少混 (1番目の盛土)
- 3. 淡黄色シルト (2番目の盛土)
- 4. 淡灰黄色シルト  
1.5~2.0cm礫混 (3番目の盛土)
- 5. 淡黄灰色粘質土  
下面にFe.沈着 (3番目の盛土)
- 6. 淡黄灰色粘質土  
上面、下面にFe.沈着 (3番目の盛土)
- 7. 淡灰黄色シルト  
淡黄灰色粘質土混 (3番目の盛土)
- 8. 淡黄灰色粘質土  
上面、下面にFe.沈着 (3番目の盛土)
- 9. 淡黄灰色粘質土  
下面にFe.沈着 (3番目の盛土)
- 10. 淡黄灰色粘質土  
上面、下面にFe.沈着 (3番目の盛土)
- 11. 淡灰黄色シルト (3番目の盛土)
- 12. 淡黄灰色粘質土 (4番目の盛土)
- 13. 淡灰黄色シルト  
1.5~2.0cm礫混
- 14. 暗灰色シルト  
0.2~0.4cm地山ブロック少混  
0.4~1.0cm被熱礫極少混 (礎石掘り方理土)
- 15. 灰黄色シルト
- 16. 灰褐色砂質土  
1.0~3.0cm地山ブロック多混

第7図 A地区 第3テラス断面図(2)



第8図 A地区 第2テラス掘立柱建物跡・礎石建物跡平面図

の間隔は約1.8m、東西列における礎石の間隔は約1.7mである。

それぞれの礎石について中央部の最小の幅を測ると、四隅の礎石で約40cm、四隅を除く外側の礎石で約30cm、内側の礎石で約30cmであるため、塔を支えた柱の規模は四隅の柱が直径40cm以下、四隅を除く外側の柱と内側の四天柱が直径約30cm以下であると考えられる。心礎石は中央部の最小の幅が約60cmであり、心柱は直径約60cm以下であると考えられる。

礎石の据え方には、削平された岩盤上に直接据えたものと、盛土上に掘り方を掘削し据えたものがある。掘り方を持つものには単体で据えるものと、礎石下部に石を充填するものがある。

### ③ 溝状遺構（第3・6図参照）

礎石の北側と西側において溝状遺構を確認した。西側において確認した溝は礎石の平坦面のレベルより若干深く逆台形状を呈すが（3-a～3-a'断面参照）、それに対し北側で確認した溝は礎石の平坦面のレベルから若干くぼむ程度である（3-c～3-c'断面参照）。

溝の中心から一番近い礎石の中心までの距離は北側の溝で2.95m、西側の溝で2.80mとほぼ同距離であるため、溝状遺構は建物の軒先と並行する事が確認できる。

### (3) 第2テラス

第2テラスは標高727m前後に位置する、約40m<sup>2</sup>の南面する平坦地である。調査着手前には平坦地谷側に礎石が露出していた。また、昭和59年度調査において埋没した礎石をボーリング棒により確認し、礎石建物跡の存在を想定していた。

平成16年度の発掘調査により掘立柱建物跡と礎石建物跡を確認した。平坦地の北端と西端では溝状遺構を検出した。平坦地の南側は平坦地造成と併せて緩斜面を造成していることを確認した。

#### ① 平坦地の造成（第9・10図参照）

第2テラスは山側は地山を岩盤まで掘削し、その掘削土を谷側へ盛土して平坦地を造成している（2-c~2-c'断面参照）。盛土は谷側より数段階に分けて構築し、最後に平坦面の全面を覆う整地土により整形する（第9図6層）。第2テラスの谷側は平坦地を造成する際の盛土によって緩やかな斜面となる。

平坦地周辺の斜面の勾配は山側自然地形が30°、山側法面が37°、谷側法面が12°、谷側自然地形が13°である。

第2テラス付近の自然地形は傾斜が緩く、平坦地の大部分を地山の掘削により造成することが可能なため、平坦地の造成が容易な地形であったと考えられる。

#### ② 掘立柱建物跡（第8・9図参照）

遺構検出面において、梁行2間×桁行3間の掘立柱建物跡を構成する柱穴8基を検出した。南側列の西2穴は植物根による侵食が原因で検出できなかったが、同様の柱穴が位置すると想定される。柱穴の方位は南北方向の並びでN-5°-Eであり、後出する礎石建物跡の方位と一致する。

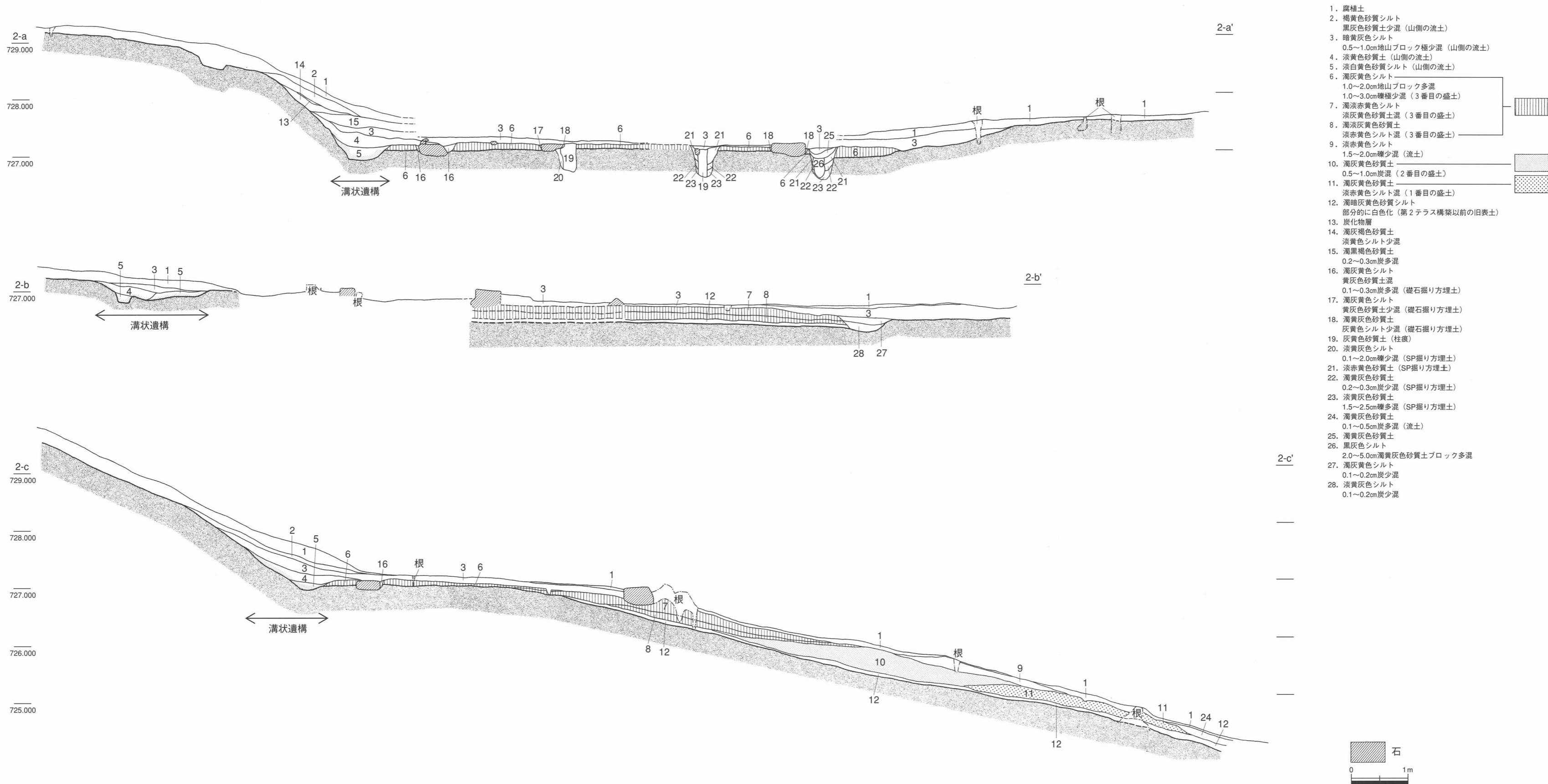
建物の幅は梁行約4.0m、桁行約6.7mであり、床面積は約26m<sup>2</sup>である。棟持柱の間隔は約6.5mを測り、建物の桁行に比べ約20cm狭い。桁行における各柱痕の間隔は約2.1mだが、北側列中央の柱間のみ約2.3mと広い。それに対し、梁行における各柱穴の間隔は約2mで統一される。

柱穴の掘り方が整地土を切り込むため、平坦地造成後に掘立柱建物が構築されていることが確認できる。さらに柱穴の掘り方は礎石の掘り方に切られるため、掘立柱建物は礎石建物構築以前の建物であると考えられる（2-a-2-a'断面参照）。

柱痕を確認できる柱穴があり、柱痕の幅から柱の規模は直径約20cmと想定できる。

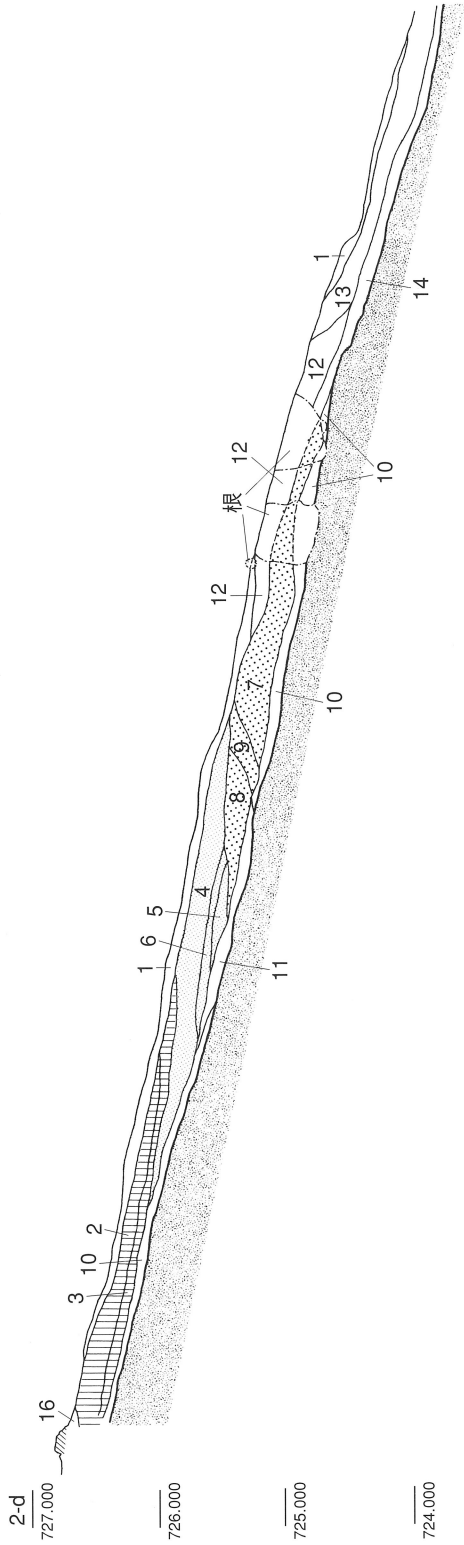
#### ③ 礎石建物跡（第8・9図参照）

礎石は和泉砂岩の自然石の平坦面を利用し、梁行2間×桁行3間で並ぶ。礎石の方位は南北方向の並びでN-5°-Eであり、先行する掘立柱建物跡の方位と一致する。建物の幅は

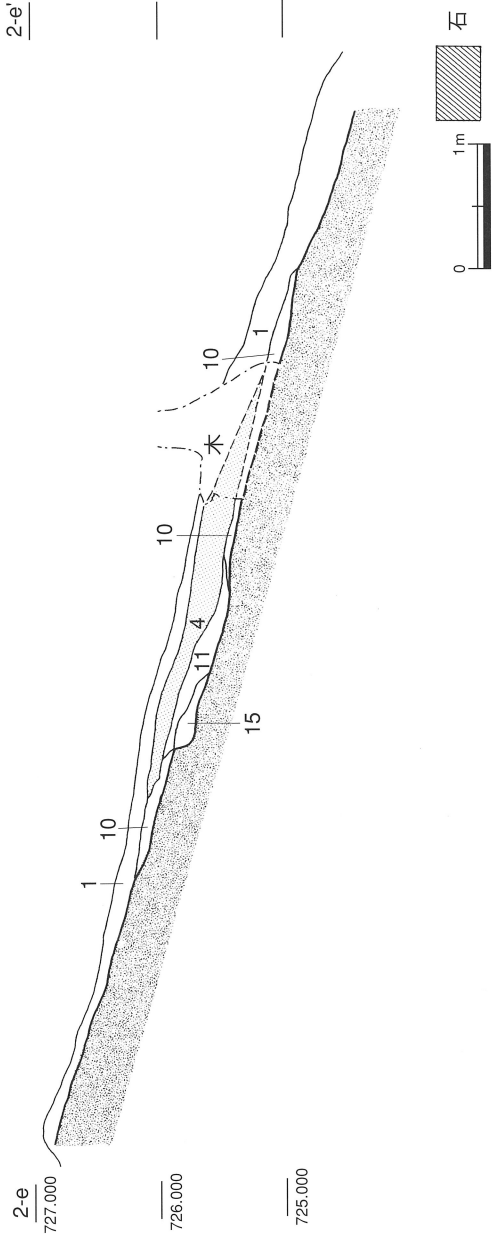


第9図 A地区 第2テラス断面図(1)

2-d'



2-e'



- 1. 腐植土
- 2. 濁淡赤黄色シルト
- 3. 淡灰黄色砂質土混 (3 番目の盛土)
- 4. 濁淡赤黄色砂質土
- 5. 濁淡赤黄色シルト混 (3 番目の盛土)
- 6. 濁淡赤黄色シルト
- 7. 濁淡赤黄色砂質土
- 8. 濁淡赤黄色シルト混 (1 番目の盛土)
- 9. 濁淡赤黄色シルト
- 10. 濁淡赤黄色砂質土
- 11. 部分的に白色化 (第2テラス構築以前の旧表土)
- 12. 濁淡赤黄色シルト
- 13. 濁淡赤黄色砂質土少混 (第2テラス構築以前の旧表土)
- 14. 濁淡赤黄色シルト (流土)
- 15. 濁淡赤黄色砂質土
- 16. 濁淡赤黄色シルト

第10図 A地区 第2テラス断面図(2)

梁行約4.6m、桁行約6.3mであり、床面積は約30m<sup>2</sup>である。棟持柱の間隔は建物の桁行の幅とほぼ同じである。各礎石の間隔は梁行が2.3m、桁行が約2.1mである。掘立柱建物跡と違い、礎石建物跡の桁行方向の礎石は等間隔に並ぶ。南側列中央の2石は平坦面のレベルが他の礎石より低く、本来の位置より若干南の谷側へ動いていると想定できる。南東隅・南西隅の礎石は欠落しているが、南東隅では礎石下部にあったと考えられる石を確認している。また、平坦面の約6m南側には礎石と同規模の石があり、南東隅・南西隅どちらかの礎石が転落したと考えられる。

礎石は長方形、正方形、菱形といった様々な形状を呈す石を使用していることから、塔跡同様山中の自然石を調達していると考えられる。

それぞれの礎石について中央部の最小の幅は、四隅の礎石で45cm四隅を除く礎石で35cmであるため、礎石建物の柱の太さは四隅の柱が直径45cm以下四隅以外の柱が直径35cm以下と考えられる。

礎石は非常に狭い掘り方を伴う。掘り方が掘立柱建物跡の柱穴を切るため、礎石建物は掘立柱建物に後出すると考えられる。

#### ④ 溝状遺構 (第3・9図)

礎石の北・北西・南西側において溝状遺構を確認した。一番近い礎石の平坦面のレベルから溝底場までの深さは北側で約8cm、北西側で約10cm、南西側で約6cmである。溝底場の標高は北側が726.994m、北西側が726.880m、南西側が726.820mであり、溝に流れ込んだ水は平坦地北辺を西に流れた後、平坦地西辺を南へ流れたと想定される。

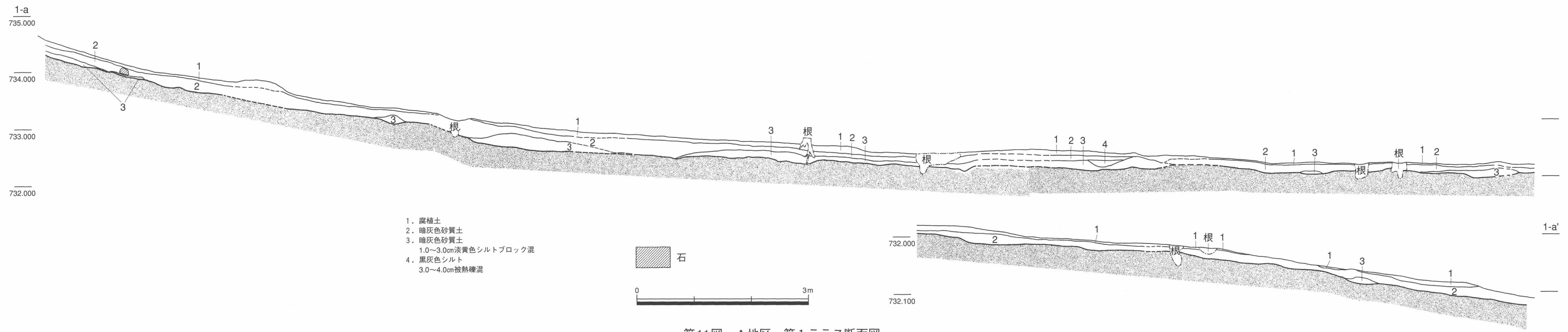
溝の埋土に砂粒が混じらず流水していた痕跡が確認できないことから、建物造営時において溝は空掘り状であったと想定され、山側からの流土により短期間の内に埋没したと考えられる。

溝の中心から一番近い礎石の中心までの距離は北側の溝で1.05m、北西側の溝で1.20m、南西側の溝で1.50mであり建物の屋根の方向と並行しないため溝が雨落溝ではないことが想定される。さらに北側・西北側において溝が岩盤を削り込んでいることから、溝状遺構は人工的に掘削された排水溝である可能性が高いと考えられる。

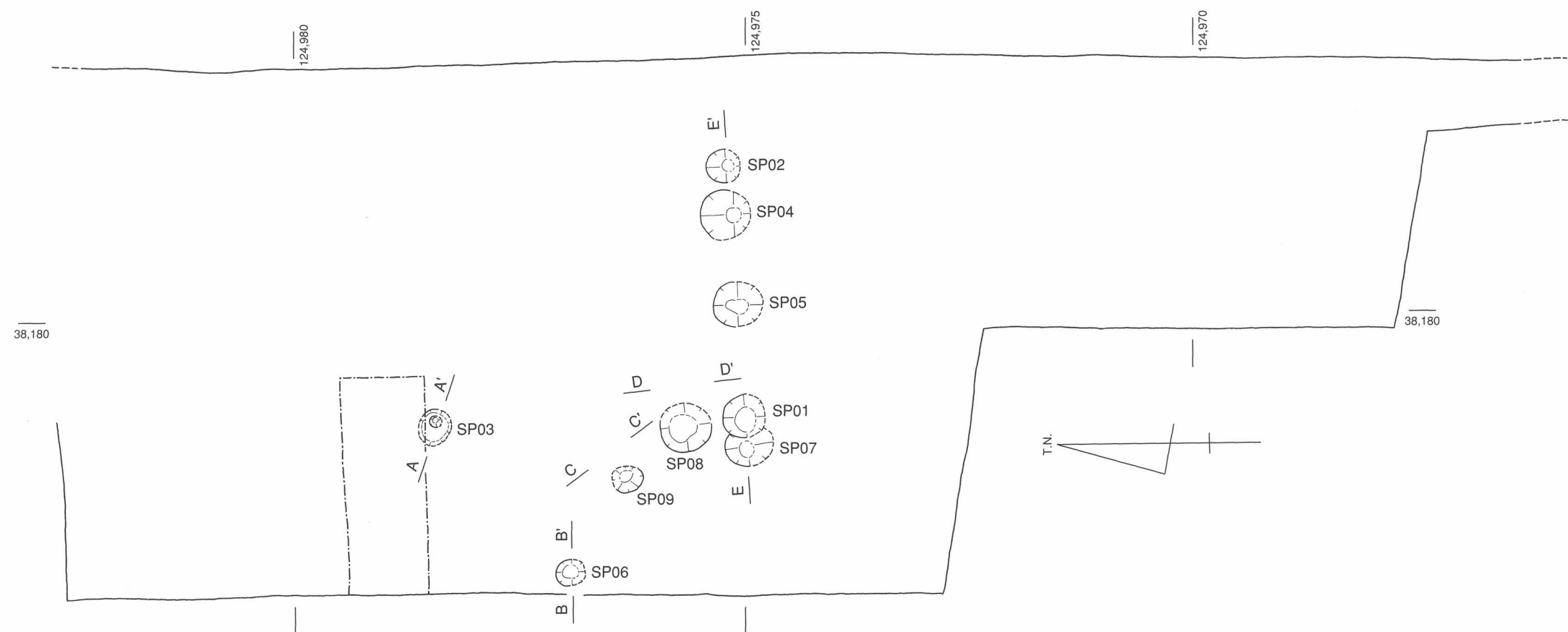
#### (4) 第1テラス

第1テラスは標高733m前後に位置し南西に面する約900m<sup>2</sup>のA地区において最も面積が広い平坦地である。発掘調査に先行し実施したボーリング棒調査において礎石を確認できなかったため、掘立柱建物跡の存在を想定し調査を行った。まず平坦地中央において南北方向のトレンチを設定し土層の状況を確認した後平坦面部分を西へ3m拡張した。その後遺物・遺構が多く確認した付近を更に西へ3m拡張した。その結果柱穴を数基検出し、第2・3テラスの建物と方位がほぼ一致する柱穴列を確認した。

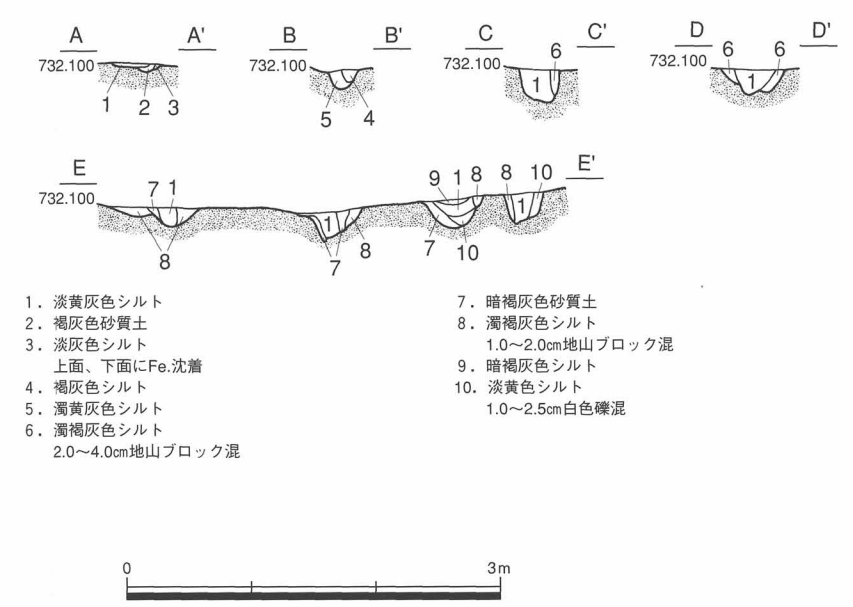




第11図 A地区 第1テラス断面図



第12図 A地区 第1テラス遺構平・断面図



この他平坦地造成の段階で混入した旧石器・縄文時代の遺物が出土し、中寺廃寺跡に先行する遺跡の存在を確認した。

① 平坦面の造成（第11図参照）

基本層序は地山、流土（2・3層）、腐植土（1層）の順である。また、被熱した礫を含む層（4層）は後世の炭焼きにより堆積したと想定される。

平坦地の造成は地山の掘削による。平坦地北端の標高は732.72m、南端の標高は731.71mである。2点間の標高差は約1m、距離は約23mであり、第1テラスの平坦地は谷側に向かって緩やかに下ることが確認できる。

② 検出遺構（第12図参照）

遺構検出面において柱穴を9基確認した。第1テラスでは近代に畑が営まれていたためか、削平が顕著であり各柱穴とも非常に浅い。確認した柱穴のうちSP02・SP04・SP05・SP01・SP07が東西方向で並び、掘立柱建物跡を構成する柱穴列の可能性はある。柱穴列の方位は東西方向でW-6°-Sであり、第2・3テラスで確認した遺構の方位とほぼ一致する。

## 第2節 遺物

### (1) 概要

平成16年度の調査では28ℓ コンテナに換算して約3箱分の遺物が出土した。遺物の種類は土師器・須恵器・鉄製品等で、主な時期は10世紀～11世紀である。鉄製品についてはX線写真を図版17に掲載した。昭和59年度調査同様に瓦は出土しなかった。

また、第1テラスにおいて旧石器時代～縄文時代前期の石器、縄文土器等が出土した。

### (2) 第3テラス（第13～15図参照）

第3テラスからは須恵器、土師器、黒色土器、鉄釘等が出土した。出土遺物の取り上げ点数は39点、うち土器が30点、鉄器が9点である。

遺物量は少ないが礎石以西と以東において比較的多く出土している。

第14図は第3テラスから出土した遺物の実測図である。1～3は平坦地を造成した際の盛土中より出土した。4～12は流土中より出土した。

1・2は須恵器椀の底部である。底部が突出し、体部下半が直線的に立ちあがる。3は黒色土器椀の底部である。内黒焼成であり、磨耗が激しく調整等は確認できない。高台を有し、体部下半は緩やかに内湾する。4～6は土師器杯の底部である。底部は平底でヘラ切りされている。7は須恵器鉢の口縁部である。8～10は土師器壺の底部である。底部は平底であり、体部下半は直線的に立ち上がる。

11は須恵器甕の破片である。内面の青海波文が磨耗していることから、転用硯と考えられる。遺物の破面には形を整えた痕跡が認められる。

12は鉄釘である。頭と軸の屈曲部から軸にかけてのラインが曲線的である（図版17参照）。遺物の時期はすべて10世紀の範疇に収まり、心礎石下部遺構出土遺物の年代と合致する。

第15図は昭和59年度調査による第3テラス心礎下部遺構の平面図と、そこから出土した遺物の実測図である。図中に網掛けした範囲が心礎石の範囲である。心礎石直下の土坑は、小礫をまばらに敷いた直径約90cm、深さ約25cmの不整円形を呈する。土坑のほぼ中央部には土師器長胴甕、その北側と西側に2個ずつ土師器壺を配置する。

土坑の外では、心礎石中心軸のすぐ南にあたる地点で土師器杯が据えられていた。さらに、土坑両側には直径約15cmの石を内径20～25cmの円形に配置した遺構を検出した。東側の配石遺構下からは心礎下部遺構のものと同形の土師器壺が出土したが、西側の配石遺構下では直径約30cm、深さ5cmの浅いピット状の落ちこみを検出したのみで、遺物は出土しなかった。

13は土師器杯である。底部は平底でヘラ切りされている。14は土師質土器長胴甕である。口縁部はゆるく外反した後、わずかに肥厚し、口縁端部は細くつまみ上げられている。15～19は土師器壺である。（※）細部に多少の差異は見られるが、いずれも平底で、体部は丸

38.175

38.180

38.185

38.190

T.N.

124.930

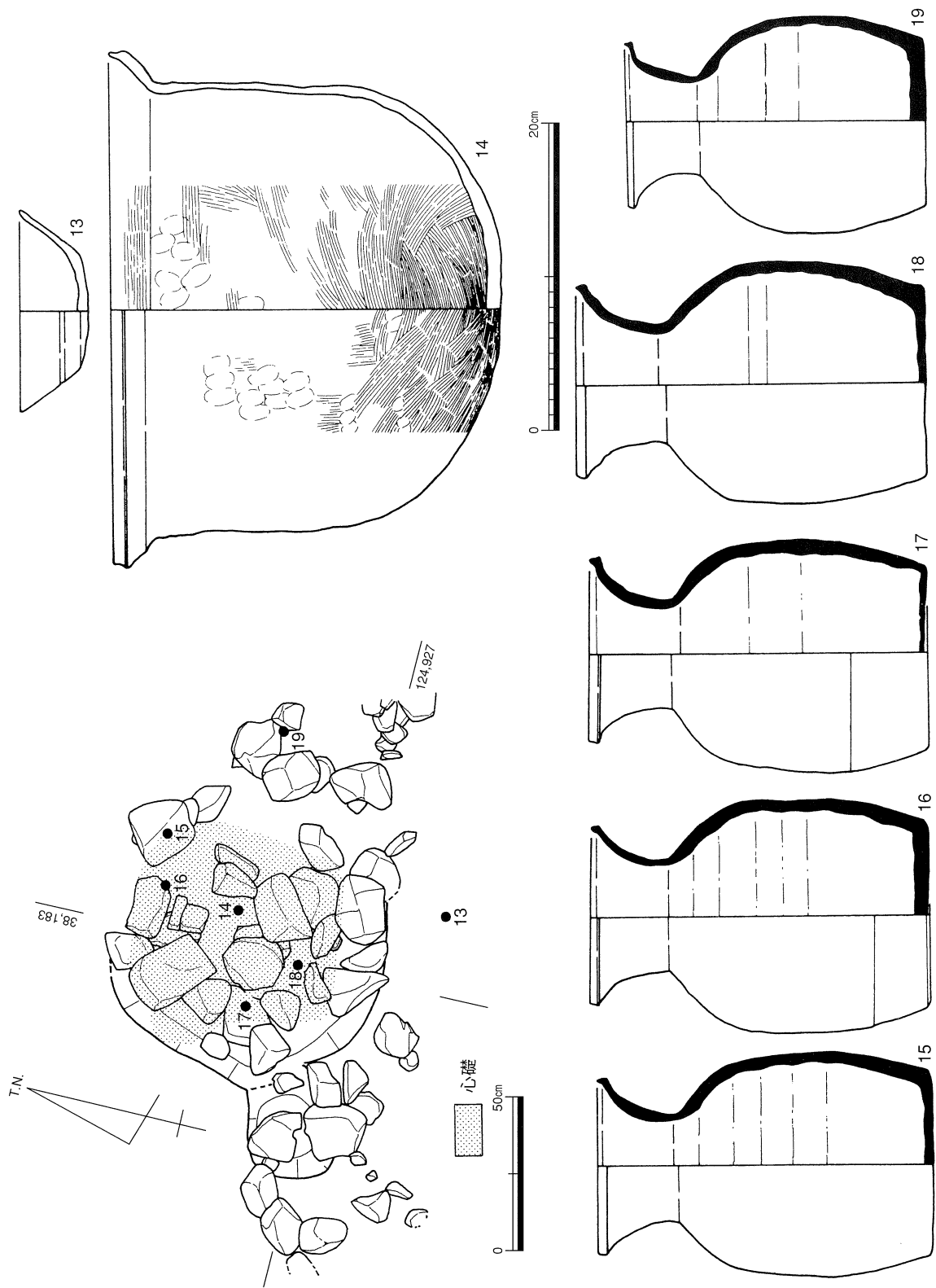
124.925

- 土器
- ▲ 鉄器
- 石

第13図 A地区 第3テラス遺物出土状況平面図

第14図 A地区 第3テラス出土遺物実測図

- 29 -



第15図 A地区 第3テラス心礎下部遺構平面図及び出土遺物実測図

みをもって立ち上がり、口縁端部は上方につまみ上げられている。底部はヘラ切りされている。香川県綾歌郡綾川町陶に所在する十瓶山古窯跡群において焼成されたと想定でき、時期は10世紀前半と考えられる。また、19の底部にはヘラ記号が刻まれている。

※ 15～19の壺は、形態や製作技法が須恵器と同じであるが、酸化焰焼成されていることにより色調が赤褐色で、土師器の様相を呈している。県内で同様の器形を呈する壺が確認されているが、それらは還元焰焼成された須恵器壺であることから、これらの遺物は特注品の可能性が考えられる。

### (3) 第2テラス（第17図参照）

土師器・鉄釘・鉄製品等が出土した。遺物は整地土（第9図6層）の上面ないし流土中より出土しており、掘立柱建物跡と礎石建物跡のどちらに伴う遺物であるか判断不可能であった。第2テラス出土遺物の取り上げ点数は194点で、うち土器が132点、鉄器が62点である。土器は土師器坏が多数を占め、建物内南西部より集中して出土した。土師器坏の中には、内外面に黒色や赤色を呈する樹脂が付着するものがある。鉄製品は鉄釘が多数を占めたが、金具状の鉄製品も数点確認した。鉄製品は建物内中央部北側、中央部西側、中央部東側より集中して出土した。

20～29、47、48は整地土直上から出土した。30～44は流土中より出土した。45は盛土が構築される以前の旧表土（第9図12層）中より出土した。46は盛土中より出土した。49は腐植土中より出土した。

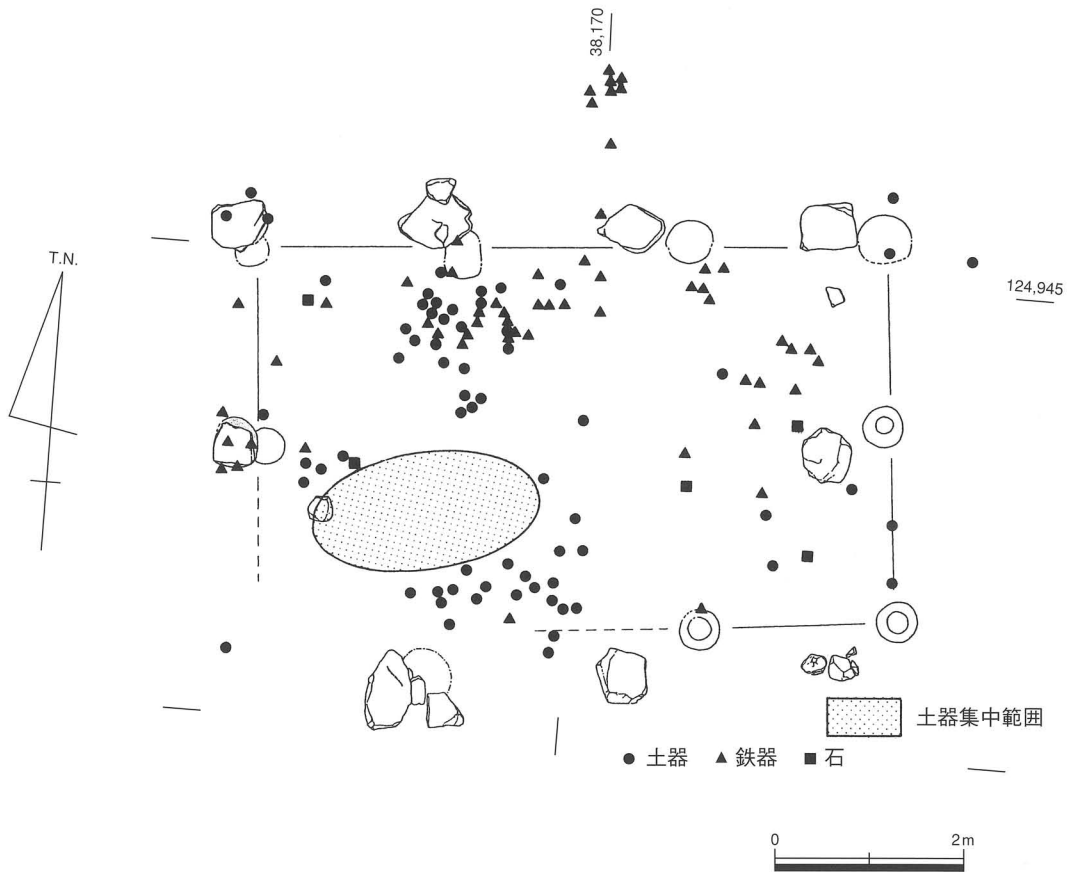
20～46は土師器坏である。20・30・31・45・46は底部から体部下半にかけてシャープに立ち上がり、時期は10世紀後半と考えられる。21～29・32～43は、底部から体部下半にかけてなだらかに立ち上がり、時期は11世紀と考えられる。遺物番号横に●があるものは、内外面に黒色や赤色を呈する樹脂が付着するものである。遺物番号に下線があるものは付着した樹脂について成分分析を行っている。

47～49は鉄製品である（図版17参照）。47は鉄釘である。頭と軸の屈曲部から軸にかけてのラインが直線的である。48は懸垂金具と想定される鉄製品である。先端を輪状に加工している。49はかすがいと想定される鉄製品である。

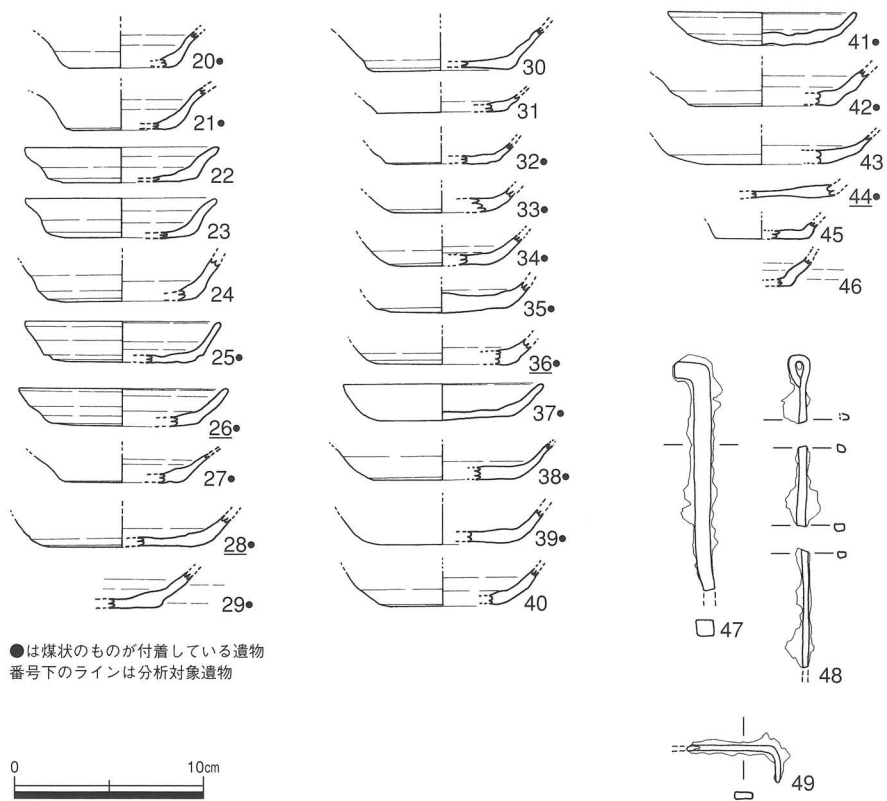
土師器坏の内外面に付着していた黒色や赤色を呈する樹脂について、くらしき作陽大学の北野信彦助教授によると以下のとおりであった。

樹脂は肉眼観察によると黒色を呈して土器内部に付着・固化した状態で観察される部分、赤褐色を呈して土器外面に薄く膜状に塗布されたように観察される部分等、様々な状態を有していた。

金属顕微鏡及び実態顕微鏡により観察した結果、樹脂における色調の差異は膜厚の差異



第16図 A地区 第2テラス遺物出土状況平面図



第17図 A地区 第2テラス出土遺物実測図

●は煤状のものが付着している遺物  
番号下のラインは分析対象遺物

0 10cm

により生じる事、すなわち膜面が厚い部分は黒色が強く、膜面が薄い部分は透明感が強く赤褐色を呈することを確認した。膜面のうち保存状態が良好な部分を観察すると、いずれも平滑な膜面構造を呈し、膜面の伸びによる凹凸や球状を呈する空気の抜け穴も観察した。

より詳しい分析のために5点の試料について有機分析（FT-IR）を行った結果、5点は全て類似しており、2～3種の樹脂がブレンドされたものであることを確認した。

膜面観察・有機分析の結果を総合的に判断すると、樹脂は燃料油と煤や炭粉が混じったものとは考えにくく、むしろ漆塗料が何らかの形で関与もしくは関係した樹脂、ただし生漆ではなく、大量の乾性油等が混入されて平滑度を高めた状態の塗料であると考えられる。

鉄製品は外面観察によりその多くが鉄釘と確認できたが、錆により形状の確認が困難な遺物が数点存在したため、徳島文理大学大久保徹也助教授のご協力によりX線透過による形状観察を行った。その結果、鉄釘は頭と軸の屈曲部から軸にかけてのラインが曲線的なものと直線的なものに分類でき、鉄釘以外の鉄製品としては軸の途中が直角に曲がるもの、細く先端を輪状に曲げているものがあることを確認した。

以上4種類の鉄製品について、香川県歴史博物館のご協力により撮影したX線写真を図版17に掲載している。

#### (4) 第1テラス

第1テラス出土遺物の取り上げ点数は189点で、うち石が172点、土器17点である。土器の底部が出土したが、小片のため時期の特定は不可能であった。

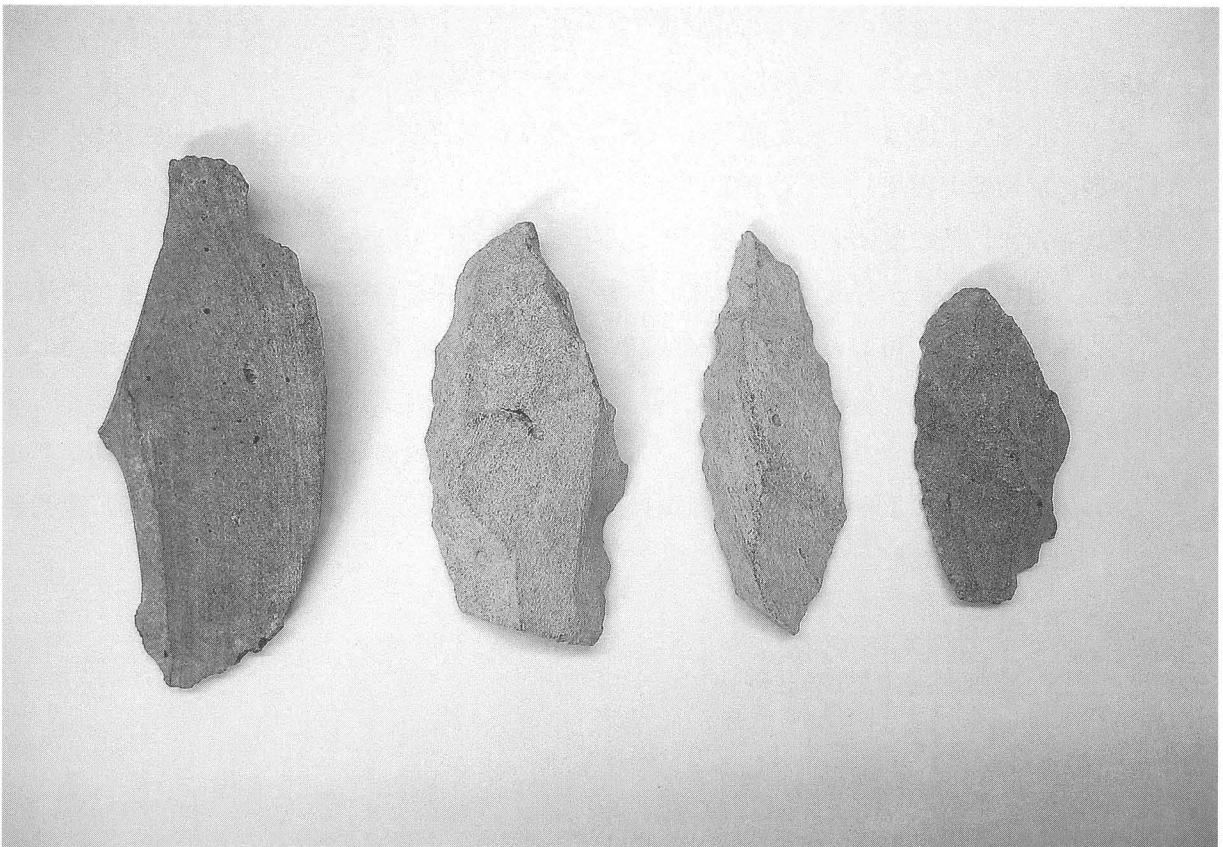
出土した縄文土器は爪形紋が施され、時期は縄文時代前期と考えられる。石製品はナイフ形石器、剥片等を確認した。石製品の材質は香川大学谷山護名誉教授によると、サヌカイトが多数を占め、その他は流紋岩であるとのことであった。（※）

※ A地区第1テラス出土のサヌカイトについては、中寺廃寺跡調査・整備委員会の丹羽佑一委員のご協力により、平成18年度科学研究費補助金基盤研究B「香川県金山産サヌカイト製石器の広域流通システムの復元と先史経済の特質の検討」の一環として産地同定のための分析を行った。蛍光X線分析法で検出された元素比のホテリングのT2乗検定によると、サヌカイトの産地は香川県五色台山系の白峰、国分寺、蓮光寺山に同定された。





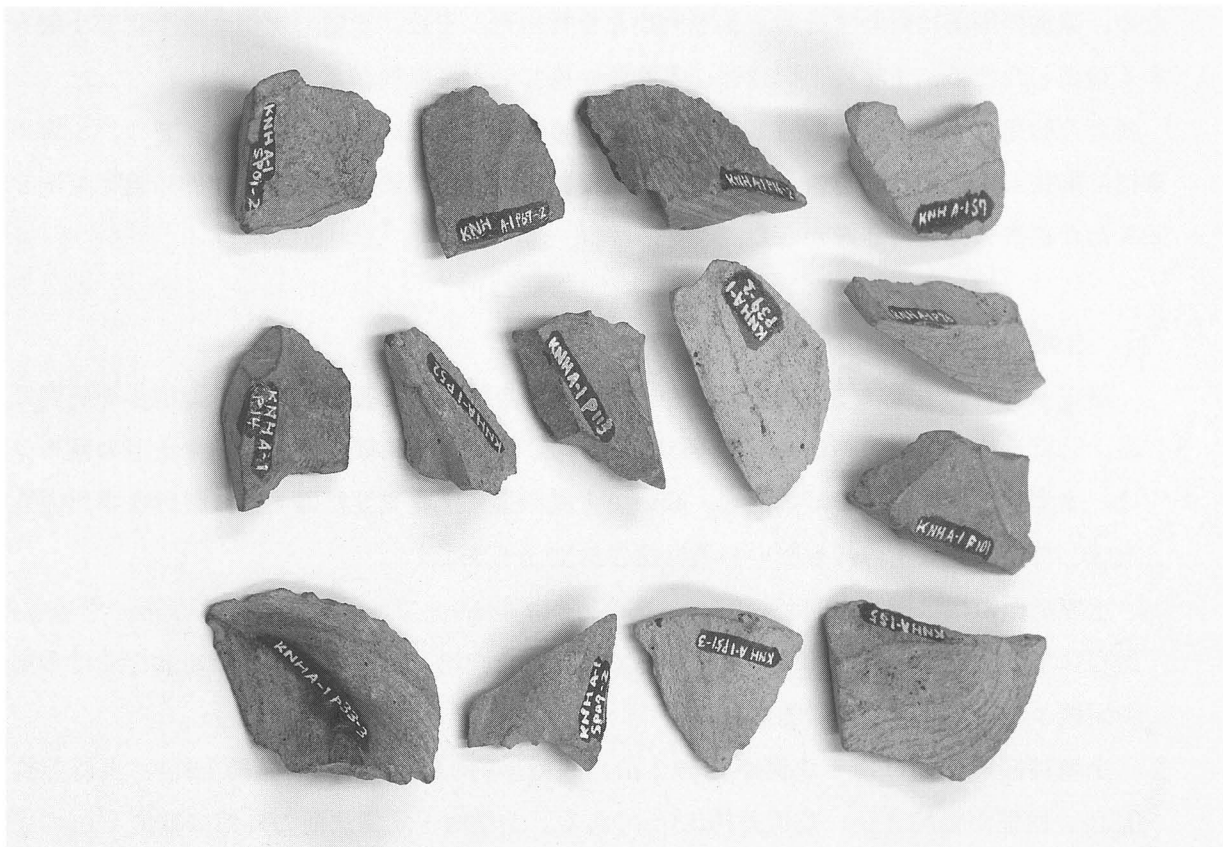
縄文土器



ナイフ型石器



分析対象のサヌカイト（片面）



分析対象のサヌカイト（片面）

## 第4章 平成17年度中寺廃寺跡確認調査概要

### 第1節 遺構

#### (1) 概要（第18図参照）

平成17年度の発掘調査はB地区の第1～3テラスを対象とした。B地区第1～3テラスは大川山山頂が所在する南東方向へ延びる尾根の鞍部に位置する。各テラスは周囲を勾配の強い斜面により囲まれているが、第1テラスの北東・北西側のみ緩斜面の尾根が連結する。第1テラスと第2テラスの比高差は約3m、第2テラスと第3テラスの比高差は約5mである。

発掘調査の結果、第1テラスにおいては礎石建物跡1棟とそれに伴う広場状遺構を確認した。第2テラスにおいては掘立柱建物跡3棟と溝2条を確認した。第3テラスにおいては掘立柱建物跡1棟を確認した。

#### (2) 第1テラス

第1テラスは南東方向へ延びる尾根の鞍部に位置する300m<sup>2</sup>程度の平坦地である。平坦地の標高は689m前後であり第2・3テラスよりも高所に位置する。調査着手前の現況地形測量の段階で土壇・礎石・土壇東側に隣接した平坦地を確認した。平成17年度は土壇全体の4分の3を発掘調査した。残りの4分の1については腐植土除去段階で礎石配置を確認したため、追加の掘削は行わずそのまま埋め戻しを行った。また、土壇の腐植土直下にて小礫を多く検出したため、土壇の上面は礫により葺かれていた可能性が考えられる。

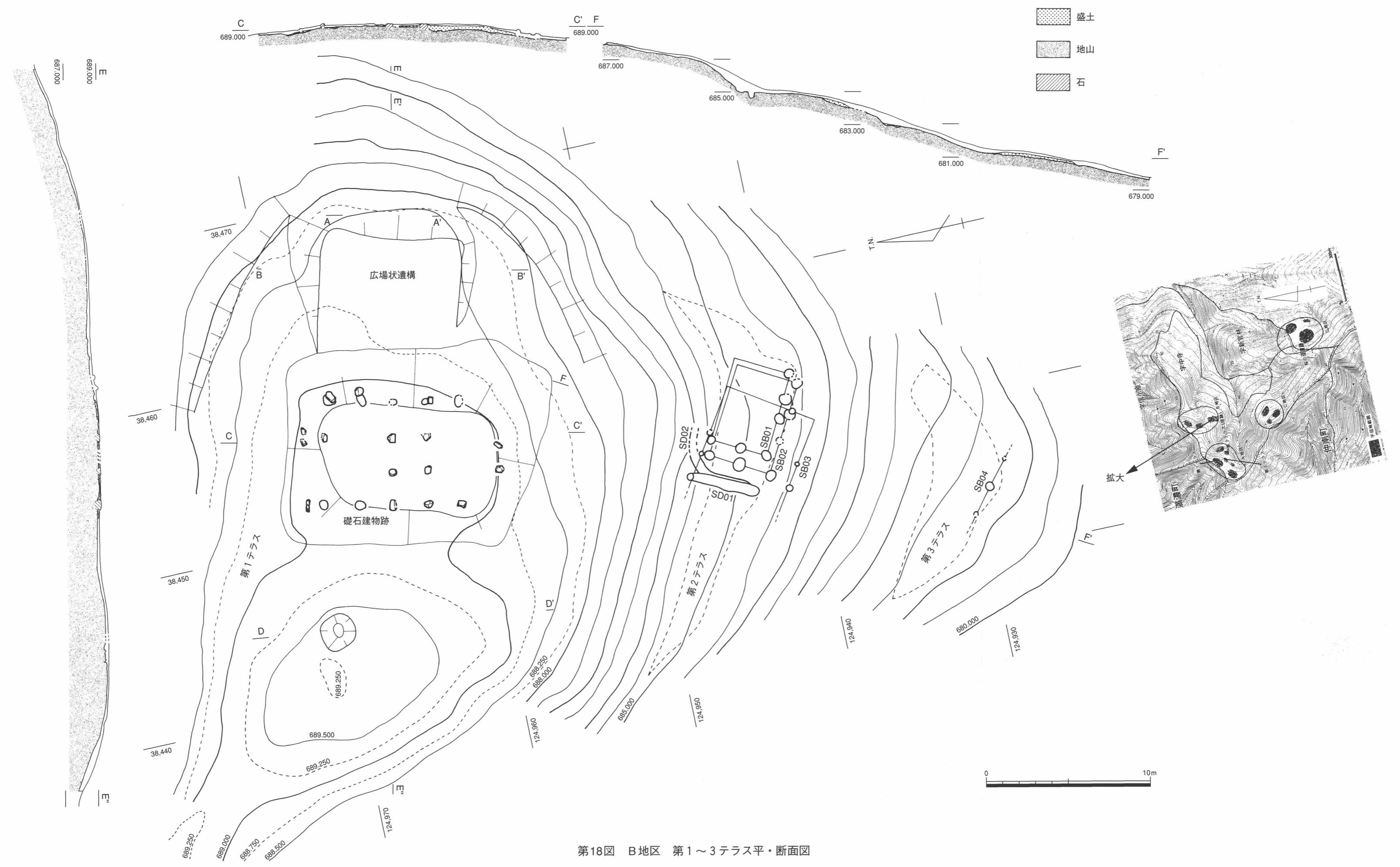
調査の結果、土壇を伴う桁行5間×梁行3間の礎石建物跡を1棟確認した。また、土壇の東側に隣接した広場状の遺構を確認した。また、土壇の西側についても平面的に遺構検出を試みたが遺構は確認できなかった。

##### ① 土壇の造成（第20図参照）

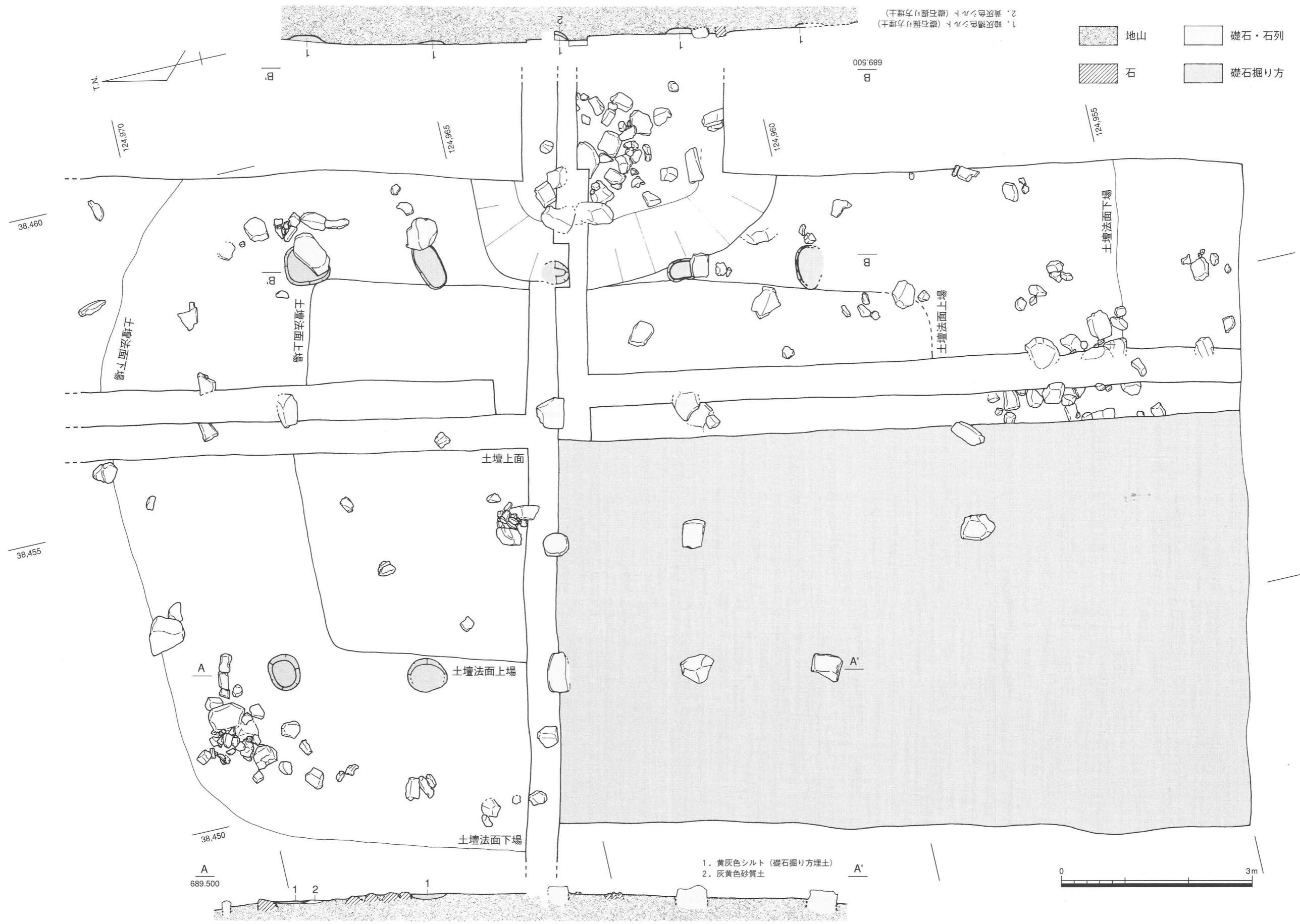
第1テラスの土壇は尾根鞍部の緩やかな平坦地を岩盤まで掘削し、その掘削土を周囲に盛土して造成している（C～C'断面参照）。特に尾根の主軸線からはみ出す土壇の南半分は、まず地山面を岩盤まで掘削し、続いて土質の違う土を交互に薄く盛り堅固な平坦面を造成している。盛土の最も厚い場所は深さ約30cmを測る。

土壇上面の幅は南北方向が約9.5m、東西方向が約5.9mで、平坦地面積は約56m<sup>2</sup>である。礎石は土壇上面から外側へはみ出す状態で検出したため、土壇上面は長年侵食を受け本来の面積より狭くなったと考えられる。

土壇周囲の法面は南・北側が幅約2m、高低差約0.5m。東側が幅約3.5m、高低差約0.5m。西側が幅約3m、高低差約0.3mである。土壇南・北側法面の外側は幅約1mの平坦地により囲まれ、その外側が自然地形となる。土壇西側法面の外側は尾根へと続く幅約

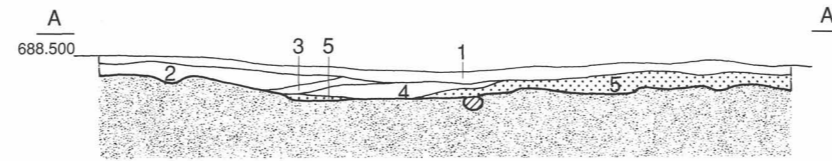


第18図 B地区 第1～3テラス平・断面図



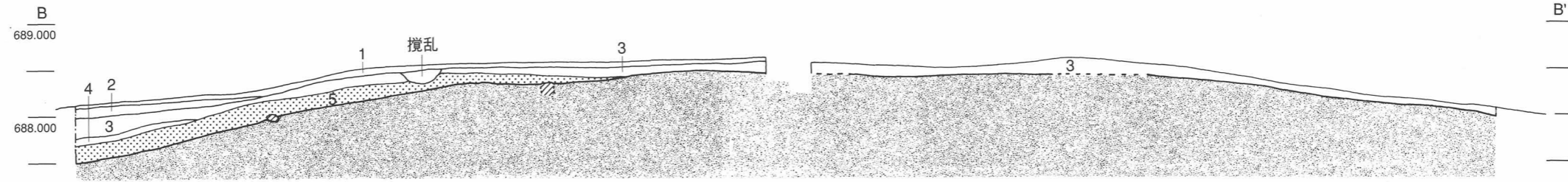
第19図 B地区 第1テラス平・断面図

1. 腐植土
2. 暗褐色砂質土 (流土)
3. 濁褐色シルト 褐灰色シルト少混 (流土)
4. 褐灰色粘質土 0.5~2.0cm炭多混 (流土)
5. 褐黄色シルト (盛土)

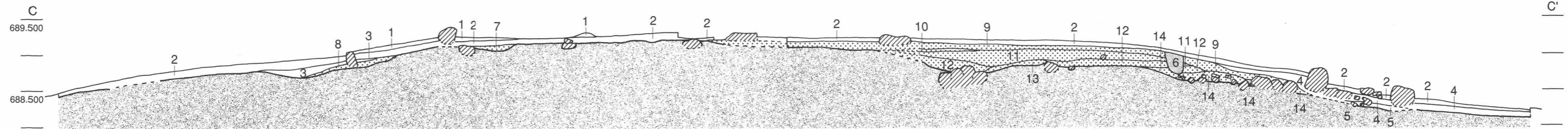


- |  |    |  |       |
|--|----|--|-------|
|  | 盛土 |  | 礎石掘り方 |
|  | 石  |  | 地山    |

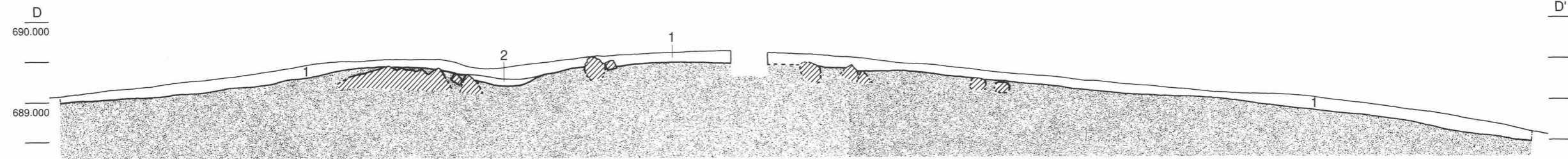
1. 腐植土
2. 灰褐色砂質土 2.0~3.0cm黄褐色砂質土 (流土)
3. 暗黄色シルト 0.5~1.0cm被熱礫少混 0.3~0.5cmの炭少混 (流土)
4. 濁黄色砂質土 0.1~0.3cm炭粒・被熱礫少混 (流土)
5. 淡黄灰色シルト (盛土)



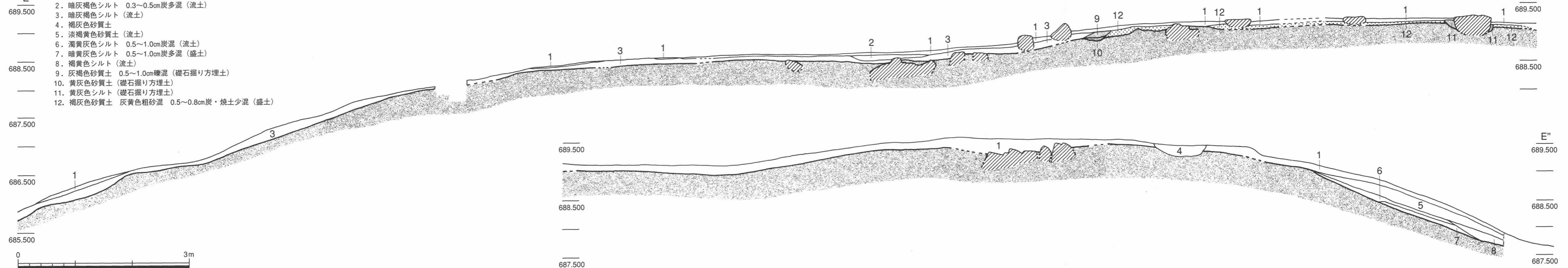
1. 腐植土
2. 暗褐色シルト (流土、E'~E"間3層)
3. 灰褐色シルト 0.5~1.0cm灰黄色シルト少混 (流土)
4. 灰褐色シルト (流土)
5. 黒褐色シルト 1.0~2.0cm炭多混 (流土)
6. 暗黄色シルト (礎石掘り方埋土)
7. 暗褐色シルト 1.0~2.0cm灰黄色シルト混 (盛土)
8. 濁褐色砂質土 褐灰色シルト混 1.0~3.0cm礫多混 (盛土)
9. 褐灰色砂質土 灰黄色粗砂混 0.5~0.8cm炭・焼土少混 (盛土、E'~E"間12層)
10. 濁黄色砂質土シルト (盛土)
11. 淡黄灰色シルト (盛土)
12. 濁黄灰色砂質シルト 1.0~2.5cm炭混 (盛土)
13. 濁灰褐色砂質シルト 1.0~2.5cm炭混 (盛土)
14. 淡灰褐色シルト 2.5~5.0cm礫多混 (盛土)



1. 腐植土
2. 混褐灰色シルト



1. 腐植土
2. 暗褐色シルト 0.3~0.5cm炭多混 (流土)
3. 暗褐色シルト (流土)
4. 褐灰色砂質土
5. 淡褐色砂質土 (流土)
6. 濁黄灰色シルト 0.5~1.0cm炭混 (流土)
7. 暗黄灰色シルト 0.5~1.0cm炭多混 (盛土)
8. 褐黄色シルト (流土)
9. 灰褐色砂質土 0.5~1.0cm礫混 (礎石掘り方埋土)
10. 黄灰色砂質土 (礎石掘り方埋土)
11. 黄灰色シルト (礎石掘り方埋土)
12. 褐灰色砂質土 灰黄色粗砂混 0.5~0.8cm炭・焼土少混 (盛土)



第20図 B地区 第1テラス断面図

3 m、高低差約0.5mの高まりとなる。

土壇北東隅の法面において礎石配置と平行する石列を確認した。また、土壇北辺中央の法面においても列石を確認した。このような石列が土壇を補強する目的で設置された可能性がある。

## ② 礎石建物跡（第19・20図参照）

礎石は土壇上面の端部に沿い8個確認した。礎石を据えた掘り方と土壇外側へ転落した礎石を確認しているため、本来は桁行5間×梁行3間の礎石が設置されていたと考えられる。また、土壇中央には若干小ぶりの礎石が4個、1間×1間で並んでいる。土壇上面端部の礎石は大小様々な形状をなすが、土壇中央の4個はほぼ大きさがそろい西側2個が隅丸正方形を呈する。礎石の石材はいずれも和泉砂岩である。発掘調査地の北東約100mにおいて礎石と同質の石が露出しているため、礎石は周囲の自然石を調達し、設置したと考えられる。

また、土壇東側中央部において板状や角柱状等様々な形状を呈す石の集石と土壇の窪みを確認した。板状の石は階段の踏み石、角柱状の石は階段の耳石と考えると、建物内部へと昇降するための階段を構成していた石材と考えられる。

礎石建物跡の幅は桁行約10.0m、梁行約6.3mで、床面積は約63m<sup>2</sup>である。桁行における各礎石の間隔は約2.1m、梁行における各礎石の間隔は約2.0mである。また、建物中央の4個の礎石は約2.1m間隔で並んでおり、外側の礎石列とは東西軸が若干ずれる。建物の方位は桁行方向の礎石列でN-12°-Wである。また、建物の東面は大川山山頂方向を向いている。

各礎石について中央部の最小幅を計測すると、外側礎石列のうち四隅の礎石が約35cm、四隅を除く礎石が約25cm、建物中央の4個の礎石が約30cmである。そのため、柱の規模は建物の四隅の柱が直径35cm以下、建物の四隅を除く外側の柱が25cm以下、建物中央の柱が直径約30cm以下であったと考えられる。断面図及び現地での観察によると外側礎石列の各礎石は比較的厚く削平された岩盤上や盛土上に掘り方を伴って据えられている。それに対して建物中央の4個の礎石は比較的薄く盛土上面に直に据えられている。

## ③ 広場状遺構（第18・20図参照）

広場状遺構は南北幅約9.0m、東西幅約6.0mで、約54m<sup>2</sup>の平坦地である。平坦面の形状は平坦部東側中央部が若干窪む方形を呈し、方位は西側に隣接する礎石建物跡とほぼ合致する。

断面図によると広場状遺構は中央から南側が地山掘削、東側が若干の盛土により造成されたことが見て取れる（B～B'断面）。

また、広場状遺構東側中央部から低所の幅約1m30cmの平坦地へと下る幅90cmのスロー

プを確認した（A～A'断面・E～E'断面）。低所の平坦地は地表面の観察により、北東へ向かう緩斜面の尾根まで続いていることがわかる。尾根はまんのう町造田柞野谷<sup>くにぎの</sup>へと下る山道と連結しているため、麓からの上り口と建物をつなぐ道であったと考えられる。

### (3) 第2テラス

第2テラスは標高686m前後に位置する約60m<sup>2</sup>の南面する平坦地である。山側の第1テラスと谷側の第3テラスの中間に位置する。調査着手前の現況地形測量の段階で平坦地を確認していた。まず第1～3テラスを縦断するトレンチを設定し、平坦地の範囲・堆積状況を確認した後、調査区を拡張し地山・盛土上面において遺構検出を試みた。エリアAにおいては遺構を完掘し、エリアBにおいては遺構検出状況の記録を行った。また、エリアBの柱穴については、検出面における遺構埋土上面の土質がエリアAの柱穴列と共通するものについて建物を構成する柱穴とした。

調査の結果、桁行3間×梁行2間の掘立柱建物跡2棟（SB01・SB02）、桁行4間以上×梁行4間の掘立柱建物跡1棟（SB03）、溝状遺構2条（SD01・SD02）を確認した。平坦地の大部分が焼土・炭片が多く混じる焼土層（第23図K～K'間断面図12・13層）で被覆されていた。SB01・SB02は焼土層の下層より検出し、SB03は焼土層を切り込む状態で検出した。また、各建物跡と関係しない柱穴を数基確認しているため、先行・後出する遺構が存在する可能性がある。（※）

#### ① 平坦地の造成（第23図参照）

第2テラスは山側の地山を岩盤まで掘削し、その掘削土を谷側へ数段階に盛土して平坦地を造成している。平坦地は発掘範囲外においても北西方向へ延びており、他の建物が存在する可能性が考えられる（第18図点線参照）。

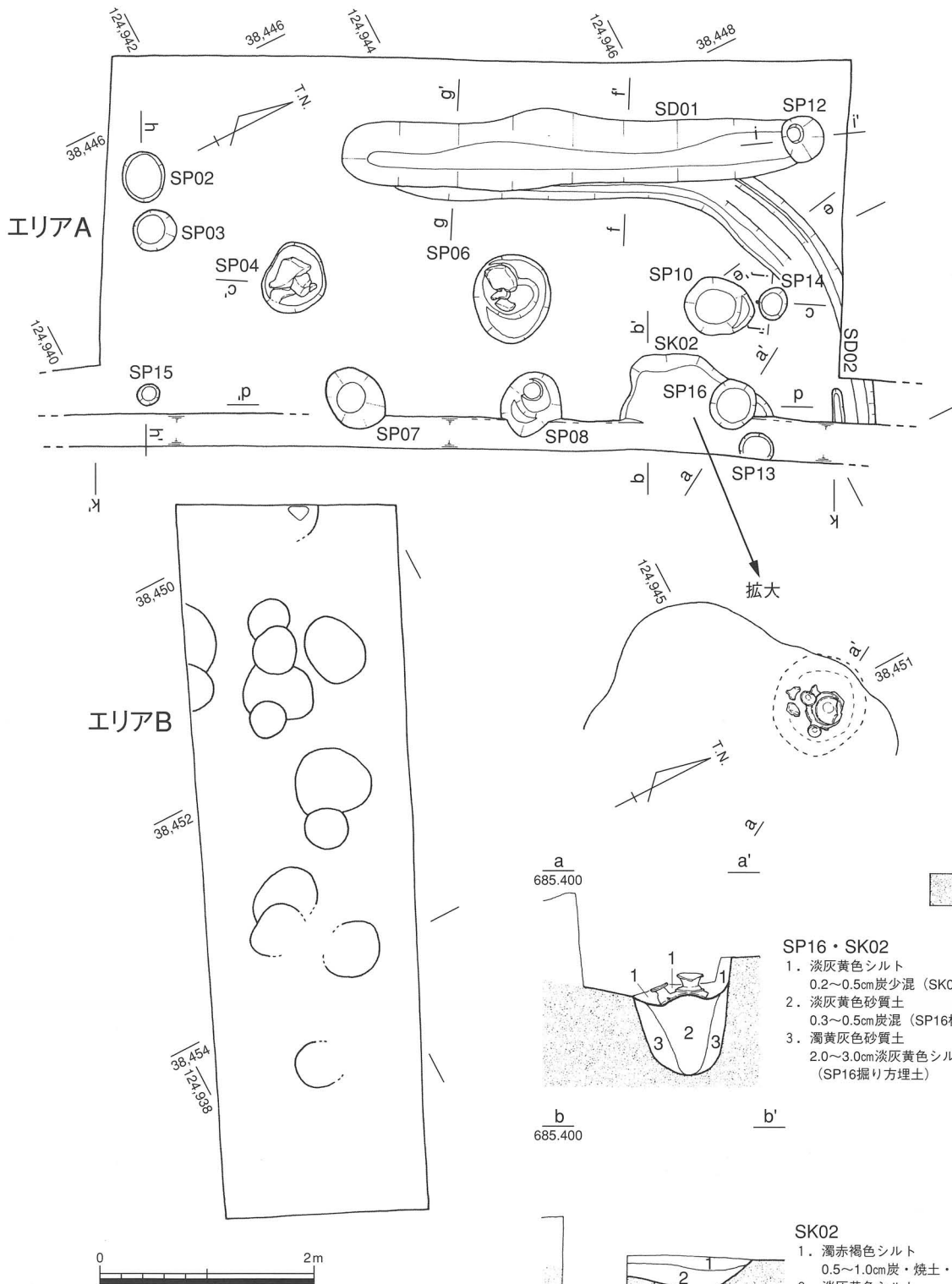
平坦地周辺の斜面勾配は山側自然地形が15°、山側切土法面が35°、谷側盛土法面が47°である。谷側法面の角度からは当時の平坦地はさらに広がったと想定され（第23図点線参照）、第2テラスを造成した盛土の大部分は流失したと考えられる。

また、第2テラス盛土の下方で幅約1mの狭い平坦地を確認した。各テラスを連結する道の可能性が考えられるが、地表面では平坦地を観察できないためどこに連結するのか不確定である。

#### ② 掘立柱建物跡SB01（第21～23図参照）

遺構検出面において、桁行3間×梁行2間の掘立柱建物跡を構成する柱穴を6基検出した。建物の方位は梁行方向の柱穴列でN-28°-Eである。建物の幅は桁行約5.2m、梁行約3.6mであり、床面積は約19m<sup>2</sup>である。桁行における各柱穴の間隔は不揃いである。それに対し梁行における各柱穴の間隔は約1.8mで統一される。





第21図 B地区 第2テラス平面図

第22図 多口瓶出土状況平・断面図

柱穴の掘り方が盛土を切り込むため、盛土造成後に掘立柱建物を構築したことが確認できる。柱痕を確認できる柱穴があり、柱痕の幅から柱の直径は約10cmと想定できる。また、SP16は柱抜き取り後に周囲に土坑SK02を掘削しており、SK02からは須恵器多口瓶の上部がほぼ完形で出土した。多口瓶は建物廃絶直後に地鎮・鎮壇行為が行われた際、柱痕の真上に埋納されたと考えられる（第22図参照）。また、SD02より出土した多口瓶が、SK02出土の多口瓶と接合するため、SD02は掘立柱建物SB01と近い時期に埋没した遺構であると考えられる。SD02はその位置・形状より山側斜面から、平坦地へ流入する雨水を建物の外側へ流す排水溝と考えられる。

### ③ 掘立柱建物跡SB02（第21・23図参照）

遺構検出面において、桁行3間×梁行2間の掘立柱建物跡を構成する柱穴を6基検出した。建物の方位は梁行方向の柱穴列でN-28°-Eである。建物の幅は桁行約6.0m、梁行約4.0mであり、床面積は約24㎡である。桁行における各柱穴の間隔は中央の1間のみ約1.6mで、他は約2.2mである。それに対し、梁行における各柱穴の間隔はすべて約2.0mで統一される。

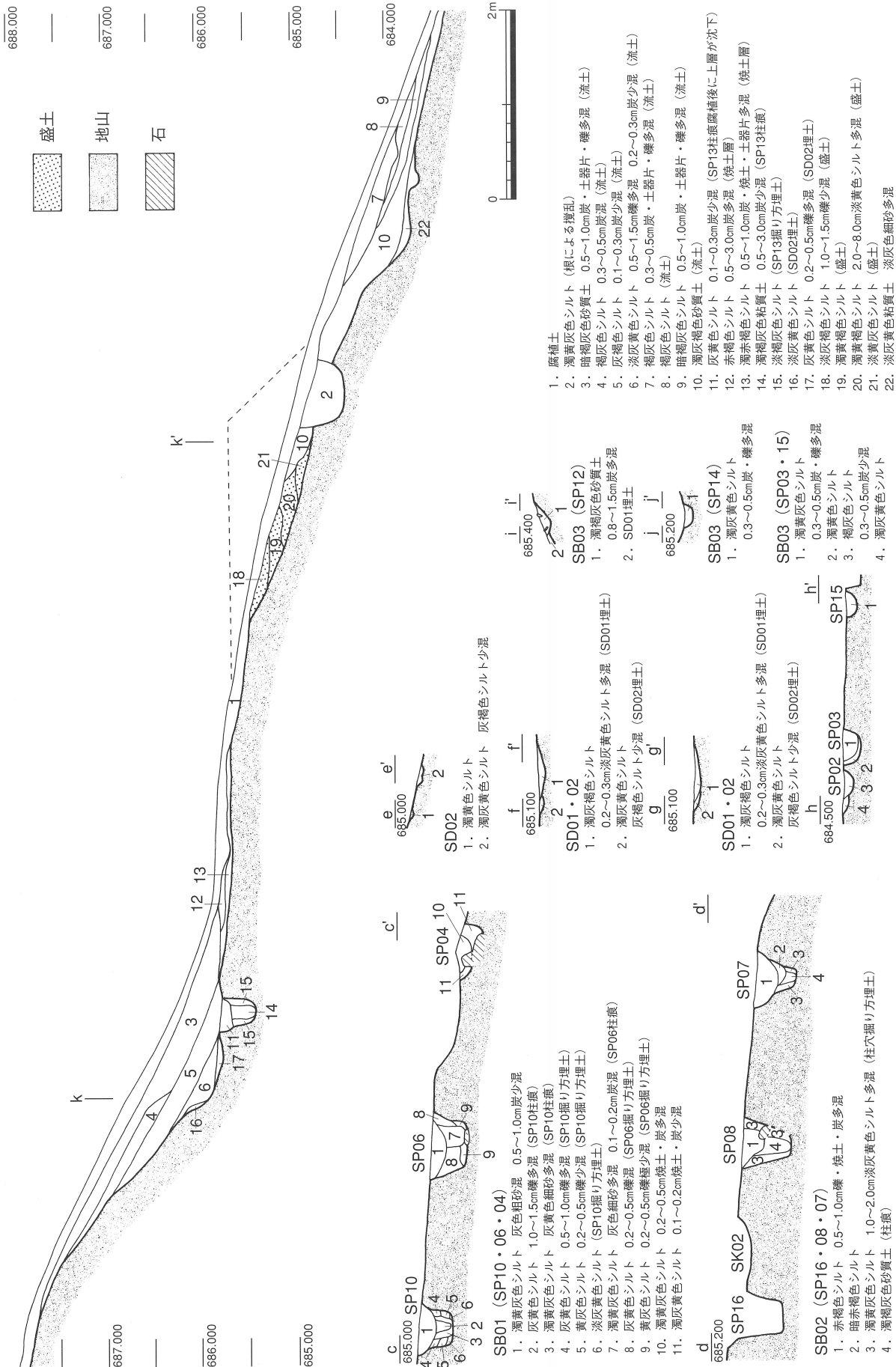
柱穴の掘り方が盛土を切り込むため、盛土造成後に掘立柱建物が構築されたことが確認できる。柱痕を確認できる柱穴があり、柱痕の幅から建物を支えた柱の直径は約20cmと想定できる。また、SP04・SP06には根石が設置されている。

また、柱穴列西側にあるSD01は掘立柱建物跡SB01に伴うSD02を切ることから、SB02に伴う可能性が考えられる（第23図f～f'・g～g'間断面参照）。SD01はSB02の梁行方向に平行しており、柱穴の中心から溝の最深部までの幅は約1.3mである。SD01は位置・形状よりSB02の雨落溝であると考えられる。

### ④ 掘立柱建物跡SB03（第21・23図参照）

遺構検出面において、桁行4間以上×梁行4間の掘立柱建物跡を構成する柱穴を6基検出した。SB03を構成する柱穴は焼土層を切り込む状態で検出しており、柱穴がSK02・SB02・SD01を切り込むことから、他の遺構に比べて最も新しい時期の建物跡と考えられる。柱穴の方位は桁行方向の柱穴列でN-57°-Wである。建物の幅は梁行約5.7mで、桁行は約6.0m以上と考えられる。桁行における各柱穴の間隔は約1.9m、梁行における各柱穴の間隔は約1.5mである。柱痕を確認できる柱穴があり、柱痕の幅から建物を支えた柱の直径は約20cmと想定できる。またテラス付近の測量図によるとテラスは調査区外において北東方向へ延びており、他の柱穴の間隔から建物の桁行は7～8間程度であったと考えられる（第18図参照）。

※ B地区第2テラスについては、平成18年度に追加調査を行った。その結果平成17年度に確認していた掘立柱建物跡SB01・SB02と溝状遺構SD02の続きを確認した。



第23図 B地区 第2テラス断面図

SB01は桁行3間で幅が約6.0m、梁行が2間で幅が約3.6mの掘立柱建物跡であった。SB02は桁行3間で幅が約6.0m、梁行が2間で約4.0mの掘立柱建物跡であった。SD02は山側斜面と平坦地の境に位置する溝と、建物の桁行方向に併行する溝を確認した。前者は山側斜面より建物に流れ込む水を排水するための溝、後者は建物屋根からの雨落溝と考えられる。

#### (4) 第3テラス

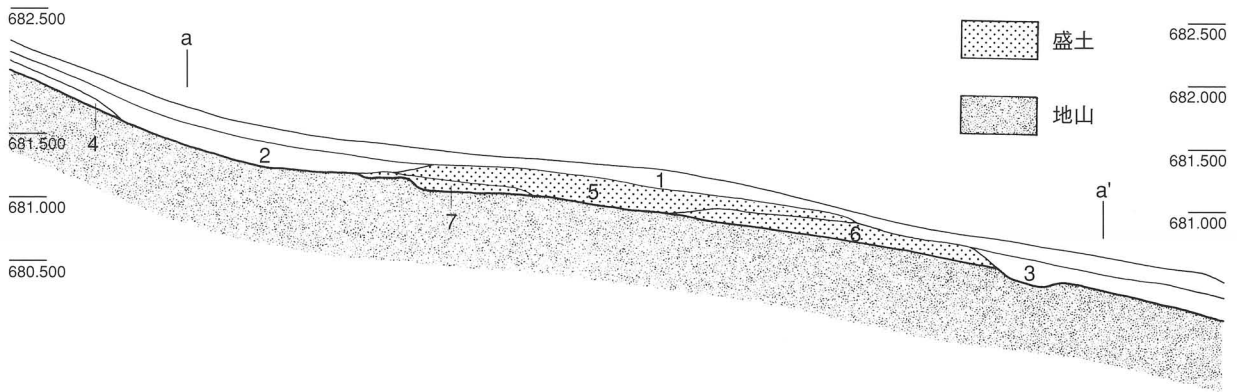
第3テラスは標高681m前後に位置する約40㎡の南面する平坦地で、第1・2テラスより低所に位置する。平成18年度はまず第1～3テラスを縦断するトレンチを設定し平坦地の範囲・堆積状況を確認した後、調査区の拡張を行い盛土直上面において遺構検出を試みた。しかし、表土からの植物根による攪乱が激しく遺構の検出が困難な状態であった。そのため盛土を掘削し地山上面まで掘削した状態で遺構検出を試み、記録を行った。調査の結果、掘立柱建物跡を1棟確認した(SB04)。他にも溝状遺構と柱穴数基を確認した。

##### ① 平坦地の造成 (第24図参照)

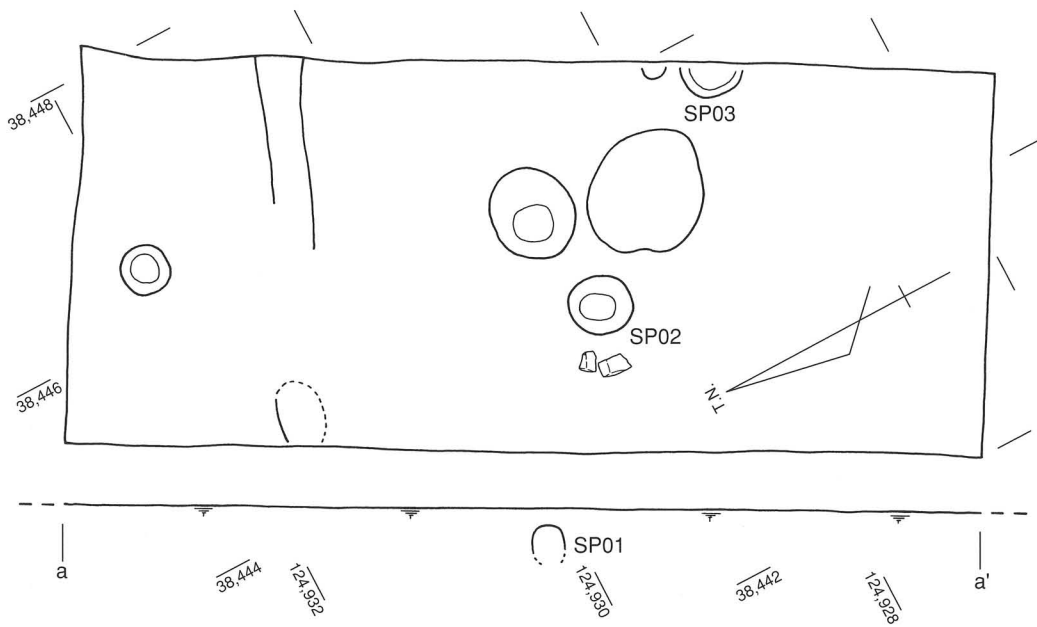
第3テラスは、山側は地山を岩盤まで掘削し、その掘削土を谷側へ盛土して平坦地を造成している。盛土は谷側より数段階に分けて構築していたと思われるが、盛土の大部分は流出している。平坦地周辺の斜面勾配は山側切土法面が24°、谷側盛土法面(3層と6層の境)が41°、谷側自然地形が14°である。谷側盛土法面の角度からは当時の平坦地はさらに広がったと考えられる。

##### ② 掘立柱建物跡SB04 (第24図参照)

遺構検出面において、2間以上の掘立柱建物跡を構成する柱穴SP01・02・03を検出した。各柱穴の検出面における遺構埋土上面の土質はほぼ同質であった。柱穴列の方位はN-43°-Wである。検出した建物跡の幅は約4.0mであった。各柱穴の間隔は約2.0mであった。柱痕を確認できる柱穴があり、柱痕の幅から建物を支えた柱の直径は約20cmと想定できる。またテラス付近の測量図によるとテラスは北東・南西方向へ延びており、他の柱穴の間隔から建物の桁行は4～5間程度であったと考えられる(第18図参照)。



1. 腐植土
2. 濁灰褐色砂質土 (流土)
3. 濁黄灰色砂質土 (流土)
4. 淡灰黄色シルト 2.0~3.0cm礫多混 (流土)
5. 赤黄色シルト 0.5~0.8cm炭・土器片混 (盛土)
6. 灰黄色シルト 0.5~0.8cm炭多混 (盛土)
7. 淡灰黄色粘土 (盛土)



第24図 B地区 第3テラス平・断面図

## 第2節 遺物

### (1) 概要

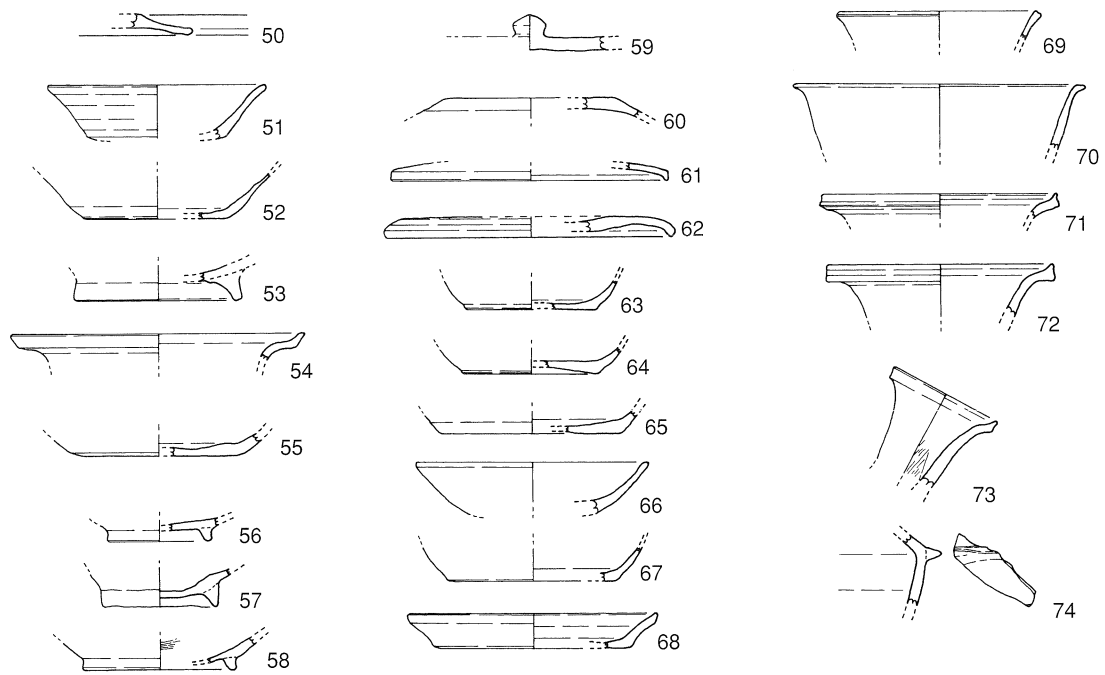
平成17年度発掘調査において28ℓコンテナに換算して約5箱分の遺物が出土した。遺物の種類は須恵器・土師器・土師質土器・黒色土器・越州窯系青磁・鉄製品・銅製品等で、時期は8世紀後半～12世紀である。金属遺物についてはX線透過写真を図版27に掲載した。また、過去の発掘調査同様瓦は出土しなかった。

### (2) 第1テラス（第25図参照）

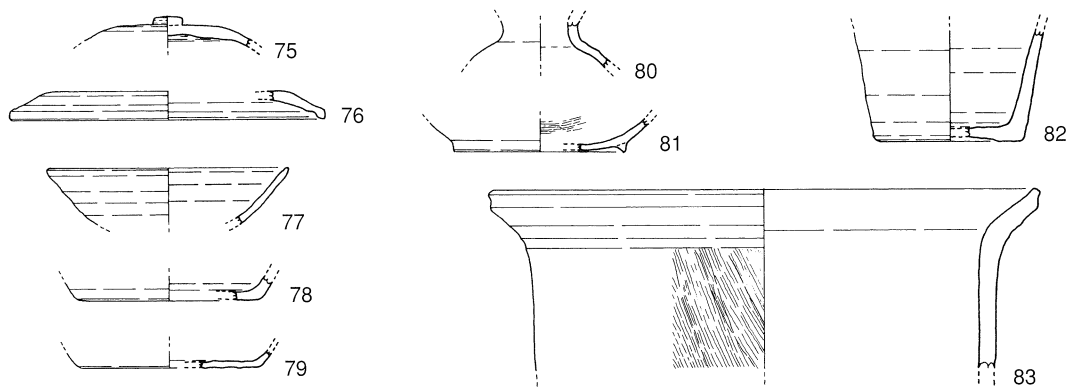
第1テラスからは須恵器、土師器、黒色土器、金属遺物等が出土した。遺物は盛土・地山直上～流土下位において多く出土しているが、発掘対象面積に比べて遺物量は少ない。50はSP08の埋土中より出土した。51～54は土壇の盛土中より出土した。55～74は地山・盛土直上～流土中より出土した。

50は須恵器坏蓋である。上面が平たく口縁端部は内面にゆるいナデを施す。51・52は土師器坏である。底部から体部にかけてやや外反しつつシャープに立ち上がる。53は黒色土器碗の底部である。厚い断面長方形の輪高台が付く。内黒焼成であるが、磨耗が激しく調整等は確認できない。54は土師器壺である。口縁部は受け口状を呈し、口縁端部をつまみ上げている。55は土師器の坏である。底部から体部にかけて緩やかに立ち上がる。底部は回転ヘラ切りである。56・57は土師器碗の底部である。56は断面長方形、57は断面三角形の輪高台が付く。58は黒色土器碗の底部である。内黒焼成で内面にヘラ磨き調整を施し、輪高台が付く。59～62は須恵器坏蓋である。59は宝珠形のつまみが付き、また内面が磨耗し平滑であるため、転用硯として使用していたと考えられる。60～62にも59と同様のつまみが付くと考えられる。63～65は須恵器の坏である。66～68は土師器の坏である。63・64・67・68は底部から体部にかけて外反しつつシャープに立ち上がる。66は体部が内湾しつつ立ち上がる。69～73は須恵器壺の口縁部である。71・72はゆるく外反した後、端部をつまみ上げる。74は須恵器壺の肩部である。肩部に断面三角形の突帯を接合する。71～74は胎土・色調について他の須恵器と明確な差異があり、また表面に自然釉が厚く付着していた。また、小片のため未図化であるが73のような小口縁部と74のような肩部との接合部を確認しており、71～74は多口瓶と考えられる。なお、第2テラス出土遺物と併せて後述するが、多口瓶は西播磨産須恵器と考えられる。

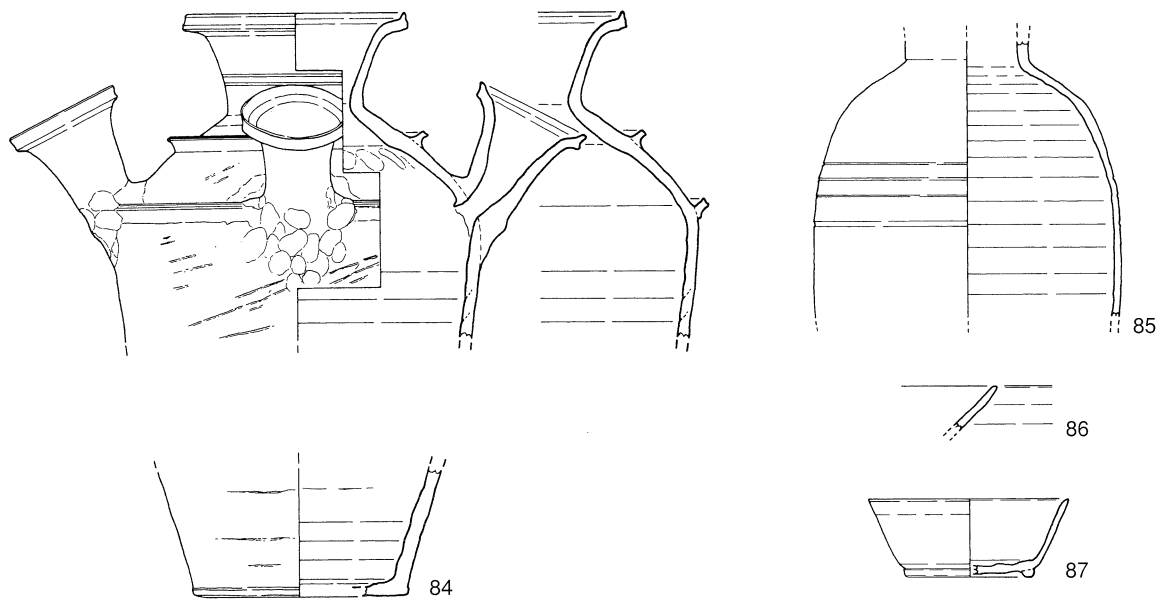
盛土中出土の51～53は底部及び高台の形態より10世紀前半～後半の範疇に収まるため、第1テラスの盛土は10世紀後半以降に造営されたと考えられる。また、流土中出土の55～70によると、第1テラスは8世紀後半～12世紀にかけて利用されたと考えられる。また、71～74の多口瓶は口縁部及び突帯の形態より9世紀末～10世紀前半の所産と考えられる。



第1テラス出土遺物



第2～3テラス間斜面出土遺物



第2テラス遺構出土遺物



第25図 B地区 出土遺物実測図(1)

(3) 第2～3テラス間斜面（第25図参照）

第2テラスと第3テラスの間の斜面部に設定したトレンチからは須恵器、土師器、土師質土器、黒色土器等が出土した。遺物はすべて流土中から出土している。遺物は高所の第1・2テラスから転落したものが多数を占めると考えられる。

75・76は須恵器坏蓋である。75は宝珠形からほぼ円柱化したつまみが付く。76は上面が平たく口縁端部には内面にゆるいナデを施す。77～79は須恵器坏である。底部から体部にかけてやや内湾しつつ立ち上がる。80は西播磨産須恵器広口壺である。内面に自然釉が付着する。81は畿内産の黒色土器椀である。内黒焼成で内面にヘラ磨きを施し、断面三角形の輪高台を貼り付ける。黒色土器A類畿内系Ⅲ類に分類される。82は須恵器壺である。底部から体部にかけて直線的に上方へ立ち上がる。83は土師質土器の長胴甕である。外面にはハケ目調整を施し、口縁部はゆるく外反した後わずかに肥厚し、端部は細くつまみ上げている。

遺物の年代は9世紀～11世紀の範疇に収まる。

(4) 第2テラス（第25・26図参照）

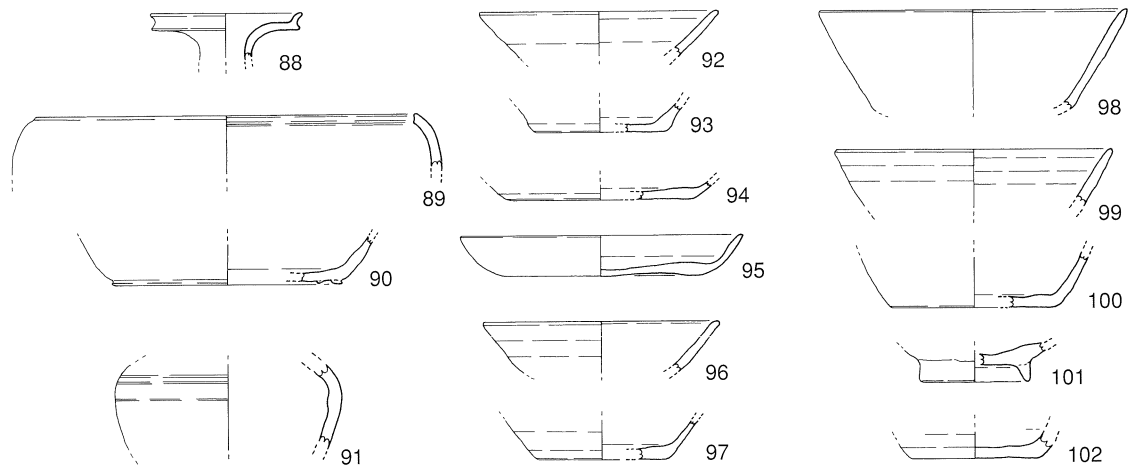
第2テラスからは須恵器、土師器、越州窯系青磁等が出土した。出土した遺物のうち流土中出土の遺物は高所の第1テラスより転落したものが混入していると考えられる。84はSB01を構成する柱穴SP16の廃絶に伴い掘削されたSK02に埋納された地鎮・鎮壇具と考えられる。85はSB03を構成する柱穴SP12埋土中より出土した。86はSB01に伴う排水溝SD02埋土中より出土した。87は盛土直上より出土した。88～102は地山・盛土頂上～流土中より出土した。

84は須恵器多口瓶である。広口壺の肩部に2条の断面長方形の突帯を内面を抑えながら接合し、その後対角線上に4個の小口縁部を接合している。小口縁部から肩部へ抜ける穴は、焼成前に外側から内側へ穿孔している。広口壺の外面は叩きを施した後横ナデを施し、内面には横ナデを施す。口縁部はゆるく外反した後、端部をつまみ上げる。土器外面には窯内の降灰による自然釉が全体に付着し、自然釉の厚さからは一方向より灰が吹きつけられたことが確認できる。兵庫県教育委員会の森内秀造氏によると以下のとおりであった。

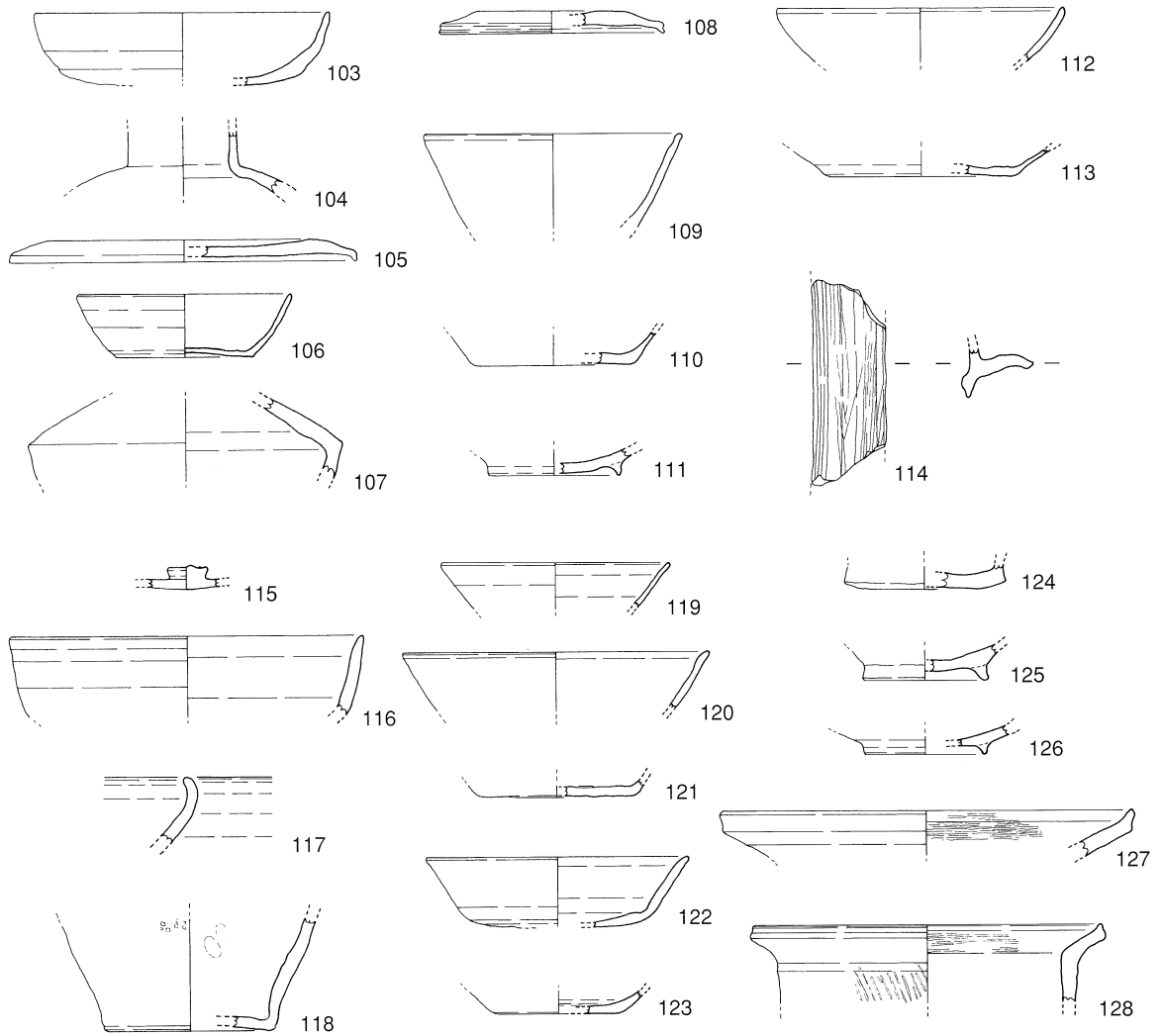
多口瓶は兵庫県相生市緑ヶ丘古窯址群で出土した須恵器双耳壺に製作技法・器形・胎土が共通しているため、兵庫県相生市周辺の窯において焼成されたものであると考えられる。しかし、原産地の窯址群において多口瓶の出土は未確認であるため、中寺廃寺跡出土多口瓶は特注品であったと考えられる。多口瓶の年代は緑ヶ丘古窯址群における双耳壺の編年に基づくと、9世紀末～10世紀初頭に製造されたものと考えられるが、突帯の形状や口縁端部の形状からはより古相の要素が認められるため、9世紀末に製作されたと考えられる。(※)

85は須恵器壺である。体部は丸みをもって立ち上がり、内面には横ナデ、外面には沈線





第2テラス流土中出土遺物



第3テラス出土遺物



第26図 B地区 出土遺物実測図(2)

を施す。86は中国浙江省越州窯産の青磁碗の口縁部である。太宰府市教育委員会の中島恒次郎氏によると以下のとおりであった。

越州窯系青磁碗の中でも良質の胎土を用い、全面施釉が多く、高台畳付の釉を削り、この部分と内面見込みに目跡が付く精製品の一類（I類）である。その中で、平底を呈し体部最下部および底部を回転ヘラ削りし、重ね焼きの目跡が体部外面最下部の斜行部と内面にあるもの（I-5類）、もしくはI-5類の底部外面周囲を浅く削って輪状高台とする無文で高台外面斜行部と底部内面に円形・三角形の目跡を多く持つもの（I-2aウ類）と考えられる（分類基準は山本 2000『大宰府条坊跡XV』による）。I-5類・I-2aウ類は9世紀後半から出現し11世紀中葉までが国内出土の最盛期とされる。

87は須恵器坏である。体部は直線的に上方に立ち上がり、底部に高台を貼り付ける。時期は8世紀後半と考えられる。88は西播磨産須恵器広口壺である。口縁部は大きく外反した後、上方に拡張している。89は須恵器鉢である。口縁部内側が窪み、2条の稜を成す。90は須恵器坏である。底部には低い高台を貼り付け、体部は斜め上方へ立ち上がる。91は須恵器壺である。外面に沈線を施し、自然釉が付着する。92・93・98・99は須恵器坏である。94・95は須恵器皿である。96・97は土師器坏である。100は須恵器壺である。平底で体部は丸みを持って立ち上がる。101は土師器椀である。輪高台を貼り付ける。102は土師器壺である。平底で底部はヘラ切りされている。

84よりSB01は9世紀末以降に廃絶されたと考えられる。また、85よりSB03は10世紀前半以降に廃絶されたと考えられる。また、地山・盛土直上～流土中出土の87～102は8世紀後半～10世紀後半の範疇に収まる。

※ 須恵器多口瓶の産地・形態については、京都国立博物館の尾野善裕氏、奈良文化財研究所の巽淳一郎氏のご指導を得た。

#### (5) 第3テラス（第26図参照）

第3テラスからは須恵器・土師器・土師質土器・黒色土器等が出土した。103～114は地山・盛土直上より出土し、115～128は流土中より出土した。

103は土師器坏で、底部から体部にかけては緩やかに立ち上がり、やや内湾する。104は須恵器壺である。105は須恵器坏蓋で、口縁端部をつまみ上げる。106は須恵器坏である。底部は若干上げ底気味で、体部は若干内湾しつつ立ち上がる。107は須恵器壺で、肩部の稜より上部に自然釉が付着する。108は須恵器坏蓋で、上部は平らで口縁端部をゆるくつまみ上げる。109・110は須恵器坏で、111・112は黒色土器椀である。共に内黒焼成である。113は土師器坏である。114は土師質土器の移動式の竈の焚口側面部分の破片で、内面が被熱し明赤褐色となる。115は須恵器坏蓋である。宝珠形と円柱形の間をつまみが付く。116は須恵器坏である。117は須恵器鉢である。口縁部は内湾している。118は須恵器壺の底部である。外面にタタキ、内面に指押さえが見られる。119～121は須恵器の坏である。122・

123は土師器の坏で、底部から体部にかけては緩やかに立ち上がる。124は円盤状高台を有する土師器坏である。125は輪高台が付く土師器坏である。126は輪高台が付く黒色土器椀で、内黒焼成である。127・128は土師質土器の長胴甕で、口縁部はゆるく外反した後、端部を細くつまみ上げる。口縁部内面にはハケ目調整が見られる。

地山・盛土直上出土の103～114は9世紀末～10世紀前半。流土中出土の115～128は8世紀後半～11世紀の範疇に収まる。

#### (6) 金属遺物

金属遺物については、香川県歴史博物館のご協力により撮影したX線透過写真を図版27に掲載した。129・132は第1テラス流土中より出土した。130は第1テラス盛土直上より出土した。131は第1テラス盛土中より出土した。133は第2～3テラス間斜面流土中より出土した。

129は円形を呈する6.9cm×6.3cm、厚さ0.2cmの鉄製品である。表面に文様の痕跡は認められなかった。X線写真によると円形の外郭線が見て取れる。鏡や寺院・仏像の装飾金具といった円形を呈する金具の一部と考えられる。130は鉄滓である。131は銅滓である。130・131には表面に空気の抜け穴やガラス質の融解物質が観察できる。132は鉄釘である。軸の部分が曲がるものの全体が完存している。復元される全長は約9.7cm、断面は0.6cm×0.6cmである。133は銅製品の破片である。長辺側は本来の形状を残していると考えられるが、短辺側は両側とも折れて欠損している。現存幅は4.8cm×1.8cmで厚さ0.2cmの薄い板状を呈する。

## 第5章 平成18年度中寺廃寺跡確認調査概要

### 第1節 遺構

#### (1) 概要

平成18年度の発掘調査はC地区を対象とした。C地区は中寺廃寺跡が位置する南東へ開けた谷懐の南側で確認した地区であり、讃岐山脈から北西方向に延びる尾根の北東側面にあたる。C地区の北東にA地区、北にB地区が所在し、南西にD地区が所在する。

C地区調査において石組遺構を16基確認した。そのうち石組遺構2・4・9について発掘調査を行った。(※)

※ 平成19年3月に行った踏査により、C地区から南へ約100m離れた谷、標高670～740mにおいて、新たに石組遺構を21基確認した(第42図参照)。それらはいずれもC地区石組遺構に比べ小規模であり残存状況も悪い。その性格については今後検討したい。

#### (2) 石組遺構の分布(第27図・第2表参照)

平成18年度の中寺廃寺跡C地区の発掘調査で、人頭大と拳大の和泉砂岩角礫で構築された石組遺構を合計16基検出した。これらの石組遺構は、笹の多尾から北北西に延びる尾根から左右にいくつもの尾根が派生する中で、標高740m付近から北西方向と東方向に分岐して延びる二つの尾根に挟まれた最奥部(馬蹄形を呈した部分の最奥部)に位置する。石組遺構の位置するこの最奥部を、周辺の地形も含めて詳細に見ると、北側と南側に前述した尾根があり、その間のほぼ中央部に北西方向に低い尾根が延びる。最奥部はそれによって二分され、両側は緩やかな傾斜の谷状を呈した地形となる。石組遺構は尾根からの傾斜角度が約24°とやや急な傾斜地と南側谷部の傾斜角度が約10°の緩やかな傾斜地、部分的には平坦地と認められる部分で検出している。

石組遺構は①標高687m付近に所在する一群(石組遺構5・6)、②標高688m付近に所在する一群(石組遺構3・4・7)、③標高689m付近に所在する一群(石組遺構1・2・8・9)、④標高690m以上に所在する一群(石組遺構10・11・12・13)があり、⑤それらと少し離れた石組遺構(石組遺構14・15・16)がある。①・②・③は平坦地から緩傾斜地にかけて立地し、④は急傾斜地に立地する。また、①②間、②③間には平坦地が帯状に続いている。

石組遺構に使用されている和泉砂岩角礫は基盤層中に多く含まれ、また付近の斜面に露出しており、付近の石を構築石材として利用したものと思われる。

石組遺構調査に際してトレンチ1～5を設定し、石組遺構周辺の基盤層の確認を試みた。

1トレンチは尾根鞍部から続く急傾斜地から低い尾根の頂部にかけて設定した。土層断面によると急傾斜地と尾根頂部の間に平坦面があり、平坦面から尾根頂部にかけて岩盤が高く

なり、尾根頂部で平坦となる。尾根頂部は若干の削平を受けたものと思われる。

2 トレンチは低い尾根頂部に南北方向に設定した。土層断面によると、地山頂部が削平されていることが確認できる。地山上面は地山と若干土質の異なる5層によって被覆されている。

3 トレンチは低い尾根頂部に東西方向に設定した。土層断面によると、西半分は地山と若干土質の異なる4層が平坦面西側縁辺部に堆積している。東半分においても地山と若干土質の異なる3・4層が平坦面西側縁辺部から地山上面にかけて堆積している。

4 トレンチは石組遺構の集中する付近において帯状の平坦地に直行する形で設定した。土層断面によると、地山は一定の角度で傾斜しており、地山上面を2・3層がほぼ一定の厚さで堆積している。3層は石組遺構2の基盤層と考えられる層(第32図1・2層)とほぼ同質であるため、石組遺構の基盤層は緩斜面上部まで広範囲の広がりを持っていることが確認できる。

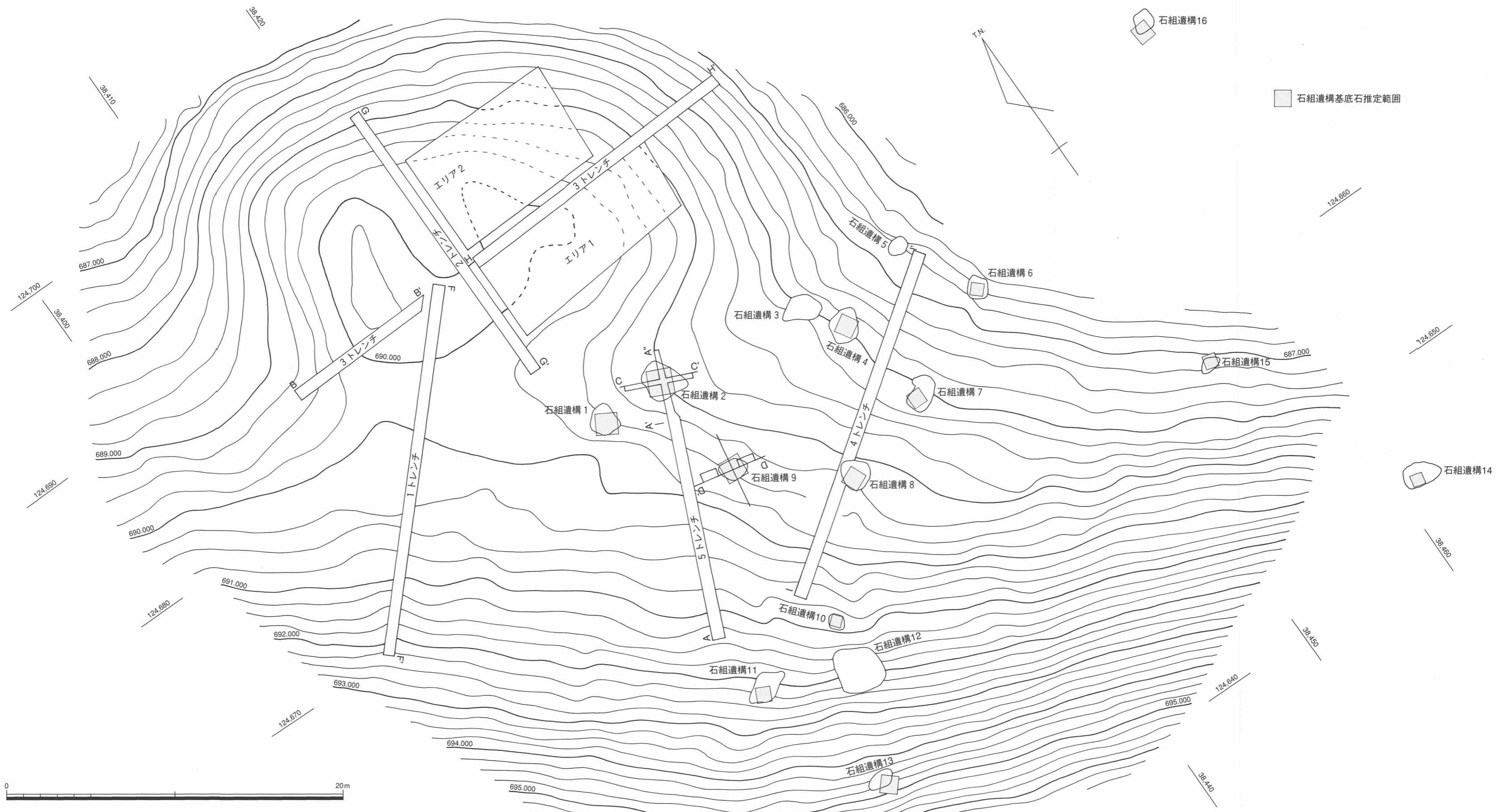
5 トレンチは石組遺構2から急傾斜地にかけて設定した。土層断面によると、4 トレンチで確認した石組遺構の基盤層とほぼ同じ土質の2層が平坦部から山側斜面にかけて堆積しており、一定の角度で下っている。

以上のトレンチ調査からは、石組遺構の基盤層と考えられる黒色シルトは、1 トレンチより南東の浅い谷においてのみ堆積していることが確認できた。また、2・3 トレンチを設定した低い尾根には地山と土質の異なる層が堆積しているため、尾根頂部を削平した土を周囲に盛土して造成した可能性がある。トレンチ調査の後、エリア1・2について平面的に遺構検出を試みたが遺構・遺物共に未確認であった。

( ) は推定値

石組遺構番号	標高:高 (m)	標高:中 (m)	標高:低 (m)	立地	南北幅 (m)	東西幅 (m)	基底石南北幅 (m)	基底石東西幅 (m)	基底石角度	出土遺物	残存状況	備考
1	—	689.664	—	平坦地と緩斜面の境	1.7	1.6	(1.2)	(1.4)	(西へ61°)	有 (須恵器1点表採)	基底石十1段	北東・北西・南西角は約45～35cmの石、角を除く側壁部は約20cmの石、中央部は約5～10cmの石。
2	689.696	—	688.822	緩斜面に隣接する平坦地	2.7	2.1	1.4	1.65	西へ61°	有 (近世遺物3点)	基底石十1～4段	側壁は約45～25cmの石、中央部は約10～5cmの石。中央部は基礎層直上に板石により面を作る。
3	—	688.580	—	平坦地に挟まれた緩斜面の上端	1.4	2.4	—	—	—	無	—	約40～10cmの石が不規則に堆積。基底石確認不可。
4	688.259	—	686.849	平坦地に挟まれた緩斜面の上端	1.8	2.2	1.0	1.2	西へ39°	有 (土師質土器1点)	基底石十1段	側壁は約35～25cmの石、中央部は基礎層直上に板石により面を作る。
5	—	686.737	—	平坦地に挟まれた緩斜面の上端	1	1.2	—	—	—	無	—	約15～10cmの石が表土上に散在。基底石確認不可。
6	686.901	—	686.408	緩斜面	1.3	1.2	(0.9)	—	(西へ48°)	無	基底石のみ	東角に約35cmの石、他の側壁は約20～15cmの石、中央部の石は転落して表土が露出。
7	—	688.360	—	緩斜面に挟まれた平坦地	1.2	2.2	(1.0)	(1.0)	(0°)	無	基底石のみ	約20～15cmの石が不規則に堆積。その隙間に約40～30cmの石があり、それらが平面的に四角く並ぶことから、基底石と考えられる。
8	—	689.542	—	平坦地に隣接する緩斜面	1.8	1.8	(1.1)	(1.0)	(西へ19°)	無	基底石十2段	北東・北西角は約30～25cmの石、中央部は約10～5cmの石。
9	690.009	—	689.461	緩斜面	1.4	1.7	1.33	1.16	0°	有 (近世遺物2点)	基底石十1～4段	外縁部は約30～25cmの石を小口積、中央部は一边約15～10cmの石。
10	691.114	—	690.700	やや急斜面	0.9	0.9	—	—	(西へ40°)	無	基底石十1段	北・西角に30～25cmの石、北辺は約40～35cmの石、中央部は約10～5cmの石。
11	692.531	—	691.818	やや急斜面	1.4	1.9	(1.0)	(1.0)	(東へ26°)	無	基底石のみ	外縁部は約30～20cmの石、中央部の石は転落して表土が露出。
12	692.440	—	691.274	急斜面	2.7	2.7	—	—	—	無	—	約150～15cmの石が散在。基底石確認不可。
13	694.935	—	694.180	急斜面	1	1.4	(1.0)	(1.0)	(西へ50°)	無	基底石十2段	北角外縁部に平坦面を持つ約35cmの石、外縁部は約20～15cmの石、中央部は約15～10cmの石。
14	689.906	—	689.620	急斜面	1.4	2.2	—	(0.9)	(東へ8°)	無	基底石のみ	北角は約50～25cmの石、西辺は40～15cmの石、北辺は約30～25cmの石、中央部は約10～5cmの石。
15	687.372	—	687.047	急斜面との境界付近の緩斜面	0.8	0.8	—	—	—	無	基底石のみ	北辺は約30～25cmの石、他は約15～10cmの石。
16	681.720	—	681.070	急斜面	1.5	1.2	(0.9)	(0.9)	(西へ6°)	無	基底石十2～3段	外縁部は約30～25cmの石、中央部は約20～15cmの石。

第2表 中寺廃寺跡C地区石組遺構



第27図 C地区 平面図

1 トレンチ

- 1. 腐植土
- 2. 褐灰色シルト土 (流土)
- 3. 淡灰黄色シルト (流土)
- 4. 濁灰黄色シルト (流土)
- 5. 淡灰黄色シルト 15.0~20.0cm礫混 (流土)
- 6. 淡橙黄色シルト 1.5~3.0cm白色礫多混 (地山)

F

692.000

691.000

690.000

F'

G

690.000

689.000

G'

2 トレンチ

- 1. 腐植土
- 2. 濁褐色砂質土 (流土)
- 3. 褐灰色砂質土 (流土)
- 4. 淡灰色シルト (流土)
- 5. 淡灰黄色シルト 2.0~5.0cm礫少混
- 6. 淡灰黄色シルト 5.0~10.0cm礫多混 (地山)

H

690.000

689.000

688.000

687.000

H'

3 トレンチ東

- 1. 腐植土
- 2. 褐灰色砂質土 (流土)
- 3. 淡灰黄色シルト 2.0~5.0cm礫少混
- 4. 淡黄色シルト
- 5. 淡灰黄色シルト 5.0~20.0cm礫多混 (地山)

I

690.000

689.000

688.000

687.000

I'

4 トレンチ

- 1. 腐植土
- 2. 黒色シルト 2.0~5.0cm礫多混 (石組遺構基盤層)
- 3. 淡黄色シルト 1.0~5.0cm礫多混 (地山)

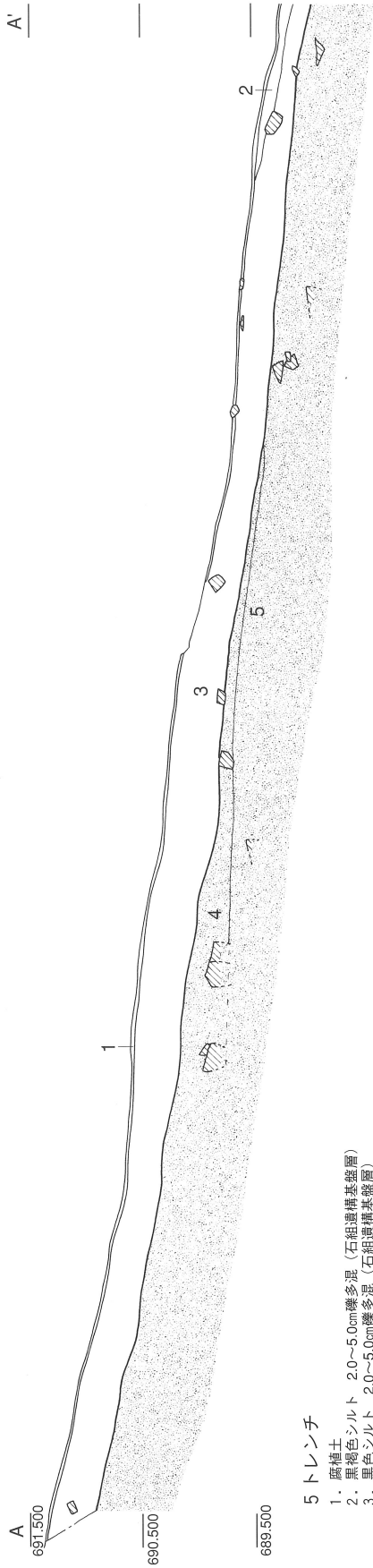
地山

石



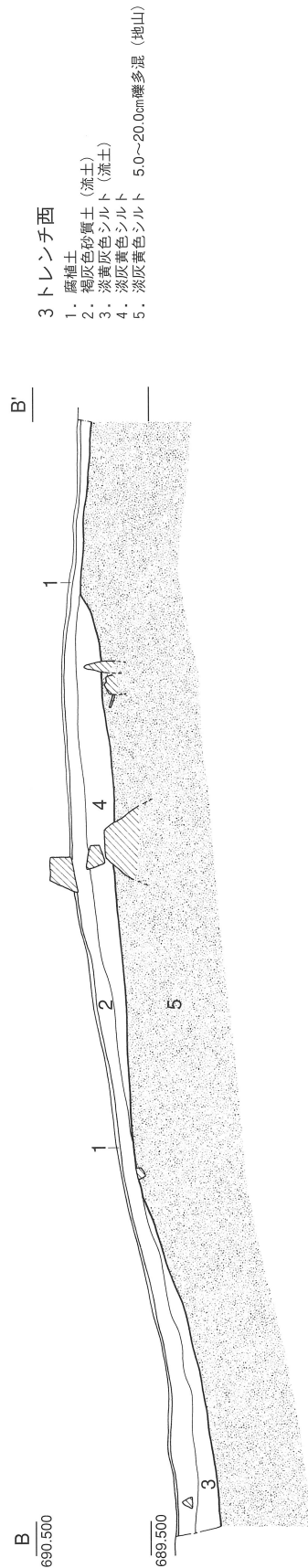
第28図 C地区 断面図(1)





5 トレンチ

1. 腐植土
2. 黒褐色シルト 2.0~5.0cm礫多混 (石組遺構基盤層)
3. 黒色シルト 2.0~5.0cm礫多混 (石組遺構基盤層)
4. 淡黄色シルト 1.0~3.0cm礫多混 (地山)
5. 淡灰黄色シルト (地山)



3 トレンチ西

1. 腐植土
2. 黒褐色砂質土 (流土)
3. 淡黄灰色シルト (流土)
4. 淡灰黄色シルト
5. 淡灰黄色シルト 5.0~20.0cm礫多混 (地山)



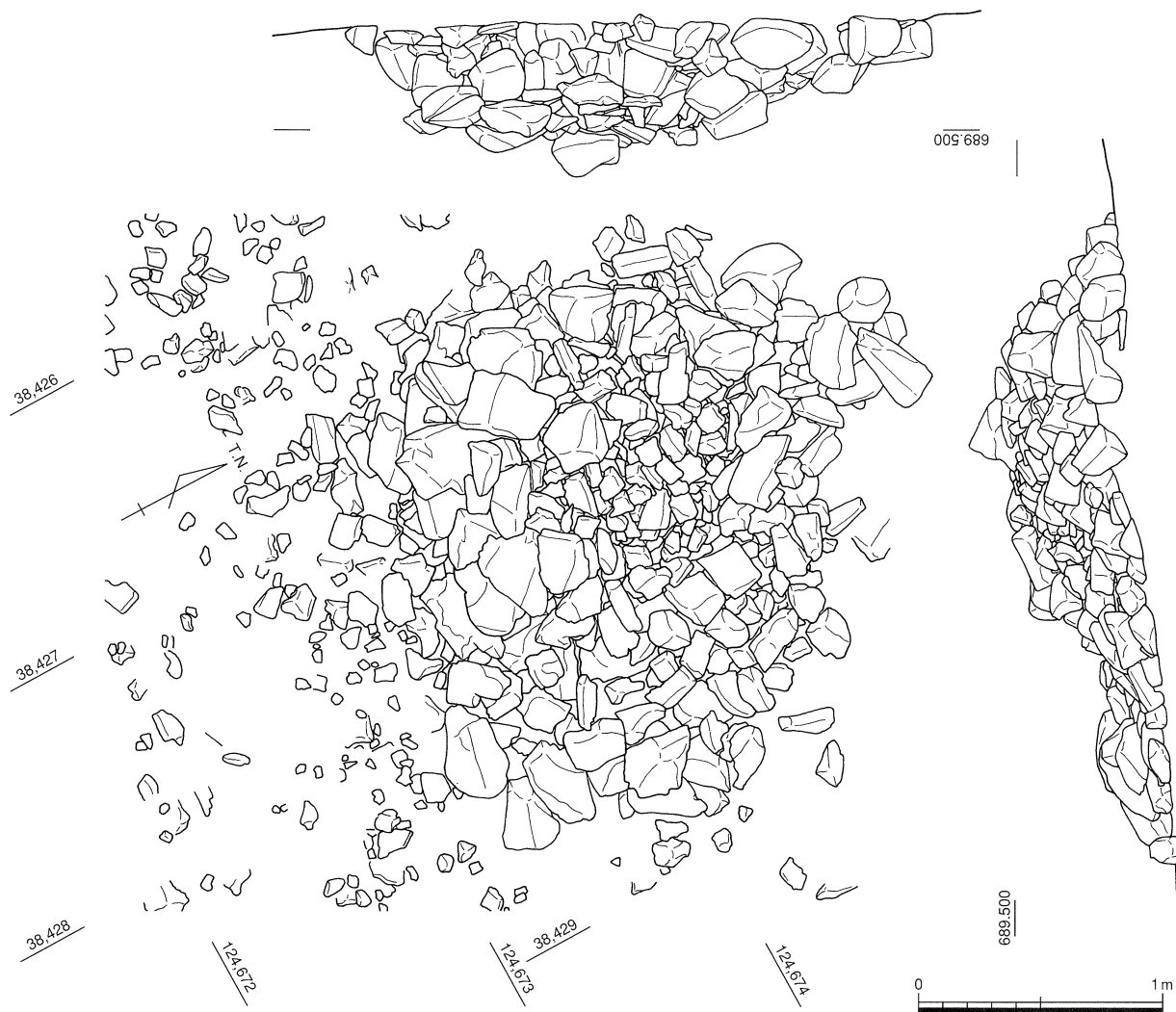
地山



石



第29図 C地区 断面図(2)



第30図 C地区 石組遺構2 現況平・立面図

### (3)石組遺構2

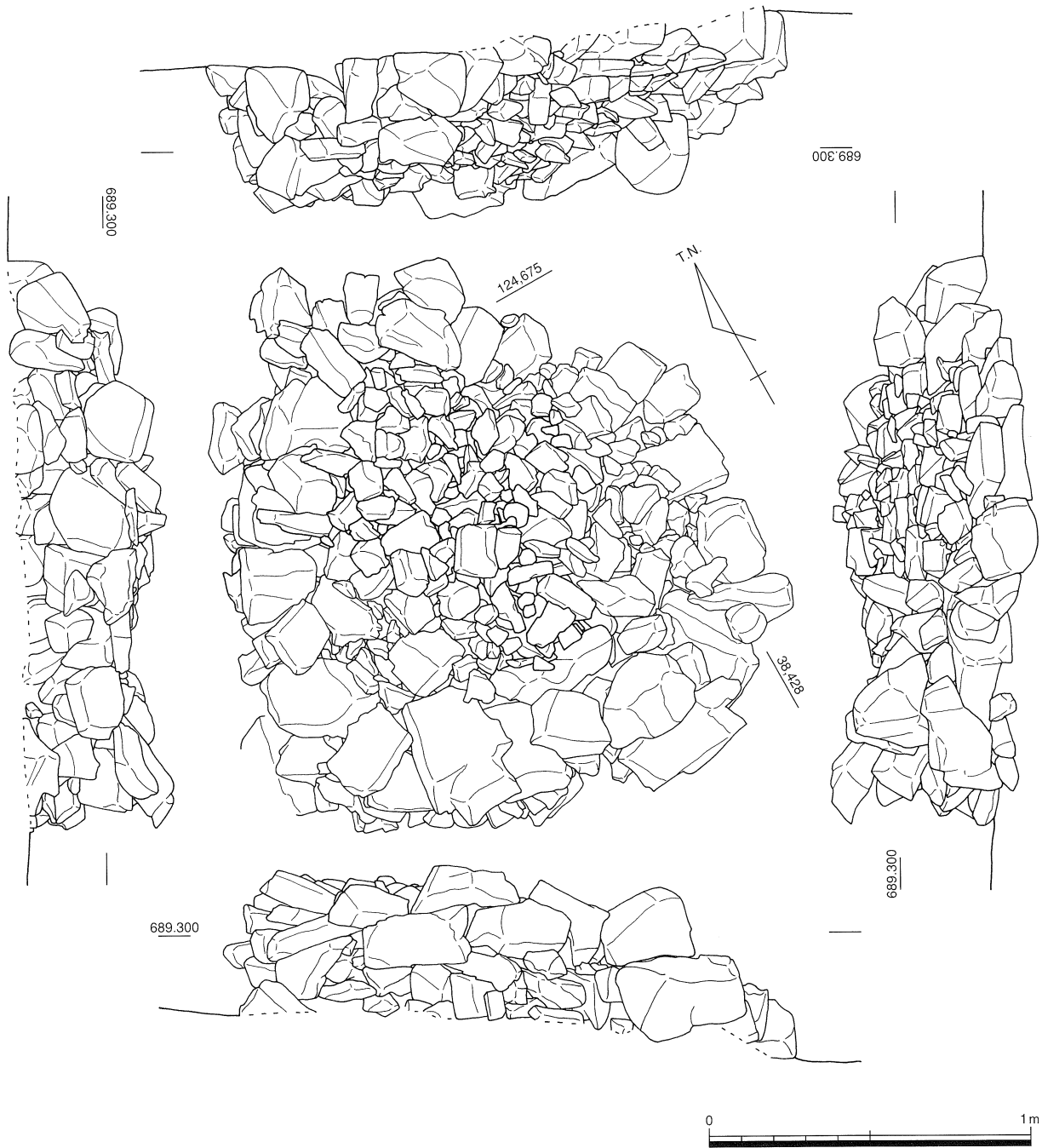
#### ① 概要

石組遺構2についてはC地区に所在する石組遺構群の中で残存状況が良好であり、石組遺構の構造理解の上で特に重要な遺構であると考え、発掘調査を実施した。

調査はまず検出状況を写真で記録した後、苔・落ち葉等を除去し写真・図面で現況の状況を記録した。その後転落した石を除去し本来の形状を残すと考えられる状況を写真・図面で記録した。その後内側の石を半分除去し断面図・基底面平面図の作成を行い、構造を確認した。最後に十字方向のトレンチを設定して下層の岩盤まで断ち割り、下部構造の確認を行った。

#### ② 立地と現況（第27・30図、図版29・30参照）

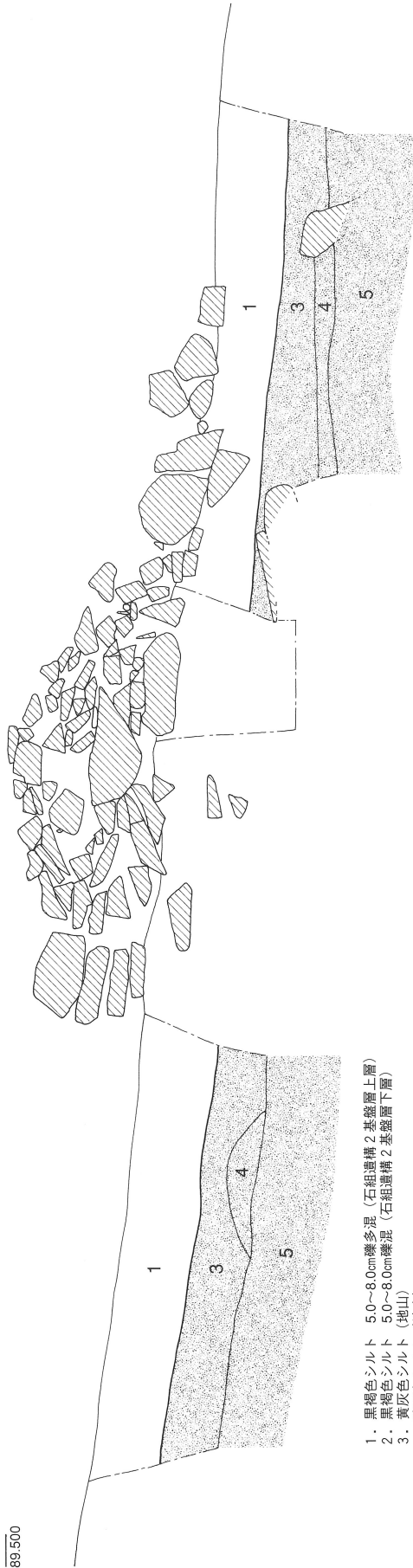
石組遺構2はC地区石組遺構群の中で石組遺構1・9・8と共に東方向に下る浅い谷の



第31図 C地区 石組遺構2平・立面図

C

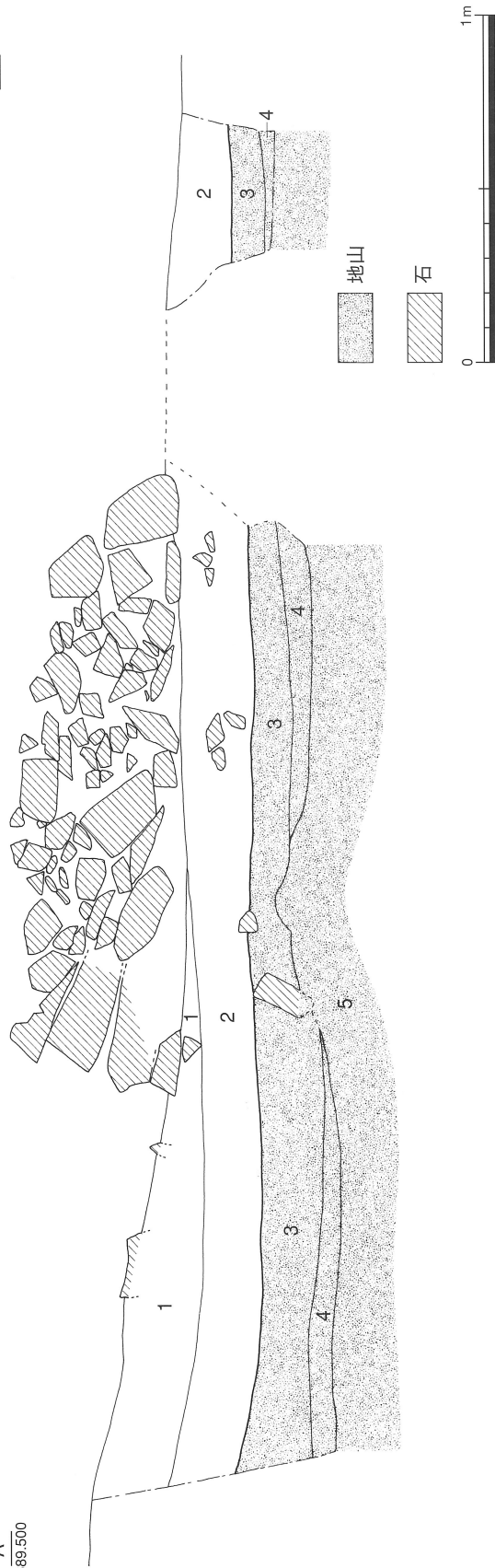
689.500



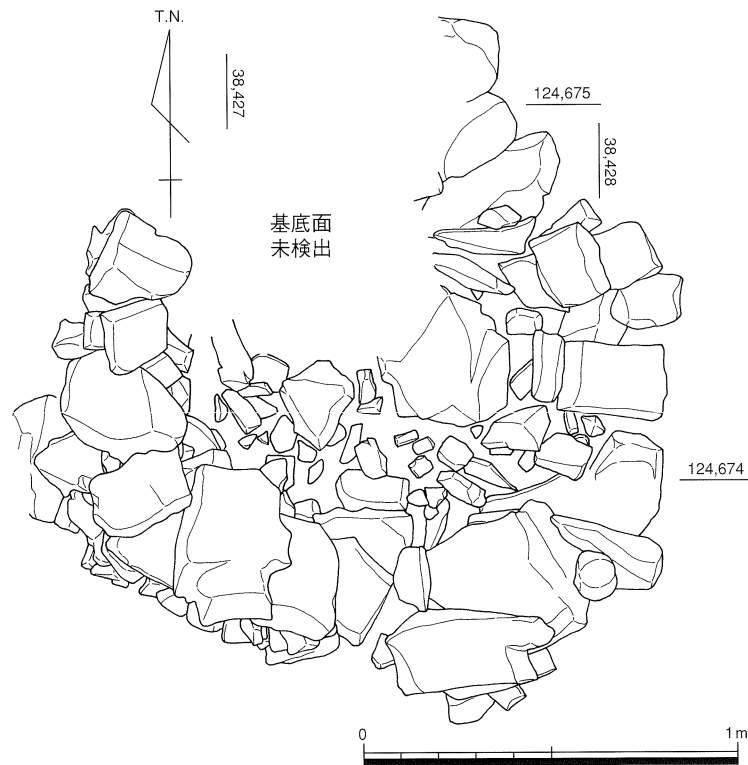
- 1. 黒褐色シルト 5.0~8.0cm礫多混 (石組遺構2基盛層上層)
- 2. 黒褐色シルト 5.0~8.0cm礫混 (石組遺構2基盛層下層)
- 3. 黄灰色シルト (地山)
- 4. 淡灰色シルト (地山)
- 5. 岩盤

A''

689.500



第32図 C地区 石組遺構2断面図



第33図 C地区 石組遺構2 基底面平面図

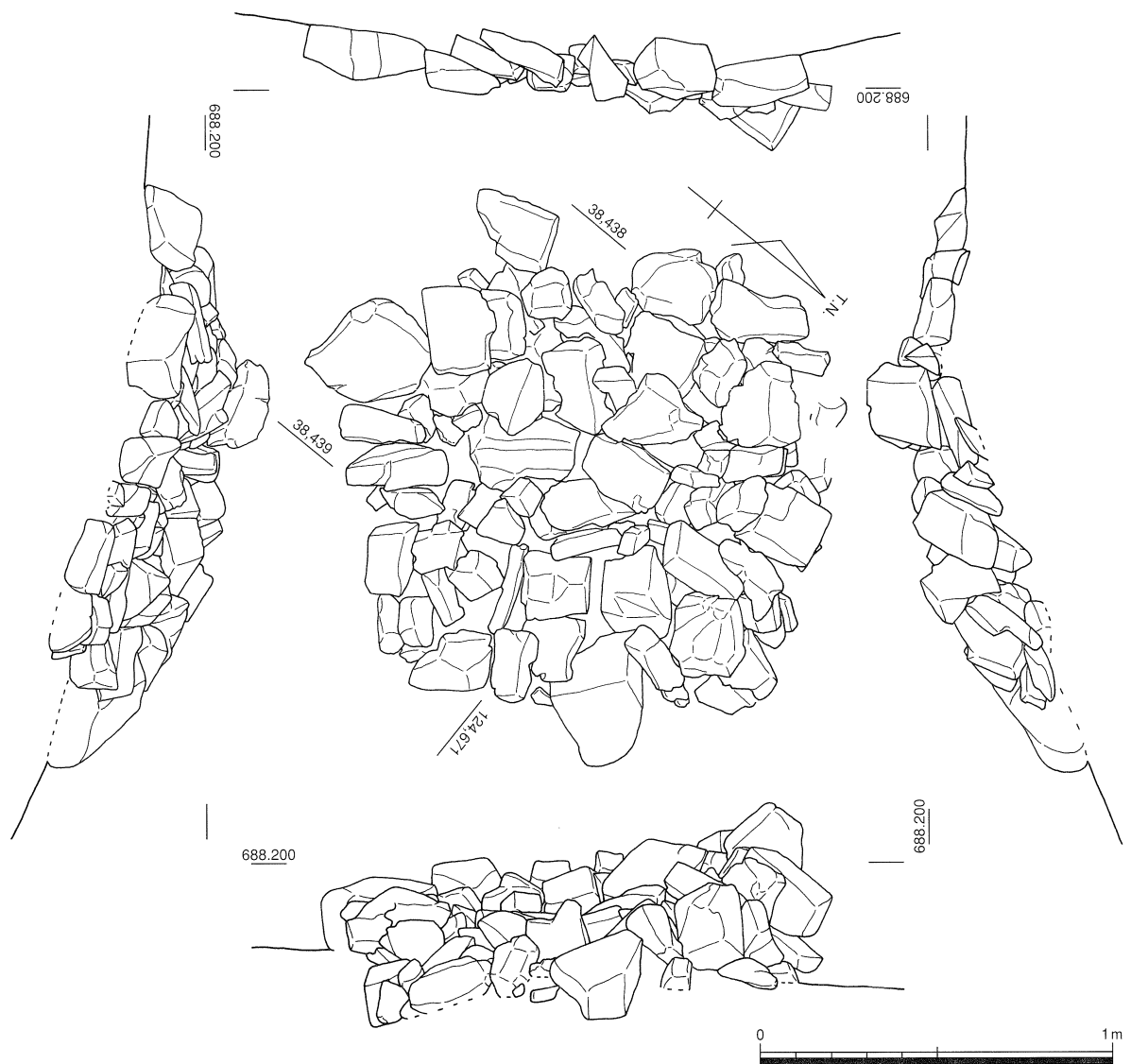
最奥部の標高約689m地点に所在する。石組遺構の周囲約1.0～0.5mは付近の緩斜面に比べ傾斜が緩やかな平坦地形を成す。

検出状況の南北方向最長辺の長さは約2.7m、東西方向最長辺の長さは約2.1m、残存高は約0.5mであった。石組遺構の山側にあたる南西側は良好に残存するが、谷側にあたる北東側は石が崩落していた。また、南西側の側石は上位の石が石組内部へずれ込んでいた。石組遺構の上面は西～南半は人頭大の和泉砂岩角礫で覆われ、東～北半は拳大の和泉砂岩角礫で覆われていた。

### ③ 石組遺構の構造 (第31～33図、図版31・32参照)

落石除去後に確認した状況によると、平面形は基底石の南北幅約1.4m、東西幅約1.6mの若干側辺が膨らむ隅丸方形を呈する。石組遺構は四方向の側面に1辺約40～25cmの人頭大の和泉砂岩角礫を小口積みして側壁を構築している。側壁側面をそろえるために調整を行った形跡は認められず、側面はやや凸凹のある面となる。人頭大の和泉砂岩角礫で側壁を構築した後、その内側に1辺約10～5cmの拳大の和泉砂岩角礫を充填している。側壁はほぼ垂直に3～4段程度積み上げているが、面を形成して積み上げた等の規則性は認められず、やや乱雑に積み上げていることが確認できる。

立面図・断面図によると、山側斜面にあたる東・南辺の側壁石材は上段の石が下段の石



第34図 C地区 石組遺構4平・立面図

の内側にずれ込んでいることが確認できる。谷側斜面にあたる北東角付近の石は転落し、残存しない。東辺の側壁は基底石のみ残存するが、各石間に隙間が開いており、若干原位置より動いているものと思われる。

また、内側の石を除去後、基盤層上面で板石を多く用いて構築された基底面を確認した(第33図)。基底面のほぼ中央には1辺約40cmの大ぶりの板石が存在した。

#### ④ 下部の構造 (第32図、図版32参照)

石組遺構中央を十字方向に掘削したトレンチによると、石組下部に土坑等の下部遺構は検出できなかった。基底石下部が3層の上位に位置するため、3層が石組構築の際の基盤層であると思われる。基盤層の傾斜角度については東西方向約 $8^\circ$ 、南北方向はほぼ平坦

となる。

#### (4) 石組遺構 4

##### ① 概要

石組遺構 4 には C 地区石組遺構群の中で残存状況が良好であったため、調査を実施した。石組遺構 4 は石組遺構 3 と隣接していた。

調査はまず検出状況を写真で記録した後、苔・落ち葉等を除去し写真・図面で現況の状況を記録した。その後転落した石を除去したところ、本来の形状を保つのは基底石のみであったため、基底石の状況を写真・図面で記録した。

##### ② 立地と現況（第27図、図版33参照）

石組遺構 4 は C 地区に所在する石組遺構群の中で石組遺構 3・7 と共に東方向に下る浅い谷の最奥部から若干下った標高約 688m の地点に所在する。石組遺構の山側と谷側には帯状の平坦地があり、石組遺構 4 はこの平坦地に挟まれた北東に下る緩斜面の上端に石組遺構 3 と隣接して位置する。

検出状況の南北方向最長辺の長さは約 1.8m、東西方向最長辺の長さは約 2.2m、残存高は 0.4m であった。

石組遺構の山側にあたる南西側は良好に残存するが、谷側にあたる北東側は石が崩落していた。

##### ③ 石組遺構の構造（第34図、図版34参照）

落石除去後に確認した状況によると、平面形は基底石の南北幅約 1.0m、東西幅約 1.2m の方形を呈する。側壁は基底石のみ残存している。四方向の側面に 1 辺約 40～25cm の人頭大の和泉砂岩角礫を積んでいるが、側壁側面をそろえるために調整を行った形跡は認められず、側面はやや凸凹のある面となる。内側の石は外側の石と同様な石材を用いるものの、若干板石も用いており、石組遺構 2 と同様基底面を構築していた可能性がある。

##### ④ 下部の構造

石組遺構の下部を掘削していないため、確定はできないが、石組遺構の側壁基底石及び基底面の下位に堆積する埋土は下部を調査した石組遺構 2・9 と同様の埋土であり、石組遺構 4 の基底面はこの埋土と考えられる。



第35図 C地区 石組遺構9平・立面図

(5) 石組遺構9

① 概要

石組遺構9についてはC地区石組遺構群の中で残存状況が良好であり、石組遺構の構造理解の上で重要な遺構であると考え、発掘調査を実施した。

調査はまず検出状況を写真で記録した後、苔・落ち葉等を除去し写真・図面で現況の状況を記録した。その後転落した石を除去し本来の形状を残すと考えられる状況を写真・図面で記録した。その後半分の内側の石を除去しながら断面図を作成しつつ構造を確認し、最後に石組遺構外に基盤層確認のためのトレンチを設定し、下部の状況について確認した。

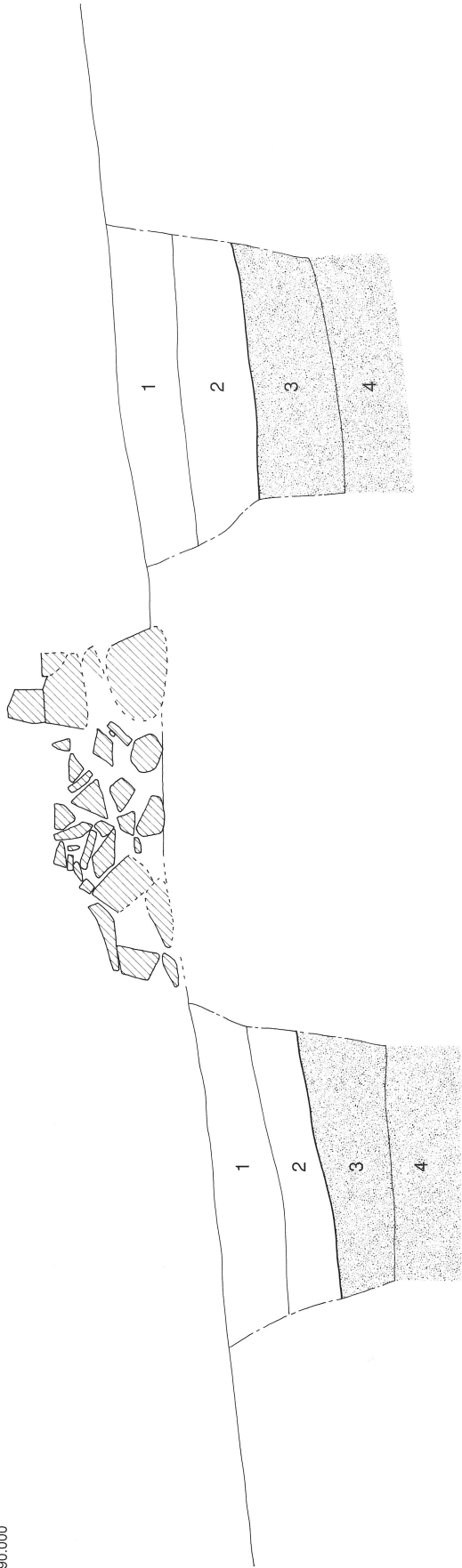
② 立地と現況（第27図、図版35参照）

石組遺構9はC地区石組遺構群の中で石組遺構1・2・8と共に東方向に下る浅い谷の



D'

D  
690,000



- 1. 黒褐色シルト 2.0~5.0cm礫多混 (石組遺構9 基盤層上層)
- 2. 黒色シルト 2.0~5.0cm礫多混 (石組遺構9 基盤層下層)
- 3. 黄褐色シルト 5.0~7.0cm礫混 (地山)
- 4. 淡黄色シルト 10.0~15.0cm礫混 (地山岩盤)

E'

E  
690,000



第36図 C地区 石組遺構9 断面図